

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉

高校版

2019
Volume 2

6月

VIEW21

越境せよ！

特集

Why, What, How からひも解く カリキュラム・マネジメント

——学校を超えた教師の対話から考える——

改革事例から導く！
「学校教育デザイン」を描く道標

佐賀県立佐賀西高校

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

Special

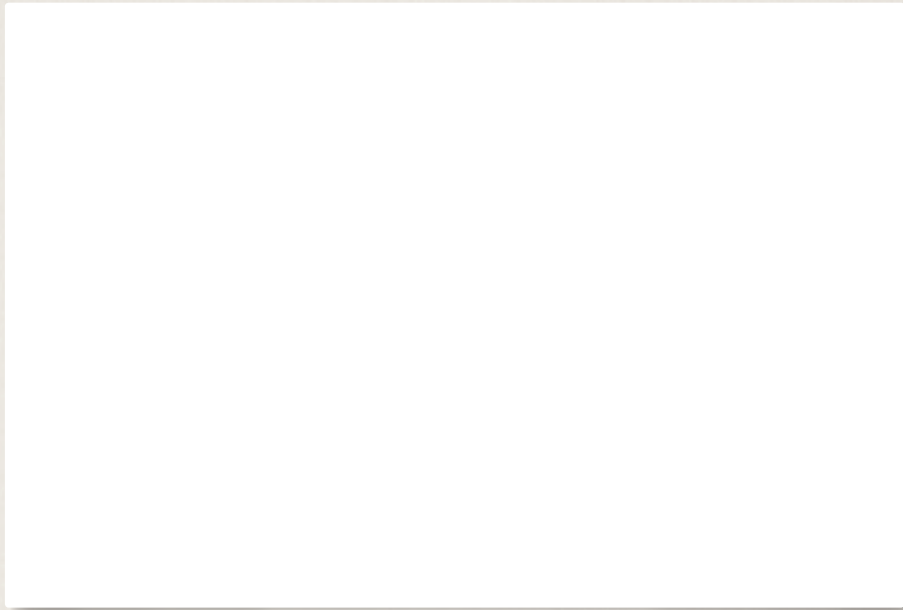
5教科横断型授業

仮想の学校「平和町高校」の教師陣

指導変革の軌跡

東京都立狛江高校

富山県・私立新川高校



自分でつくる道

先生 1年生の時から取り組んできたSGH*¹の活動では、どの班も自分たちでテーマを決め、学校内外でたくさんの気づきを得ていましたね。

生徒 住民の方々と直接話をして、限界集落の課題を現実のものとして受け止められました。地域活性化に役立つ、特産品のべに花を使ったものを絶対作るんだと必死に方法を探しました。先生にも相談しながら製作したハーバリウム*²が地域のお祭りで完売した時は、すごくうれしかったです。

先生 知らない土地に飛び込むことは挑戦だったと思うけれど、それが新たな出会いを生み、自分たちの力以上の成果を得たことは大きな自信になったと思います。

生徒 先生のアドバイスは、次の活動指針になりました。私たちの班は「アジア諸国との国際関係」と大きなテーマだったので、調べれば調べるほど自分たちに何ができるのか分からなくなりました。そんな時、先生に「地域にも国際関係はある。例えば、教会にはいろいろな国の人が集まるよね?」と言われ、自分たちの視野の狭さに気づきました。早速、マ・スール*³に教会を紹介してもらい、今は地元での国際交流会に向けて動いています。

生徒 私たちの班も、ネパールの女子教育に役立つ教具を作る際、先生に見学を勧められた附属幼稚園で幼児が遊びながら学ぶ様子を見て、たくさんのヒントを得ました。メンバーからアイデアが次々に出てきて、それを基に教具を3種類つくり、ネパールに送りました。その活用法を聞いて、改善に生かしたいと思っています。

先生 先生のアドバイスは、あくまでも選択肢の1つ。自分たちなりに考えて行動したから、素晴らしい成果につながったんだね。そして、班の中で課題を発見し、根拠や目的をきちんと説明しながら相談するようになったことに、大きな成長を感じています。

生徒 同じテーマの下に集まっても、関心のあることは違うし、得手不得手もある。それを考えて役割を分担し、段取りをつけていかないと、物事は前に進まないのだと実感しました。

生徒 3年生になって受験勉強との両立は大変だけれど、中途半端に終わらせずに活動をやり切りたいです。そして、大学に入ってから活動も続けていきたいです。

先生 みんなが新たな挑戦をし、自分の道を切り拓くことを楽しみにしています!

鉢呂智子先生 教職歴 24 年。同校に赴任して 24 年目。進路指導部長。

宮城県・私立仙台白百合学園中学・高校 全日制/普通科/女子校/1学年約 120 人/2019 年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、宮城教育大、千葉大、東京大、九州大などに 12 人が合格。私立大は、仙台白百合女子大、慶應義塾大、上智大などに延べ 141 人が合格。

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。 *2 ドライフラワーなどをビンにつめたインテリア雑貨。 *3 修道女(シスター)のこと。

2 特集

Why, What, How からひも解く カリキュラム・マネジメント

— 学校を超えた教師の対話から考える —

講師 関西大学 教育推進部 教授 森 朋子 / 静岡県立御殿場高校 教諭 美那川雄一 / 岡山県立林野高校 校長 三浦隆志

4 Why

越境し、学び合いながら目指す「これからの学校づくり」

とじ込み

理解！ 習得！ 自校に展開！

生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント
 ワークショップレポート

6

What ① ● カリキュラム・マネジメントとは何かを学ぶ
 学校全体での「水平的学習」の推進に向け、
 学校教育目標の構造化を

10

What ② ● 学校教育目標のあり方を考える
 自校の現状分析で把握した課題を基に、
 生徒の将来を見据えた教育目標を設定

14

How ● カリマネ推進の3大ポイントを学ぶ
 学校教育目標の見直し、学習評価、学校全体での推進を
 どう行えばよいのか？

20

ワークショップを終えて 講師、参加者、編集部への振り返り

24

改革事例から導く！「学校教育デザイン」を描く道標

佐賀県立佐賀西高校

「総合的な学習の時間」での探究学習の実践を起点に、
 カリキュラム・マネジメントを推進

28

主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

5教科横断型授業

仮想の学校「平和町高校」の教師陣
 5教科横断型授業で、1テーマを多角的に捉えさせ、
 授業と社会のつながりを考えさせる

Special

34

指導変革の軌跡

34

東京都立柏江高校

大学入試改革への対応

学年団が丸となった指導改善で、
 生徒の思考力・判断力・表現力を育成

38

富山県・私立新川高校

地域と連携したPBL

自己肯定感を醸成し、何事も粘り強く行う生徒を育てる
 「新川創生プロジェクト」

42

改良！ 指導ツール ビフォーアフター

探究学習指導・共有シート

46

学校を飛び出し、学びを巡る 高校教師 study-tour

幼稚園の自由遊び

自分の好きな遊びに没頭する中で「学びに向かう力」を育む

48

大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

48

大阪府立大学 現代システム科学域 環境システム学類
 領域横断的な課題解決能力を身に付け、持続可能な社会の実現を目指す

50

東洋大学 食環境科学部 食環境科学科
 フードサイエンス専攻

低学年次から多くの実験を経験させ、食の安全に携わる人材を育成

52

これからの会議・研修のあり方、つくり方

実践者に聞く！

三四郎の学校 事務局長 日賀優一

対話の積み重ねが一人ひとりの中に変化の芽を生む

64

Reader's VIEW

巻末

教師を育てた言葉たち

「本当に美味しい米の作り方を知ってるか？」

新潟県立長岡高校 山崎健太

今月の表紙メッセージ

越境せよ！

◎「カリキュラム・マネジメント」（以下、カリマネ）への先生方の関心が高まっています。その背景には、新学習指導要領の移行措置が始まり、いよいよカリマネを本格的に推進しようとした結果、様々な課題が顕在化してきたことがあると思われます。多くの学校がまだ答えを持っていない課題ゆえ、学校の違いを超えて、それぞれの悩みや不安を共有し、各校のカリマネの実現に向けて知恵を出し合うことが必要な時機なのではないか—編集部ではそう考え、2019年3月末に、全国の高校の先生が集まり、カリマネについてとことん考え、対話するワークショップを実施しました。今号の特集では、その模様と、先生方の対話を通じて見えてきたカリマネ推進のポイントや課題についてお伝えします。キーワードは、「越境」です。

『VIEW21』高校版
 編集長 柏木崇



Howからひも解く マネジメント

から考える——

Why

越境し、学び合いながら目指す
「これからの学校づくり」

P.4

とじ込み

理解！ 習得！ 自校に展開！
生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント
ワークショップレポート

What

①カリキュラム・マネジメントとは何かを学ぶ

P.6

②学校教育目標のあり方を考える

P.10

How

カリマネ推進の3大ポイントを学ぶ

P.14

①学校教育目標のブラッシュ・アップ

②カリマネと学習評価のあり方

③カリマネを学校全体に浸透させるポイント

ワークショップを終えて

P.20

ワークショップの
様子を動画で公開

今回のワークショップの様子を動画でご覧いただけます。
各ページにあるQRコードを読み取ってアクセスしてください。

講師の方々



関西大学
教育推進部 教授
森 朋子



静岡県立御殿場高校
教諭
美那川雄一



岡山県立林野高校
校長
三浦隆志

*プロフィールは2019年3月時点のものです。



特集

Why, What,

カリキュラム・

— 学校を超えた教師の対話

高大接続改革が進み、カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ【※】）に対する学校現場の関心が高まる中、カリマネを自校でどのように進めていけばよいのかといった声がよく聞かれる。そこで、今号では、2019年3月にVIEW21編集部が主催した、カリマネをテーマにしたワークショップの内容を基に、「なぜ」カリマネを行うのか、今求められているカリマネとは「何か」、それを「どのようにして」進めればよいのかという、Why, What, Howの視点で、カリマネ推進のポイントを整理する。

※本特集では、「カリキュラム・マネジメント」を「カリマネ」と表記することを基本とします。



理解！ 習得！ 自校に展開！ 生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント ワークショップレポート

カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）の推進を通じて学校改革や指導改善に熱い思いを持った高校教師が全国から集まり、学校・立場・教科などの違いを超えて対話をしながら、カリマネへの理解を深め、自校での展開を考えた。その様子をレポートする。

ワークショップ概要

- 日時 2019年3月23日(土) 10時30分～17時30分
- 会場 株式会社ベネッセコーポレーション 岡山本社(岡山市北区)
- 参加者 全国の高校教諭42人 ※地方別内訳(関東6人、東海4人、関西9人、中国12人、四国4人、九州7人)
- 参加費 3,000円(税込み、昼食代を含む)
- 監修・ファシリテーター 関西大学教育推進部 教授 森 朋子 「三四郎の学校」事務局長 日賀優一
- 講師 関西大学教育推進部 教授 森 朋子 静岡県立御殿場高校 教諭 美那川雄一 岡山県立林野高校 校長 三浦隆志 (2019年3月現在)
- ワークショップの大きな流れ
参加者5～6人を1グループとして進行。(1グループにつきベネッセの社員を1～2人配置)
- 10:30 開会挨拶、講師紹介
- 10:50 **グループ結成ワーク** (自己紹介、グループ名決定)
- 11:10 **課題整理**「なぜ、カリマネなのか？」 関西大学教育推進部 教授 森 朋子
- 11:30 **事例報告** 「静岡県立御殿場高校の取り組み」 静岡県立御殿場高校 教諭 美那川雄一
- 12:00 **グループワーク** 御殿場高校の取り組みに対しての共感点・疑問点などを語り合う
- 12:30 **トークセッション** 美那川先生と参加者の質疑応答
- 13:00 昼食
- 13:50 **3つの分科会** (3つの中から1つ選んで参加)
- 15:35 **グループワーク** 各分科会の内容をグループ内で共有
- 16:10 **個人ワーク** 個人のカリマネ行動計画シートを記入
- 16:30 **グループワーク** 個人のカリマネ行動計画の内容をグループ内で共有
- 16:50 **グループワーク** グループのカリマネ行動計画を検討・立案
- 17:00 **グループワーク** グループを超えて今日の学びの成果を共有
- 17:15 **グループワーク** 他グループから得た学びや感動をグループ内で共有
- 17:30 プログラム終了

10:50

グループ結成ワーク



ワークショップへの期待をグループで語り合う

今回のワークショップは、5～6人で構成されるグループを拠点に進められたことから、まずは自己紹介を兼ねたグループ結成ワークが行われた。各自が持参した地元名産のお菓子などを披露しながら、名前や学校名、担当教科、分掌、更に、参加の理由やワークショップへの期待などを伝え合った。食べながら、お菓子にちなんだグループの名前をつけ、メンバー間の親睦を深めた。



11:10

課題整理

なぜ、カリマネなのか？
森朋子教授の講演



なぜカリマネを行うのか、カリマネとは何かを学ぶ

学習理論の研究者である森朋子教授が、カリマネが必要な理由やカリマネの実現に向けたプロセス、学校教育目標の意義などを解説。森教授は、学習者(生徒)の実態を踏まえてカリマネを行う重要性を強調した。参加者は、事前に配信された学習動画でも予習してきており、森教授の話を中心して聞いている様子が見られた。



11:30

事例報告

静岡県立御殿場高校の取り組み
美那川雄一先生の報告



生徒の実態をどう捉えて教育目標を立てるか？

御殿場高校ではどのようにカリマネを進めているのか。美那川先生が課題意識を持った発端、読解力のテストを行って生徒の実態を把握、その後、他の教師とともに取り組みを進めている過程を紹介した。気づきを可視化し、グループで共有できるよう、「共感した点」「違和感・疑問・不安を持った点」をワークシートに書き込みながら話を聞いた。



12:00

グループワーク・トークセッション

美那川雄一先生との質疑応答



共有した共感点や疑問点から講師への質問をまとめる

美那川先生の話聞きながら記入したワークシートの内容をグループ内で共有した上で、美那川先生への質問を各グループ2つに集約。それらをスライドに映し、美那川先生が回答していった。多くのグループから、組織的な取り組みにできた背景や、目標に基づいた指導改善の進め方に関する質問が出され、地域や学校の属性にかかわらず、共通の課題があることがうかがえた。



▶詳細は10ページへ

▶詳細は6ページへ

ワークショップの動画を公開！ 今回のワークショップの様子を動画でご覧いただけます。それぞれのQRコードを読み取ってアクセスしてご覧ください。

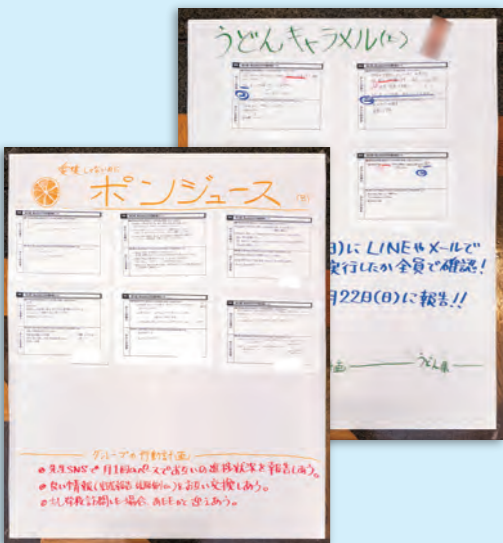
ワーク・対話・共有といったアウトプットを中心としたスタイルのワークショップで、学校を超えて悩みや考えを共有！

今回のワークショップでは、1グループを、学校や立場、教科、教職歴などが異なる5～6人のメンバーで構成し、メンバー同士で話し合いながら思いや実践を共有。そこで得た気づきや考えたことを言語化して共有する過程を大切に、参加者がそれぞれ答えを見いだすことをねらいとした。

今回のワークショップを上記の進め方とした背景は、P.52「これからの会議・研修のあり方、つくり方」で解説しています。



グループのカリマネ行動計画を作成、他グループと共有



カリマネを推進する仲間として結束!

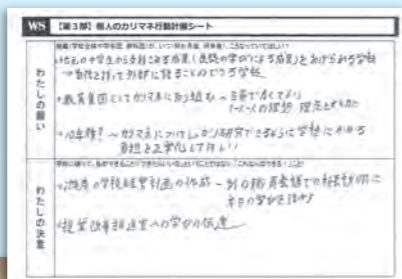
個人のカリマネ行動計画シートを模造紙に貼り、メンバー同士がどのように見守り、励まし合うのかなど、グループの行動計画を立て、模造紙に記入。各グループの行動計画を見て回った。最後に、他グループの内容を見て感じたことや気づき、今日1日の学びをグループ内で発表して、プログラムは終了した。



「ベネッセハイスクールオンライン」上に先生SNSを開設し、越境する学びを応援!

今回のワークショップで築いたネットワークを、今後の活動にも生かしてもらおうべく、「ベネッセハイスクールオンライン」上に、ワークショップ参加者専用の会議室を設置。参加者同士で悩みや課題を相談し合ったり、3人の講師に質問をしたりと、交流が続けられている。

個人のカリマネ行動計画を作成、グループで発表



明日からの具体的な行動に落とし込む

今日学んだことや気づきを生かして、自校ですぐにアクションを起こせるよう、今後の個人の行動計画を考えた。学校全体や学年団、教科団が〇年後または〇か月後、こうなってほしいという姿を設定し、その実現のために自分が明日からできることをシートに記入。決意表明として、グループでその内容を発表し合った。



3つの分科会

3つの中から1つを選んで参加

カリマネを学校全体に浸透させるポイント 講師 三浦隆志校長



教師全員をどのようにして巻き込めばよいのか?

参加者は、ワークシートを用いて、カリマネの基本的なステップの中で自校が優先する課題を整理。「カリマネへの関心が低い」「対話的な場をつくる時間がない」といった優先順位の高かった課題について、校長としてカリマネを推進してきた三浦先生が自身の体験を語った。



▶ 詳細は18ページへ

カリマネと学習評価のあり方 講師 森 朋子教授



指導改善に結びつく学習評価のポイントは?

森教授は、生徒の課題を的確に見いだしてこそ効果的な指導改善ができると伝えた上で、逆向き設計の考え方や学習評価の手法を示した。その考え方や手法を踏まえ、参加者は自校の教育目標の評価手法が適切なのか、参加者同士でアドバイスしながらチェックしていった。



▶ 詳細は16ページへ

学校教育目標のブラッシュ・アップ 講師 美那川雄一先生



カリマネの起点となる目標づくりの視点とは?

参加者が事前に洗い出した自校の強み・弱みと、美那川先生が重要だと考える学校教育目標策定上で重要な4つの観点を踏まえ、参加者は自校の教育目標を見直し、修正。その結果を参加者同士で共有し、より自校に合った教育目標にブラッシュ・アップするための意見を出し合った。



▶ 詳細は14ページへ

分科会の内容をグループで共有

最初のグループに戻って共有

他の分科会の内容を知るとともに自身の学びを振り返る

自分が参加した以外の2つの分科会の概要をつかめるよう、最初のグループ内で自分が参加した分科会の内容や気づきなどを報告し合った。その報告した内容に対して質問や疑問も出され、それらに答えた参加者は、分科会での学びを振り返る場にもなった。



越境し、学び合いながら目指す 「これからの学校づくり」

現在進行中の教育改革は、これからの社会を生きる上で必要な資質・能力の育成を目的としているが、その目的を果たすために求められているのが「カリキュラム・マネジメント(以下、カリマネ)」の実現だ。次期学習指導要領の実施を3年後に控え、カリマネ推進上の課題も顕在化し始めている。

なぜ、カリマネが求められているのか

カリマネは、これからの社会で求められる資質・能力の育成を目指す上で、必要不可欠な営みだと言われています。例えば、「主体的に学んで必要な情報を判断し、よりよい人生や社会の在り方を考え、多様な人々と協働しながら問題を発見し解決していくために必要な力」(※)といった資質・能力は、特定の教育活動のみで育成されるものではありません。



株式会社
ベネッセコーポレーション
VIEW21編集部
統括責任者
柏木 崇
かしわぎ・たかし

なく、各教科等の学習や学校行事、ホームルーム活動など、それぞれの教育活動を通じて育まれる力が統合されて発揮されるものです。そのため、各教育活動と教科等横断的な学習の両方の充実が求められ、教科や分掌、学年等が連携した教育課程の編成・実施・改善が必要になります。その状態を実現する営みがカリマネです。

ただ、先生方にお話を伺うと、「管理職や推進担当以外はカリマネへの関心が低い」「誰を、どのタイミンで巻き込めばよいか分からない」といった悩みをよく耳にします。また、カリマネの第一歩であり、最も重要な工程である、資質・能力ベースの学校教育目標の策定について

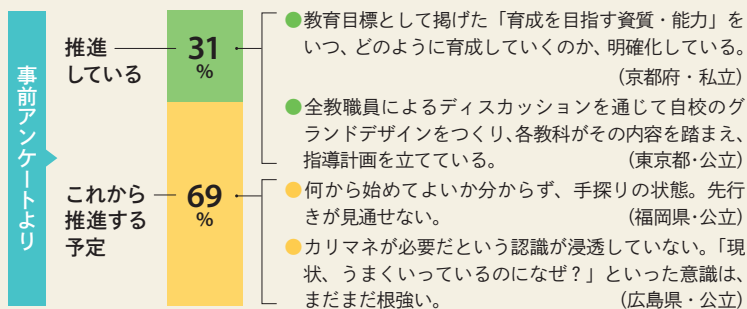
も、「教育目標が抽象的な表現にとどまっている」「自校ならではの内容になっていない」など、課題を抱えている学校も少なくありません。

そのような状況の中でカリマネを推進する現場の先生方への支援として、『VIEW21』がたどり着いた1つの答えが「越境する学び」であり、先生方が学校の違いを超えて対話をし、カリマネについての理解や考えを深める機会として、2019年3月に実施したのが、カリマネをテーマにしたワークショップです。今号は、ワークショップで提供された知見と参加者の先生方から表出された問題意識や思いなどを基に、カリマネの意義と課題、そして具体的な方策をひも解いてまいります。

動画はこちら



参加者に聞く「自校のカリマネの進捗状況」(参加者42人への事前アンケートより)



ワークショップへの期待 カリマネの推進において、現場の教師が持つニーズとは？

- 同様の課題意識を持つ他校の先生方と意見交換しながら、自校の実践工程表を作成したい。 (京都府・私立)
- カリマネを推進する上で考えていくべきポイントを把握したい。 (熊本県・公立)
- カリマネの推進における具体的な問題点とその解決事例を、他校の先生方から聞きたい。そして、自校でどのような姿勢で、どのように同僚を巻き込み、最終ゴールをどこに置くのかを見いだしたい。 (広島県・公立)
- カリマネをきっかけに、本校の包括的な指導体制を見直していくことで、生徒の学びがもっと豊かになるような学校をつくりたい。 (徳島県・公立)
- 全教職員がカリマネについて理解を深め、行動できるような様々な取り組みを、他校から学んで、持ち帰りたい。 (東京都・公立)
- 学校の課題を共有した上で、教師一人ひとりが自分の持つ力を適材適所で発揮しながら、生徒の可能性を希望進路の実現につなげることができる体制を構築するノウハウを学びたい。また、全国各地の先生方と先進的な事例の情報交換ができることを期待している。 (宮城県・公立)



ワークショップでの成果 カリマネの推進において、現場の教師が得た気づき、観点はどのようなものだったのか？

- 一気に学校を変えることは難しいからこそ、話ができる仲間と少しずつカリマネに取り組んでいくこと、対話ができる相手をたくさんつくることが大事だと分かった。 (広島県・公立)
- 様々な高校の先生と話す過程で、どのような学校においてもカリマネが必要であることを再認識した。学校に戻って、現在取り組んでいるカリマネの意義を学年会で説明した。 (熊本県・公立)
- 細やかに配慮されたワークショップの運営や方向性で、終始有益な対話がなされ、様々な化学反応が起き、対話の中からそれぞれの答えを見つけ出すことができた。前向きな先生方が集まると1つのきっかけで進み始める駆動力のすごさを予感した。学校の中でも同じことが起こせれば、もっと楽に、よい方向を目指せるのではないだろうか。 (徳島県・公立)
- 立場や環境の異なる先生がグループ内にいたことで、いろいろな視点からカリマネの進捗状況を見ることができた。学校に帰って、管理職と教務部長、進路部長にワークショップの報告を行った。各学年の学年主任、副主任とも内容を共有し、生徒の強みと弱み、生徒につけさせたい資質・能力とその理由を、各学年の先生方に考えてもらうことにした。それらを集約し、まずは1学期中に学校教育目標の策定に取り組む予定である。 (三重県・私立)
- 同じ悩みを持つ先生と知り合えたことがよかった。他の学校の先生だということもあって、率直に相談できた。 (和歌山県・私立)
- 教育目標はその達成度を評価できる仕組みとセット

1 カリキュラム・マネジメントとは何かを学ぶ

学校全体での「水平的学習」の推進に向け、学校教育目標の構造化を

ワークショップの第1部ではまず、関西大学教育推進部の森朋子教授が、カリマネが求められる背景とその意義、カリマネを継続・充実させるポイントなど、「カリマネとは何か」について解説した。



関西大学教育推進部 教授
森 朋子
もり・ともこ

専門は、学習研究、学習理論。島根大学教育開発センター長等を経て、現職。共編著に『アクティブラーニング型授業としての反転授業』（ナカニシヤ出版）。

動画はこちら



人間の強みを生かせる指導を組織的に推進する必要がある

カリマネを充実させていくためには、その目的をきちんと理解することが大切です（図1）。

現代社会は、AIを始めとする科学技術の発展に伴い、急速に変化しています。これからの数十年間には、既存の職業がなくなることも、新たな職業が生み出されることもあるでしょう。また、以前にはなかった問題の解決に迫られることも少なくないと思います。今後の社会を見ることが非常に難しい中、急激な変化に柔軟に対応していくためには、

社会に出た後も、必要な情報を自ら入手し、試行錯誤をしながら学び続ける資質・能力が欠かせません。例えば、仕事では、既定の業務だけではなく、新たな価値の創造を目指したり、家庭では、自分や家族のよりよい生活のために何ができるのかを考えたることが求められます。

では、そうした資質・能力を育成するために、学校には、どのような取り組みが求められるのでしょうか。それは、次の3つの学力をバランスよく高めることを目指した指導改善です（図2）。

- ① 見える学力（学んだ力）
- ② 見えにくい学力（学ぶ力）

③ 見えない学力（学ぼうとする力）

従来の指導では、①見える学力の育成に重点が置かれ、②見えにくい学力や③見えない学力は、行事等の

図1 カリキュラム・マネジメントとは

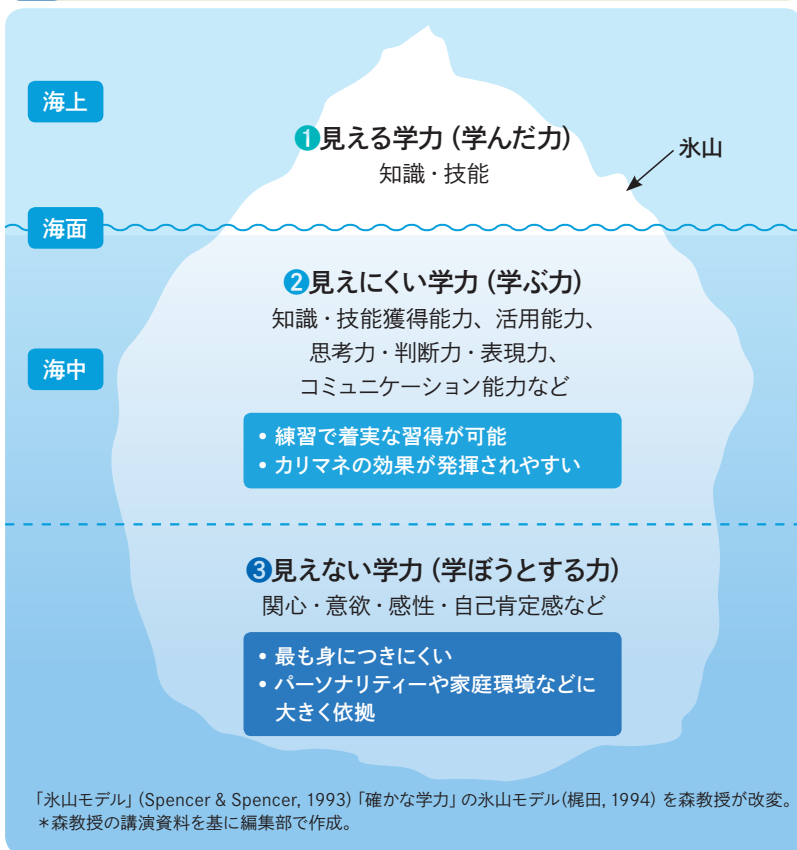
カリキュラムを主たる手段として、**学校の教育目標をよりよく達成していこうとする営み**。カリキュラムとは、教育計画だけを指すのではなく、毎年作成する教育課程、日々の授業、校内の組織、さらに生徒が学んだことを含めた概念。

*田村 2011, 2016 より。
*森教授の講演資料を基に編集部で作成。

*プロフィールは 2019年3月時点のものです。



図2 今後、組織的に育成していきたい学力(冰山モデル)



特別活動や部活動などを中心に育まれてきました。確かに①は重要ですが、進化を続けるAIが今後ますますその能力を高めていくことで、AIに代替されない人材を育成していくためにも、学校生活の中で最も長い時間を占める授業において②③の育成に力を入れ、問いかけを工夫したり、指導方法を改善したりすることが大切になります。②は、

自分の考えを発信したり、他者と協働したりするために必要ですし、③は、粘り強さや創意工夫の源泉となります。そうした学力を身につけられるところに人間の強みがあり、①をAI以上に活用することにつながるのです。

教師一人ひとりの指導の改善効果を高めるためには、全教師が目線合わせたカリキュラムの編成が欠かせ

図3 垂直的学習と水平的学習のイメージ



せません。例えば、②は、トレーニングの機会を増やすことによって着実な習得が可能です。高校3年間で中高一貫校であれば6年間、同じ目的の下に各教科・科目の授業でトレーニングを積み重ねれば、大きな成果につながります。カリマネは、そうした組織的な対応を図るために不可欠なものとなります。

カリマネは、単なるノウハウでは対応できません。また、カリマネを行う目的の理解が曖昧なままでは、それを充実させることは困難です。まずは、その必要性をしっかりと押さえることが重要です。

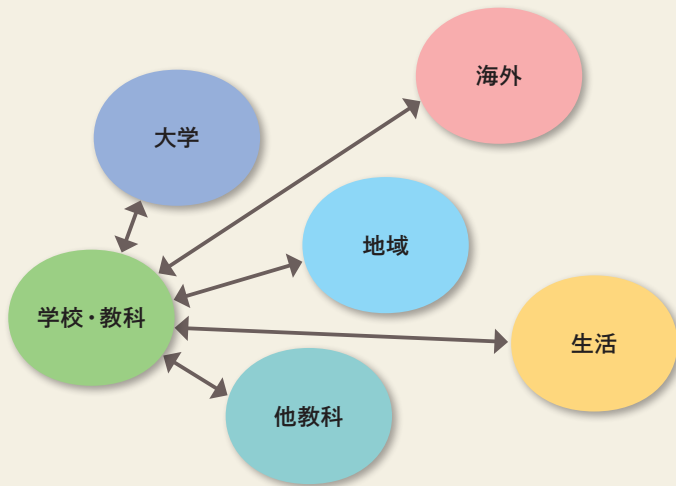
「水平的学習」で気づきを
得て、生徒は学びに向かう

学校での学びは、「垂直的学習」「水平的学習」(*)に分かれると考えられます(図3)。カリマネによって2つの学習を有機的に結びつけば、教育活動をさらに実りあるものにするのが可能です。

代表的な垂直的学習は、教科学習です。生徒は問題演習などに繰り返し取り組む中で次第に学習を深め、授業のめあてである活動を上手に、そして早くできるようにしていきます。ただし、1つの教科・科目の中だけで知識・技能が完結しやす

* フィンランドのヘルシンキ大学で発達・学習心理学や認知科学などを研究している、ユーリア・エンゲストローム教授による分類。

図4 越境する学びのイメージ



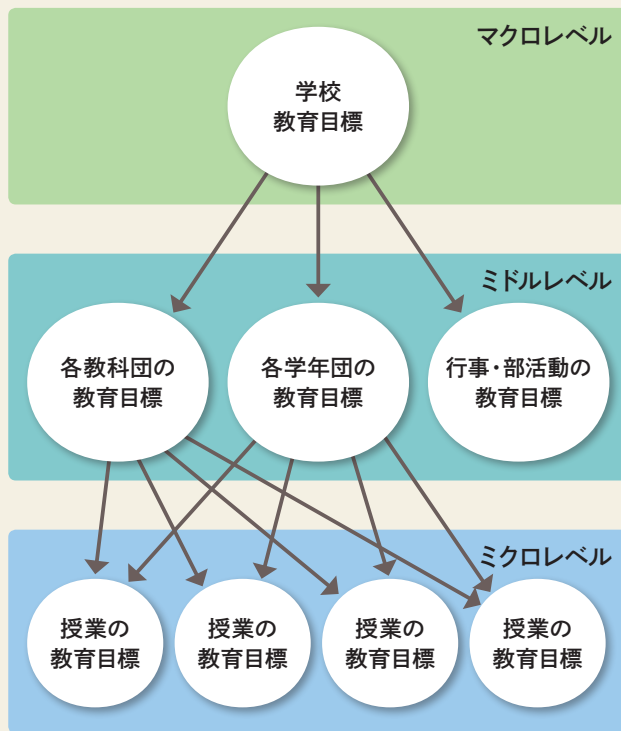
*森教授の講演資料を基に編集部で作成。

今後は、垂直的学習に加え、水平的学習の充実がますます求められます。そのため、カリマネを行う上では、両学習をどのように組み合わせるのかを検討することが大変重要です。組み合わせ方は多様であり、生徒や学校の実態によって異なります。例えば、幅広い学力層の生徒が集まる学校では、

という課題があります。一方、水平的学習では、様々な教科・科目、さらには学校外へと越境していきます(図4)。そうした学習は、「教科・科目等の枠を超えた横断的・総合的な学習」として、次期学習指導要領でより重視されるようになります。また、部活動や体育祭などの学校行事も、このカテゴリーに入ります。水平的学習には、生徒の視野や考え方を豊かにし、今まで気にとめて

いかなかったことに意味を見いだすなど、価値観を変化させられるという特徴があります。代表的な水平的学習は、探究学習です。地域でフィールドワークを行ったり、大学の授業を体験したりする中で、生徒は自分が学んできた教科・科目の知識・技能が社会でどう生かされているのかに気づくでしょう。そうした気づきは、主体的に学びを深めることの原動力となって③見えない学力を高めるので、②見えにくい学力や①見える学力の向上にもつながります。

図5 学校教育目標の達成のイメージ



*森教授の講演資料を基に編集部で作成。

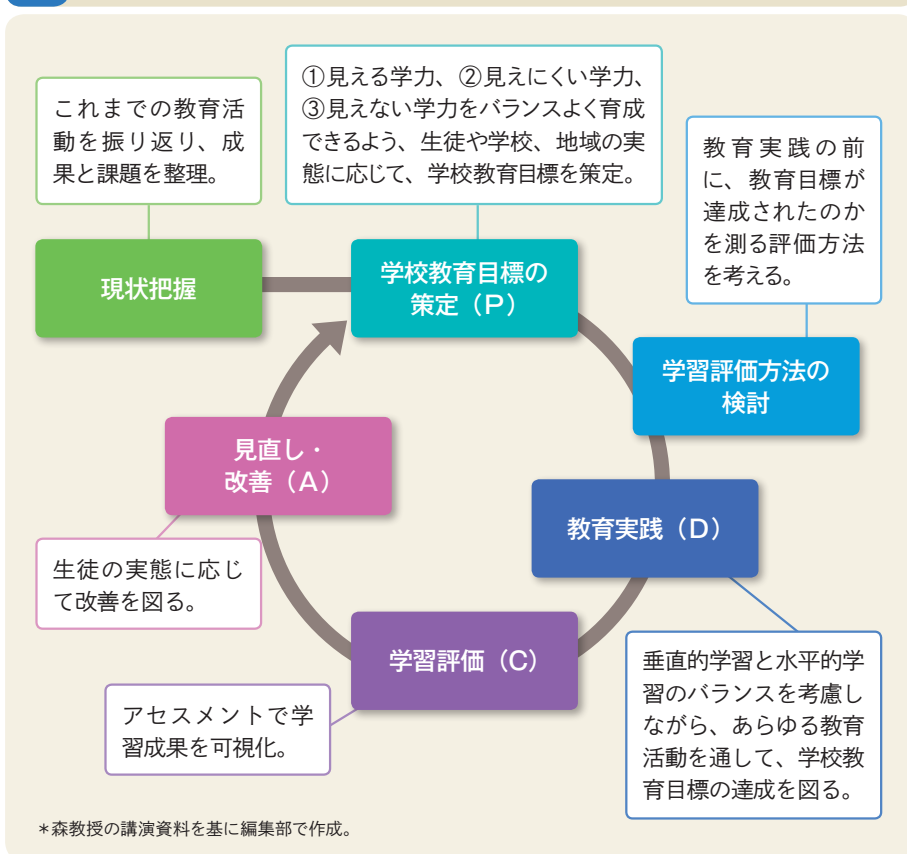
まずは垂直的学習に力を入れ、徐々に水平的学習を増やしていくのも方法の1つです。学力の高い生徒から構成される学校ならば、早い段階から水平的学習を中心にカリキュラムを編成してもよいでしょう。

全学年・全教科の授業の教育目標に、学校教育目標を反映

先ほどお話しした通り、カリマネは学校が一丸となって取り組むものです。今回は、その最重要ポイント

を2つ紹介します。1つめは、「学校教育目標の達成」をしっかり意識することです。私の専門分野である学習研究や学習理論では、学校の教育活動はマクロ・ミドル・ミクロの3レベルの目標によって規定されると考えられています。マクロレベルが学校教育目標、ミドルレベルが教科団や学年団などが掲げる教育目標、ミクロレベルが授業の教育目標です。先生方が生徒と日々向き合う中では、授業の教育目標の達成だけに注目しがちです

図6 教育のPDCAサイクル



が、カリマネを充実させるためには、学校教育目標の達成を常に意識することが欠かせません。

そこで、まずは学校教育目標に基づき、各教科団や各学年団の教育目標を設定することが重要になります。そして、各教科・科目の授業の教育目標には、教科団・学年団両方

の教育目標を反映させます(図5)。例えば、1年次の「化学基礎」であれば、理科の教科団と1学年団の全教師が集まり、学校教育目標について共通理解を図った上で、授業でどのような資質・能力の育成を目指すのかを検討する必要があります。

卒業までに授業で育成したい生徒の資質・能力とその評価観点をまとめた長期的ルーブリックや、あらゆる教育活動の目的や位置づけを整理したカリキュラムマップを作成することが有効です。それらによって、3年間・6年間の教育活動と学校教育目標との関連性を視覚的に把握できるようになり、学校教育目標の達成を意識した、授業の教育目標の設定に役立ちます。ただ、それらのツールの作成は手段に過ぎません。大切なのは、ツールを活用して議論し、学校教育目標の達成に向けて教師間の目線を合わせることです。そうした中で、教科団や学年団を超えた全校体制でのカリマネが実現します。

常に生徒の実態を見据え、教育のPDCAを回す

2つめは、「教育のPDCAサイクルの確立」です(図6)。

Pである学校教育目標の策定にあたっては、前提として教師による現状把握が欠かせません。自校の教育活動を振り返り、ねらい通りの成果が出ている活動と、思うような結果を伴っていない活動を整理し、それ

ぞれの結果の原因を検討します。そうして、生徒や学校、地域の実態への理解を深めた上で、①見える学力、②見えにくい学力、③見えない学力をバランスよく伸ばせるよう、学校教育目標を練り上げられます。

PとDの間に位置づけられるのが「学習評価方法の検討」です。「逆向き設計」(詳細はP.16参照)に基づき、教育実践の前に、どのようなツールを用いて教育目標が達成されたのかを評価する方法を決めます。

Cでは、課題を客観的に洗い出すため、アセスメントを用いた評価が大切になります。教育活動の成果の要因は様々です。同じ教育活動を複数の学年で行い、結果が異なることも珍しくありません。結果に一喜一憂するのではなく、全教師がエビデンスを基に生徒の実態を把握し、次のAに踏み出すことが大切です。

①見える学力に比べて、②見えにくい学力、③見えない学力の育成には時間がかかるので、3年間もしくは6年間のカリキュラムを通して計画的・組織的に行う必要があります。全校体制で教育のPDCAサイクルを回し、カリマネを継続・充実させていっていただきたいと思えます。

2 学校教育目標のあり方を考える

自校の現状分析で把握した課題を基に、生徒の将来を見据えた教育目標を設定

森教授の講演を通じてカリマネの理解を深めた後は、実践事例として、「読解力」の育成を軸にカリマネを進めている静岡県立御殿場高校の美那川雄一先生が、課題意識を持ったきっかけや教育目標の設定において大事にした視点、他教師を巻き込んだ取り組みに発展させた過程などを語った。

講演後には、参加者によるグループワークと美那川先生への質疑応答が行われた。



静岡県立御殿場高校 教諭
美那川雄一
みながわ・ゆういち

教職歴15年。同校に赴任して2年目。1学年主任。担当は地理歴史・公民科(世界史)。



動画はこちら

「教科書の文章を読めていないのではないか」という課題認識

本校では、生徒への育成を目指す資質・能力として「読解力」を掲げ、カリマネを進めています。まずは、その背景を紹介します。

本校は、工業・商業・家庭の3科を擁する静岡県内唯一の専門高校で、2018年度から、創造工学科、創造ビジネス科、生活創造デザイン科の3学科を設置しています(※1)。生徒数は約600人。卒業後の進路は、57%が就職し、28%は専門学校へ、15%は大学・短期大学へと進学します(17年度)。地元企業

に就職する生徒が多いため、資格取得に力を入れるとともに、社会で役立つ資質・能力を育成しています。

17年4月に本校に赴任した私が課題意識を持ったのは、授業を開始して1か月が経った頃です。担当の世界史の授業中、教科書に記載された事項について私が発問しても、生徒の手が全く挙がらず、「もしかして、生徒は教科書の文章を読めていないのではないか」と感じました。

そこで、生徒には教科書の文章を正確に読み取る力が不足しているという仮説を立て、国立情報学研究所社会共有知研究センターが考案した読解力テスト「リーディングスキル

テスト」(以下、RST)のサンプル問題(「リーディングスキルテストの実例と結果」(平成27年度実施予備調査より))を、1年生全員に解かせてみました。

すると、正答率は、全国公立高校の平均正答率を下回っていました。数問解いただけでは確かなことは言えないかもしれませんが、生徒が教科書の文章を正確に読み取れていないのなら、授業の内容を理解していない可能性が高く、教師の口頭での説明も十分に伝わっていないかもしれない。そうであれば、授業を根本的に見直すことが必要だと考え、校長にRSTの結果を示して相談しま

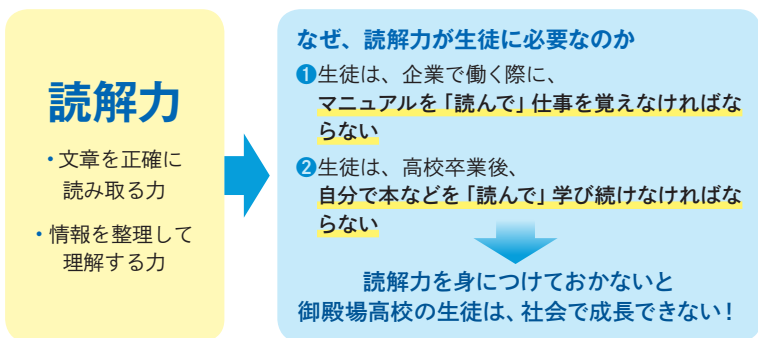
* 1 2019年度の3学年は、情報システム科、情報ビジネス科、情報デザイン科の3学科。
* プロフィールは2019年3月時点のものです。

研修会では、本校の生徒への育成を目指す資質・能力を見極めるため、日頃、教師が生徒を見ている中で感じていることを話し合いました。KJ法を用いて、学校や生徒の強みと弱みを整理したところ、暗記などは得意だけれども、読解力や語彙力、計算力が不足していることなどが、教師間の共通認識になっていると改

教員研修を行い、読解力の育成を軸に教育目標を設定

その頃、職員室でも、「生徒は、教科書の文章を正確に読めていないようだ」「資格試験の合格率が下がっているのは、問題文を読めていないからではないか」といった課題が挙がっていました。そこで、教師間でそれらの課題について共有し、対応策を検討した方がよいのではないかと考え、普通教科の担当教師による研修会を行いました。

図1 静岡県立御殿場高校の生徒に必要な資質・能力

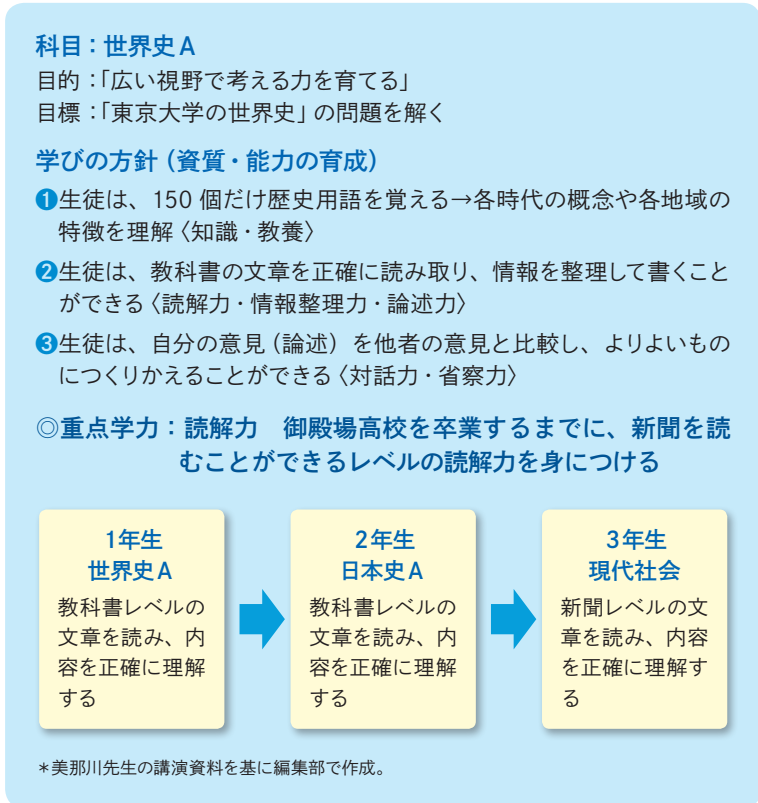


*美那川先生の講演資料を基に編集部で作成。

生徒にとってより必要な教育目標へと近づける

次に取り組んだのは、生徒の将来めて分かりました。その中でも注目したのが、すべての学力の基礎となる「読解力」の不足です。そこで、この「読解力」の育成をカリマネの軸に据えて、指導改善に着手しました。

図2 地理歴史・公民科で育成を目指す資質・能力(例)



*美那川先生の講演資料を基に編集部で作成。

を見据え、教育目標をより具体化することです。研修メンバーで、本校の生徒への育成を目指す「読解力」について話し合い、その定義を「文章を正確に読み取る力」と「情報を整理して理解する力」の2つにしました。企業では、マニュアルを「読んで」仕事を覚えなければならず、また、高校卒業後は、自分で本などを「読んで」学び続けることが、生徒には求められるからです（図1）。

そして、教育目標が変われば、授業も変えるべきだと考え、授業の見直しをしようとはほかの教師に呼びかけて、12月に2度目の研修会を実施しました。ここでは、本校で育成を目指す「読解力」の定義を基に、どのように各学年・各教科でそれを育成するか、学年・教科を超えて話し合いました。

その際には、具体例があった方がよいと考え、地理歴史・公民科の学

びの方針を事前にまとめ、研修会で発表しました（P.11図2）。地理歴史・公民科では、本校を卒業するまでに、新聞の内容を理解することができるレベルの読解力を育成することを重点に掲げ、学年（科目）ごとの目標も設定しました。具体的には、生徒に教科書を読ませ、そこから考えられることを問う授業を展開しています。

18年度は、5教科中心の取り組みでしたが、19年度からは静岡県総合教育センターの協力を受け、工業科、商業科、家庭科の専門科目でも「読解力」の育成などの観点を意識した授業を推進していく予定です。

一方で、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、管理職が地域の後援会やPTAの方、企業の方を対象に、本校の生徒に求められる資質・能力をアンケートで調査中です。

また、生徒にも、自分たちに必要な資質・能力を考えてもらう場を設けました。参考にしたのは、『VIEW21』高校版の17年10月号に掲載されていた山梨県立吉田高校の取り組みです。生徒自身が自分たちに必要な資質・能力を考える会議を開催したという記事を読み、本校でも「御

殿場高校の3年間で身につける『力』とは何か？」というテーマでのワークショップを行ったのです。今後は、生徒自身が実感している

参加者とのQ & A

講演後、美那川先生の話聞いて参加者が抱いた共感・違和感・疑問・不安をグループで共有。その内容を踏まえ、美那川先生と参加者との質疑応答が行われた。ここではその一部を紹介する。

Q 組織的な取り組みとして、学校全体にどのように広げたいでしょうか。

A 本校での取り組みは始まったばかりで、組織的に取り組んでいるというレベルではまだありませんが、外部機関との連携は鍵になると思います。本校では、18年度から、静岡県総合教育センターの支援を受けてカリマネを推進しています。

また、学校全体に広げるためのポイントとして、前任校の経験から考

こと、地域が求めていることも意識し、「読解力」の育成などを軸にしたカリマネを学校全体で推進していきたいと思います。

動画はこちら



えられることをお話します。

前任校では研修主任だった私は、学習評価に課題を感じ、静岡県のサイエンス・アドバンススクール事業（*2）に参加し、授業改善を進めました。県からの支援によって、校内での理解が得られ、研修が進めやすくなりました。

研修の進め方で工夫した点は、3つあります。1つめは、教師参加型にしたことです。当時、若手教師だった私が、先輩の先生方を対象に講義形式とするのは難しかったため、先生方が話し合うグループワーク中心の研修にしました。

2つめは、研修報告のプリントを教師全員に配布したことです。研修の翌日に、研修内容だけでなく、笑顔で研修を受ける先生方の写真を掲載したプリントを作成し、職員室で



写真 各グループから出された美那川先生への質問をスライドに表示し、会場全体で共有した。

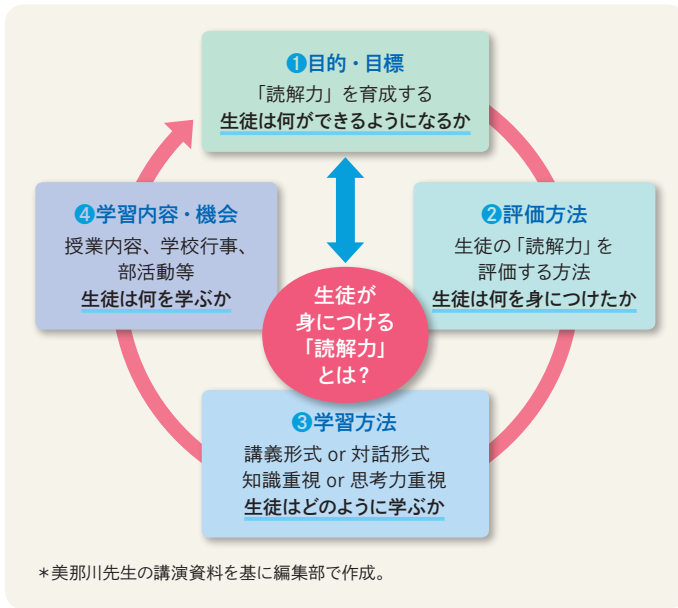
配布しました。すると、参加できなかった先生も興味を持ってくださるようになり、次第に研修の輪が広がっていききました。現在、本校でも、同様のプリントを配布しています。

3つめは、研修推進に影響力を持つ先生たちに相談したことです。前任校では、生徒指導を熱心に行う体育科の先生方でした。学校のキーパーソンである先生方が率先して自分のような若手主催の研修に参加してくれると、多くの教師の研修への理解も進みやすくなると思います。

Q 教育目標を「読解力」の育成に設定後、どのように教科の授

* 2 静岡県教育委員会が、授業改善を軸とした生徒の学力、教師の授業力、学校の教育力を向上させるために県内の研究校を指定して推進した事業。

図3 逆向き設計に基づいた授業設計の概念図



その上で、③証拠（評価方法）が生み出されるような学習方法を考えます。定期考査の内容を踏まえ、私の授業では、世界史の教科書を読ませ、そこから重要なことを書き出したり、重要事項を組み合わせて自分の考えを書いたり、発表したりす

ることが中心となりました。また、生徒の読解力には差があるので、グループワークを中心とし、生徒が互いに学び合う場面を多く設けるようにしました。ほかにも、個人で論述した文章を、グループワークで相互評価させる機会も設けています。そして最後に、④生徒が学ぶこと（学習内容）について考えます。

授業の進度は守るようにはしていません。ただ、教科書の内容を網羅的に扱うのではなく、特にどの内容で読解力を発揮してほしいのかを踏まえて、授業を設計しています。私の授業では、単元ごとに大きな問いを提示し、生徒は、教科書や用語集などを読解しながら、問いの答えを探します。1つの単元内でも時間をかける部分と、そうでない部分を決め、進度を調整するようにしています。

そう考えるようになったきっかけは、前任校で担当した研究授業の時の出来事です。授業の進度のこともあり、一方的に生徒に講義したとこ

る、授業後、先輩から「生徒に考えさせる時間をつくってもよいのではないか」とアドバイスをいただきました。生徒が考えるからこそ、授業理解が深まるのだと、その時初めて気づいたのでした。

それからは、授業内容の「核」となる部分、最も「面白い」ところは、私が説明せず、たとえ時間がかかっても、あえて生徒に考えさせるようにしています。

教育目標を軸にして、どこに重点を置いて生徒に考えさせるのかまでをイメージし、3年間の授業計画をデザインすることが、効果的なカリマネの実現につながるのではないのでしょうか。

具体的にはまず、①求められている教育の結果（教育目標）を決めま

す。本校の場合は、読解力の育成です。次に、②その結果がもたらされたことを証明できる証拠（評価方法）を決めます。本校の世界史の定期考査では、暗記だけで解答できるような問題を出していません。教科書の本文の抜粋を掲載し、そこから読み取れること、考えられることを問うような問題を出題し、生徒の読解力を判断しています。例えば、ペルシア戦争の原因を問う設問では、試験問題に教科書本文をそのまま掲載し、その文中から原因を読み取らせ、

その上で、③証拠（評価方法）が生み出されるような学習方法を考えます。定期考査の内容を踏まえ、私の授業では、世界史の教科書を読ませ、そこから重要なことを書き出し

る、授業後、先輩から「生徒に考えさせる時間をつくってもよいのではないか」とアドバイスをいただきました。生徒が考えるからこそ、授業理解が深まるのだと、その時初めて気づいたのでした。

それからは、授業内容の「核」となる部分、最も「面白い」ところは、私が説明せず、たとえ時間がかかっても、あえて生徒に考えさせるようにしています。

教育目標を軸にして、どこに重点を置いて生徒に考えさせるのかまでをイメージし、3年間の授業計画をデザインすることが、効果的なカリマネの実現につながるのではないのでしょうか。

カリマネ推進の3大ポイントを学ぶ

学校教育目標の見直し、学習評価、 学校全体での推進をどう行えばよいのか？

カリマネの第一歩となる学校教育目標の策定、効果的な指導改善を図るための学習評価のあり方、そして、カリマネを自校に浸透させるポイントテーマに、3つの分科会を実施。講師が持つ知見と経験、学校の違いを超えた参加者同士の対話を通じて、参加者は自校でカリマネをどう行えばよいのかをイメージしていった。ここでは、各分科会におけるHowの部分を中心にみていく。



How 1

学校教育目標の ブラッシュアップ

静岡県立御殿場高校 教諭
美那川雄一

動画はこちら

カリマネの起点・原点となる 学校教育目標とすること

学校教育目標の策定は、PDCAサイクルのP（計画）にあたり、カリマネの起点・原点となる。多くの学校で校訓や校是、建学の精神などを基に学校教育目標を策定している

が、「表現が抽象的」「自校ならではの内容になっていない」といった現状がよく聞かれる。そうした状況を改善するため、教育目標の見直しについての事例を発表した美那川先生による、学校教育目標のブラッシュアップをテーマとした分科会が実施された（分科会の流れは下図参照）。

学校教育目標を見直す 4つの観点とは？

分科会では、まず、事前課題として取り組んだ自校のSWOT分析（*1）シート（図1）を基に、参加者が自己紹介を行った。その際、SWOT（強み・弱み・機会・脅威）の中でも「他校にはない自校の強み」と「自校独自の弱み」を伝えてほしいと、美那川先生は語った。

「あまり大きな目標ではなく、小さな取り組みで結果が出やすい目標から始めた方が効果的です。一方で、労力がかかっても取り組みまなければならぬ課題もあると思います。本

分科会の流れ

- 1 グループワーク 自校のSWOT分析を交えて自己紹介
- 2 美那川先生の解説 SWOT分析に必要な視点とは？
- 3 グループワーク 自校の学校教育目標の共有
- 4 美那川先生の解説 資質・能力ベースの学校教育目標の策定に必要な視点とは？
- 5 個人ワーク 自校の学校教育目標のリライト
- 6 グループワーク 5の結果を見て、アドバイスし合う
- 7 個人ワーク 学校教育目標の策定を自校で進めるためのアクションを検討
- 8 グループワーク 7のアクションをアドバイスし合う

* プロフィールは2019年3月時点のものです。
* 1 内部環境を強み (Strengths)、弱み (Weaknesses)、外部環境を機会 (Opportunities)、脅威 (Threats) のカテゴリーに分類し、経営方法に生かす分析方法の1つ。

図1 自校のSWOT分析シート **ダウンロード**

内部環境 (生徒/教師/学校内)	
強み	弱み
外部環境 (家庭/地域社会/教育行政/学校外)	
機会	脅威



【育てたい生徒像】
※校訓・校是・建学の精神等の自校の不易も踏まえて

*編集部が作成。

校においてどちらにもあてはまなかったのが『読解力』の育成であり、読解力が高まれば、学力が伸びる突破口になると考えました。皆さんも、自校の突破口を考えてみてください」

次に、美那川先生が、目標設定に求められる観点として自身が重要だと考える4点について説明した。

①生徒・学校の実態に即したものが「この点が最も大切」と美那川先生は強調した。例えば、学校教育目標を策定してから時間が経ち、生徒や学校が変化しているにもかかわらず、目標はそのままといった場合がある。学校教育目標が目の前の生徒

や学校の実態に即しているのか、現在勤務している教師の視点で見直すことが必要だ。

②現在の社会の状況を踏まえたものか、これからの社会の変化を予測し、それを踏まえたものか

同じ言葉でも、時代によって捉え方が異なることもある。例えば、忍耐力は、昔は「根性があること」を意味したかもしれないが、今後の社会で必要とされる忍耐力とは、どのような資質・能力なのか。各学校で独自の意味付けをしていきたい。

③学校で育成する場面を具体的にイメージできるものか

校内研修でご活用ください! **ダウンロード**

分科会で使用したワークシート

◎教育目標リライトシート

W3 【美那川先生・分科会】教育目標リライトシート

【自校で育てたい生徒像】
※本校に当てはまる言葉を選択

どのような資質・能力を持った生徒なのか、その資質・能力は主にもどの教育活動で育むか
※このシートは、本校の教育目標を基に作成

資質・能力	資質・能力の説明	育成の場面となる教育活動

◎「教育目標の策定」推進のためのアクションシート

W4 【美那川先生・分科会】「教育目標の策定」推進のためのアクションシート

学校教育目標の策定を 自校で進めたいために 取り組むべきアクション	主体的アクションを行う 進捗状況を共に確認 発表・発表	その結果、確認を 引き起こしている集団 アクションの担当者	指導員自ら進めたいための 具体的行動

学校教育目標として掲げた資質・能力は、授業や行事、部活動など、どの場面で育成するものなのかをイメージできなければ、指導や支援はできない。また、複数の場面で育成する資質・能力もあるだろう。そして、家庭や地域で育成される資質・能力であれば、必ずしも学校で育成する必要はなく、学校教育目標として掲げなくてもよい場合もある。

④評価できるものか、評価手法をイメージできるものか

学校教育目標として育成を目指す資質・能力を掲げたとしても、それが伸びたかどうか見取れるものではない。

目標策定を進めるために
どう行動すればよいのか

以上の4つの観点で自校の学校教育目標を見直した結果（左図ワークシート参照）を、参加者同士で共有し、4つの観点を踏まえてアドバイスを合った。

「教員研修で課題を出してもらい、なければ、生徒を褒めたり、次の段階に導いたりすることができない。つまり、評価可能な資質・能力を教育目標として設定することが重要なポイントの1つだ。

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け」をご覧ください。

集約して目標としたのですが、文言が抽象的になってしまつて……」

「私はできるだけようになった」といった形で生徒にアンケートを取れるような表現にすれば、目標と評価が一致しますよね」

「なるほど。そうすれば目標が具体的な言葉になり、生徒もどう行動すればよいか分かりやすいですね」

そうした参加者同士の話し合いは多くの気づきをもたらした。

最後に、自校で学校教育目標を策定するためのアクションプランと、うまく進まない想定される場面、その原因と対応策を書き出し（P.15 ワークシート参照）、グループ内でアドバイスし合った。美那川先生は、行動を起こす重要性をこう語った。

「今日得たことや気づきを1人でも多くの同僚に話し、カリマネを推進する上での仲間を増やしてください。学校には、様々な課題が存在します。そうした課題を乗り越えるためには、教師が話し合つて解決策を創出していくしかありません。そのような対話の土壌をつくるきっかけにカリマネがあると捉えて、カリマネを推進していけばよいのではないのでしょうか」

How 2

カリマネと

学習評価のあり方

関西大学 教育推進部 教授
森 朋子



動画はこちら



最も大切なのは 生徒の学びを見取ること

学校教育目標として育成を目指す資質・能力を掲げたものの、生徒の資質・能力がどれだけ伸びているのか、そもそも資質・能力を向上させる教育活動になっているのかといった課題意識を持つ学校は少なくない。そこで、学校教育目標と学習評価との接続をテーマに、森教授の分科会が行われた（分科会の流れは下図参照）。

森教授がまず強調したのは、生徒の学びを適切に見取る「学習評価」の重要性だ。

「学習の主体者である生徒の学びを見取つてこそ、目標に到達するための手立てを見いだせます。教師の感覚だけで指導改善しても、よい成果が得られるとは限りませんし、生

分科会の流れ

- 1 グループワーク 自己紹介とともに、自校で行っている学習評価を共有
- 2 森教授の解説 カリマネにおける学習評価の位置づけ、逆向き設計、学習評価の種類についての解説
- 3 個人ワーク&グループワーク 学校教育目標を3つの学力に分類し、評価ツールを考える。グループでアドバイスし合いながら進める

徒自身、どこに課題があるのか分かっていないかもしれません。また、人によって評価基準は異なりますから、教師間の共通理解を得るためのアセスメントが必要です。特に数値で表せる学習評価は、誰もが納得できるエビデンスになります。生徒の学びは多様で、すべてを見取ること

は難しいですが、それでも学習評価を工夫し、試行錯誤していかなければならないでしょう」（森教授）

複数の評価手法を組み合わせ 改善点を浮き彫りにする

次に、アセスメントの重要な考え方として「逆向き設計」について解説した。それは、アセスメントで到達度を測ることを前提に目標を設定し、それに到達するための授業をデザインして実施するという考え方だ（図2）。

「学校教育目標というと壮大な目標を立てるイメージがあるかもしれませんが、それが評価できるものになれば、到達度が分からず、指導改善もできません。生徒が目標にどの程度到達しているのかを測ることができるものにし、アセスメントを通じて得られた結果の原因をしっかりと分析することが重要です」（森教授）

学習評価の手法は、直接・間接・数値で表せる・表せないを軸に4象限に分けて示した（図3）。

直接評価は、学習者の知識や行為を通じて、「何ができるのか」を評

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

図2 PDCAサイクルの構築(逆向き設計)

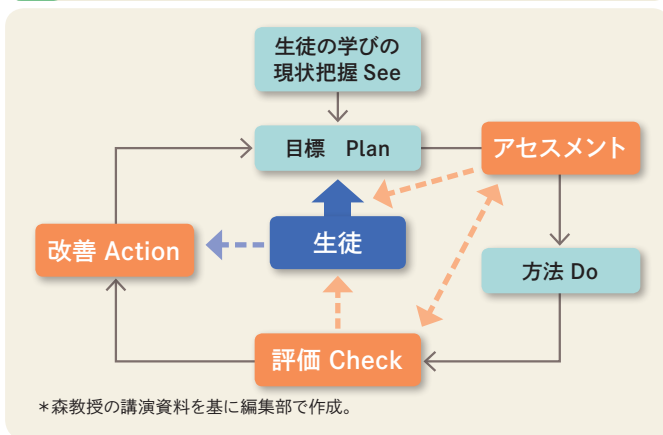


図3 学習評価の手法の分類

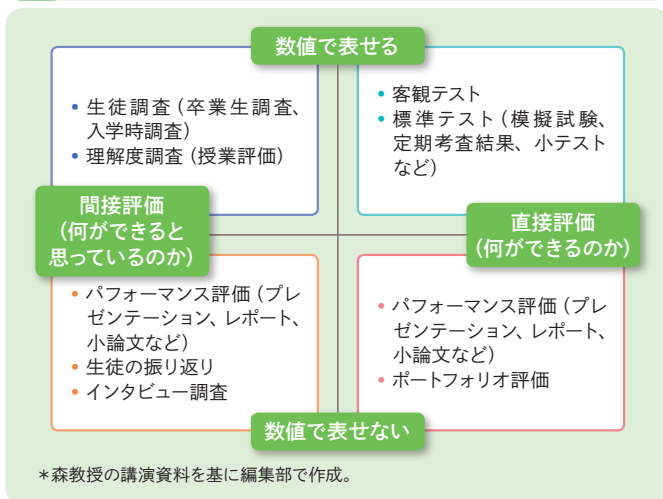


図4 アセスメントチェックリストと記入例

アセスメント		模擬試験+定期考査	ルーブリック(教員)	ルーブリック(生徒)	卒業時調査
		学校教育目標			
見える学力	基礎的な学力を身につけることができる	○	○	●	●
	教科の内容を他者に説明することができる				●
見えにくい学力	自らの考えを発信することができる		○	●	●
	深く思考することができる				●
見えない学力	思いやりを持ち、人と協働することができる			●	●
	主体的に物事に取り組むことができる		○	●	●
	自分に自信が持てる		○	●	●

○は直接評価、●は間接評価。
 *森教授の講演資料を基に編集部で作成。

評価するもので、代表的な手法は定期考査や模擬試験などのテストだ。一方、間接評価は、「何ができると思っているのか」という学習者の認識を通じて行う評価で、生徒の振り返りや意識調査などが該当する。

学校が行う学習評価は、これまで直接評価が中心だったが、生徒が自身の学びについて評価する間接評価を加えることで、生徒の実態と認識とのずれが分かり、課題を浮き彫りにしやすくなる。

数値で表せない評価手法として

は、ここ数年、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価などが行われるようになった。また、数値で表せなかったものを数値で表せるよう、ルーブリックの活用も進んでいる。

「学習評価を的確に行えば、指導改善の示唆が多く得られます。例えば、同じルーブリックを用いても、生徒がする評価は間接評価、教師がする評価は直接評価となります。4象限の評価手法を組み合わせ、多面的に評価することが重要です。できれば、直接評価と間接評価の両方を

行うのが望ましいでしょう」(森教授)

到達度を測れる目標か、一つひとつをチェック

以上の森教授の解説を踏まえ、自らの学校教育目標の評価に適した手法と、評価を行う時期やツールなどを考えるワークを行った。

4) を活用し、縦軸に学校教育目標を、横軸に現在行っているアセス

メントを記入し、どのアセスメントでどの目標を評価しているのかを確認していった。到達度を測れない学校教育目標を見いだすとともに、直接評価の場合は○、間接評価の場合は●を記入し、両方の手法が用いられる場合もチェックした。また、学校教育目標が「見える学力」「見えにくい学力」「見えない学力」のどれに該当するのかも分類。評価しやすいかという観点で、学校教育目標を見直せる機会とした。

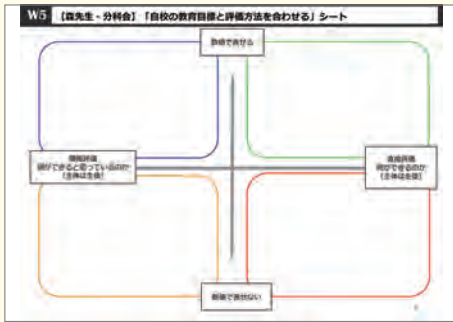
ワークには個人で取り組んだが、

校内研修でご活用ください！



分科会で使用したワークシート

◎「教育目標と評価方法を合わせる」シート



◎「アセスメントプラン」シート

ワークシート（左図ワークシート参照）を見せ合ってグループのメンバーと話し合ったり、森教授に質問したりしながら進められた。

「継続する力は、部活動を続けたかどうかで測ろうかと」

「そうすると、部活動に入っていない生徒はどうすればよいですかね」

「生徒の振り返りだけで十分？生徒は自分をよく見せようと書くこともありますよね」

「教師の見取りも必要ですね」

そうして、参加者は、目標の一つひとつについての評価手法を考えていった。

そして、森教授は、大学教員の立場からカリマネによって資質・能力を育成する教育への転換の重要性を改めて伝えた。

「カリマネは、継続性と構造化を持つことで、教育活動の効果を最大限に引き出すことができます。そして、その基盤となるのが教師間の協働です。評価手法は様々ありますが、それらはあくまでもツールです。感覚や思いつきではなく、学習評価を議論の土台に、教師間、そして生徒との認識をすり合わせ、学校全体で同じ方向に進んでいただきたいと思っています」（森教授）

How 3

カリマネを学校全体に浸透させるポイント

岡山県立林野高校 校長 三浦隆志



動画はこちら



肯定的な気持ちで 学校について議論する

すべての教師が主体的にカリマネにかかわるため、主に管理職やミドルリーダーに求められる「カリマネ・ガバナンス」をテーマにした分科会が、岡山県立林野高校校長の三浦隆志先生によるファシリテーションと話題提供によって進められた（分科会の流れは下図参照）。なお、林野高校のカリマネの取り組みの詳細は、本誌2017年12月号で紹介している。

参加者は、カリマネを推進する上で課題となっていることを「組織・体制・運営上の課題&打ち手シート」（P.19ワークシート参照）を使って出し合い、取り組むべき課題の優先順位を整理した。そして、「カリマネへの関心が低い」「誰を、どのタ

分科会の流れ

- 1 グループワーク 自校のカリマネ推進の状況と課題を交えながら自己紹介
- 2 グループワーク カリマネ推進上の課題をグループで洗い出し、取り組みの優先順位をつける
- 3 三浦先生の話提供 自校の課題を念頭に、三浦先生の勤務校の事例を聞く
- 4 グループワーク 三浦先生の話を踏まえて、自分たちの課題における具体策を話し合う
- 5 三浦先生との質疑応答 グループで話し合われた内容を発表しながら、さらに疑問や不安を三浦先生にぶつける

イメージで巻き込めばよいか分からない」「対話的な場をつくる時間がない」という参加者の課題を踏まえ

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

て、三浦先生の講演が始まった。

「カリマネという言葉を独り歩きさせず、『教育活動を振り返り、次年度の指導をよくしよう』『行事があふれ、慌ただしくなった現状を整理しよう』と、カリマネのねらいを明確に伝えたことが共感を得ることにつながった」と三浦先生は語る。そして、学校が置かれた状況を教師が理解する際には、学校のよいところを、時間をかけて丁寧に語り合うことで、教師が肯定的な気持ちで学校について考えられるようになるなどの工夫点を伝えた。さらに、「語られた言葉は、目に留まる形で校内に残すことが大切だと考えたので、話し合いの内容を書き留めた模造紙などは、議論の熱を伝える記録とし



みうら・たかし 2019年3月まで岡山県立林野高校の校長を務める。林野高校では、校長として着任した16年度からカリキュラム・マネジメントを推進した。

て、全教師がいつでも目にできる場所に貼った」など、校内にカリマネを浸透させる手法も紹介された。

カリマネに全教師がかかわることを目的とした対話の時間をどのような確保するかについては、三浦先生は定期考査の日の午後などに時間をつくった経験を語ったが、その際、「会議は17時に終了」などと示し、時間を守ることで、参加者が時間調整をしやすくなったという。

「校長である私が推進役であったため、カリマネ関連の会議への教師の参加率は確かに高かったのですが、それでも出張などを理由に参加できない教師はいました。参加できない教師一人ひとりに『後日、先生にも意見を聞きますよ』と声をかけ、すべての教師にかかわってもらおうという姿勢を貫きました」（三浦先生）

カリマネをどのように具体的な変化に結びつけるか

さらに、参加者からは次のような問題提起があった。

「トップダウンだと、教師は受け身になりがち。また、年度末の振り返りも次年度に生かされていない」

「会議の目的が、会議の報告書を作るようになっていく。生徒のためになっているという実感がない」

具体的な手応えに結びつかないという悩みに対して、三浦先生は、既存の教育活動を精選し、教育目標を達成する上で効果が低いものや、ねらいがあいまいなものをやめることを勧めた。林野高校でもいくつかの教育活動を廃することで時間を捻出し、教師が教育目標を踏まえた授業改善などについて話し合うワークショップを定期的に開催した。

そうして、学校の変化を具体的に教師に感じてもらいながら、探究学習についての新しい評価モデルを学ばせるため、ミドルリーダーを大学の研究者につなぐなど、現場の教師に「越境する学びの場」を提供していった。

「ミドルリーダーを刺激することで、当事者意識を持たせることができましたし、教師が校長以上に自信を持ってカリマネを語れる領域ができたことが、ほかの教師にもよい影響を与えました」（三浦先生）

三浦先生からはカリマネにおけるPDCAサイクルについて、「うまく回っている実感がない学校は、あれこれと欲張らず、Checkとしてこれだけは絶対に見ておきたいというポイントを厳選することも必要」と、現場の課題に即したコメントもあった。そして、参加者の中でも、特に管理職に向けてこう語った。

「管理職の先生方は、ぜひミドルリーダーや若手の先生に自分の理想を語ってください。建前ではなく、心からの思いが先生方を鼓舞しますし、それがカリマネにおける教師の主体性を育むはずですよ」

校内研修でご活用ください!



分科会で使用したワークシート

◎組織・体制・運営上の課題&打ち手シート



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け」でご覧ください。

関西大学 教育推進部 教授 **森 朋子**



「カリマネ」を通じて 先生方が社会に変革を起こす

先生方に求められる 「越境する学び」

今回のワークショップでは、参加した先生が思いを語り合ったり、意見を述べたりするアウトプットの時間が重視されていました。実際、アクティブラーニングで思考を深めた生徒のような表情をしている先生がたくさんいらっしゃったのが印象的でした。ある先生は、グループの仲間に「自校の課題をここまできちんと言葉にしたのは初めて」と打ち明けていました。学校における先生方同士のコミュニケーションはまだ不足していると感じました。同時に、今後、先生方がもっと語り合えば、様々な問題が解決されていくはずだと、活発に語り合う先生方の姿に希望を見いだしました。

社会のあらゆる領域でイノベーションが求められる現代では、「越境する学び」が求められます。先生方であれば、校内外において他教科や他学年の先生と対話し、学び合うことです。様々な学校の現状を知ることが、あたり前だと思っていた価値観が揺らぎ、自分の学校を深く理解することにつながるからです。

「カリマネ」は教師たちの 社会変革への挑戦

現場の先生方は、「成績評価」から「学習評価」への転換にまだ戸惑っているということも改めて分かりました。学力の3要素のうち「知識・技能」の成績だけで、しかも教師から一方的に生徒を評価しているのが多くの学校の実情のようです。

確かに、「思考力・判断力・表現力等」の見えにくい学力、「主体的に学習に取り組む態度」といった見えない学力は、どう指導・評価すればよいか、分かりにくいものです。そのため先生方は、見える学力を一生懸命伸ばそうとしてきました。しかし、自校の学校教育目標で掲げられているのは見えにくい学力や見えない学力であり、先生方も、見える学力、見えにくい学力、見えない学力をバランスよく育んであげたいと思っているのではないのでしょうか。そのジレンマを教科や分掌の枠を超えて解決しようというのが、カリキュラム・マネジメントだと私は考えます。カリキュラム・マネジメントの土台は、先生方の対話です。生徒がどのような知識を活用して何ができるようになったのか、学校教育目標に照らし合

わせると、どんな指導が考えられるのか、感じたこと、気づいたことを自由に話し合っていたらいいと思います。さらにそこに客観データがあれば、思いや課題意識が共有されやすくなります。外部の模擬試験やアセスメント、校内の独自データでも結構です。カリキュラム・マネジメントの推進役の先生方には、学校教育目標を踏まえて、個々の生徒の成長をどのデータで見ているのか、データを選び抜く力も今後ますます必要になるでしょう。今回のようなワークショップ形式で、いろいろな学校の先生が自校の生徒を見取るデータを持ち寄り、「うちの生徒はこんな力を持っていますよ」と、データの利用方法とともに語り合う場をつくるのもよいかもかもしれません。

大学生と話していると、高校の先生方が与える影響の大きさに感動することがよくあります。先生方は、教育を通じて社会にイノベーションを起こす存在であると思います。そして、何が正解か分からない社会でイノベーションを起こす人材を育てるためには、生徒を多面的に見取り、寄り添い、伸ばすことが必要だと思います。カリキュラム・マネジメントは、社会変革への先生方の挑戦なのです。



静岡県立御殿場高校 教諭 **美那川雄一**

常に疑問を持ち、悩むことが 学校という組織の「健全さ」

仲間づくりのために 自分から語りかけてみる

ワークショップの最後に、参加者のある先生が「カリキュラム・マネジメントの推進は1人ではできないから、まずは一緒にやってくれ仲間を見つけない」と話していました。私はその言葉にとっても納得しました。考えてみれば、自分もそうしてきたからです。御殿場高校での一連の取り組みは、固定化したメンバーでプロジェクト化されているわけではありません。ただ、何かアクションを起す前には、「こんなことを考えているのだけれど……」と、何人かの先生に話すようにしてきました。自分が話しかけることで、周りの先生も「美那川の話聞いてみよう」「美那川に考えを話してみよう」と思うものです。対話的な関係は自分の働きかけでつくることができ、話すことで自然と仲間ができるはずで

す。私にとってカリキュラム・マネジメントは、「授業や部活動、学校行事の内容をすり合わせる作業」というよりも、「教師の考えや思いを合わせていく作業」なのです。担当の世界史Aの授業で私が生徒と接するのは、週にわずか2時間です。だからこそ、学校全体で教師間の考えや思いを合わせていくことが、生徒に大きな恩恵をもたらします。

疑問とアクションの連続で 学校は変わる

ただ、教師の考えや思いを合わせるには時間がかかります。ワークショップでも、何人かの先生から「御殿場高校では、ビジョンを共有するのにどれくらい時間がかかりましたか？」と尋ねられましたが、短期間でできるようなものではありませんし、ビジョンを言語化し、共有したからといってすぐに変化が見られたり、成果が出たりするとは限りません。

そもそも、ビジョンづくりとその共有には終わりが無いように思います。御殿場高校では、2018年度より、管理職が中心となって地域の企業、卒業生、そして生徒にヒアリングをし、本校で育成を目指す資質・能力とはどのようなものを検討しています。生徒たちからも、「専門知識・技能」「忍耐力」「コミュニケーション力」「正しいかどうかを判断する力」など、いろいろな意見が出てきました。生徒も自分の置かれている状況を踏まえてよく考えてくれていると感じました。

19年度は、各教師が「自分の授業でどんな資質・能力を育めるか」を考え、ヒアリングの結果とすり合わせていきます。両者は必ずしも一致しませんから、さらに検討が必要になります。例えば、

ヒアリングで挙げられた資質・能力の1つに「リーダーシップ」がありますが、それは具体的にはどのようなものか、本当に御殿場高校の生徒に必要なものなのか、必要であればどのような授業や行事で育むのか。また、ほかの教育機会が必要であるならば、それは何かと、更に考え、練り上げている段階です。

指導のPDCAサイクルが回っているとさえその通りですが、実は大きなことではありません。「ヒアリングではこういう資質・能力が挙げられたけれど、何か違う気がする」となどと、疑問を口にしてみることで、そして疑問をそこで終わらせずに、同僚に相談したり、授業方法を変えてみたりと、小さくてもよいのでアクションにつながることで、大切だと思えます。そして、そのアクションがうまくいかない時は、また別のアクションを模索する……言わば疑問とアクションの連続です。

完成したように思っても「何だか違う」と新たな疑問を持ち、「このままではいけない」と悩むことが、学校にとっては健全な状態なのではないでしょうか。そんな組織には「どう思う?」「どうしよう?」と対話が生まれます。時には生徒も交えて語り合いたいですね。学校について話し合わせることも、自分と他者について考えるきっかけとなり、生徒を育てる授業になるはずで



教師にとって「カリマネ」は、 答えが1つではない問いを考える旅

2つの学力を 生徒にどのように育むか

かつて多くの高校では、進路指導部などが中心になって「指導ストーリー」をつくり、それを基に教師が目線合わせをして、生徒の希望進路実現のために学力の向上を図る指導を行っていました。ところが近年、これまでの入試で重視されてきた学力と、社会で必要な学力の両方を生徒に養う必要が出てきたため、その状況が変わりつつあります。

これからの教師は、2つの学力が求められる生徒を支援することが必要であり、かつての「指導ストーリー」だけではすべての生徒の進路実現を果たしていくことは不可能です。2つの学力が求められる生徒を学校としてどのように支援するのか、その答えを教師全員が話し合いを重ねながら探していく—それがカリキュラム・マネジメンのねらいではないでしょうか。

生徒と話してみると、10年後、20年後は国境を越えた生き方があたり前になっているだろうと彼らなりに予測していることが分かります。生徒が変化できる社会での生き方を模索しているのであれば、学校としてはそうした生徒をどう支援するのか、考えなければなりませんし、カリキュラム・マネジ

メントは、学校として生徒に、変化する社会の生き方のヒントを提示するものであると思います。

今回、ワークショップを通して先生方とお話しする中で、それぞれの学校でカリキュラム・マネジメントに着手はしているけれども、成果がまだ明らかにならず、少し戸惑っている様子も見られました。このままの進め方でののか、何かすぐに改善すべきことがあるのか、先生方も答えを欲していました。ただ、その答えは学校の状況によつて様々で、こうすればよいという1つの答えは残念ながらありません。だからこそ、今回のワークショップのような場に参加して、いろいろな学校と情報交換をし、考え方の幅を広げていくことが大切です。

「越境」のチャンスに！

私が管理職の先生方に申し上げたいのは、カリキュラム・マネジメントの推進におけるミドルリーダーの重要性です。私は40代前半の頃、学校改革を進めるある高校の進路指導部長と話す機会がありました。「先生の学校では、なぜスムーズに改革が進むのですか」と尋ねたところ、その先生は笑いながら「私はちょうど年齢が真ん中なんですよ」と答えました。年齢的にも、立

場的にもみんなの真ん中にいる、文字通りミドルリーダーの立場だから、自分の言葉に耳を傾けてくれるのだとその先生は私に話してくれました。

カリキュラム・マネジメントを通して学校改革を実現する上では、トップダウン型のリーダーだけではなく、すべての教師の真ん中にあるリーダーも必要ではないでしょうか。管理職の先生方には、先を見通し、自分なりの仮説を持って動くなど、ミドルリーダーに求められる資質を見抜き、そういつに求められる資質を見抜き、そういった資質を備えた教師には、外部研修などのチャンスを与えていただきたいと思えます。今回のワークショップの監修者である森朋子教授は、その場を「越境する学び」と表現しました。ミドルリーダーに越境を経験させるのは管理職の役割です。

そして、カリキュラム・マネジメントの中で見られたちょっとした変化を拾い上げ、先生方を評価してあげてください。アンケートや調査データでもよいですし、日々の生徒の表情や態度の変化でも構いません。そして、地域や保護者にぜひ生の生徒の変化を発信してください。そうすることで、ミドルリーダーを始め、カリキュラム・マネジメントにかかわる先生方はきっと救われ、答えが1つではない問いを考える旅を続けることができるはずです。

参加者の振り返り

これからの教育を
 先生方と考え続けたい

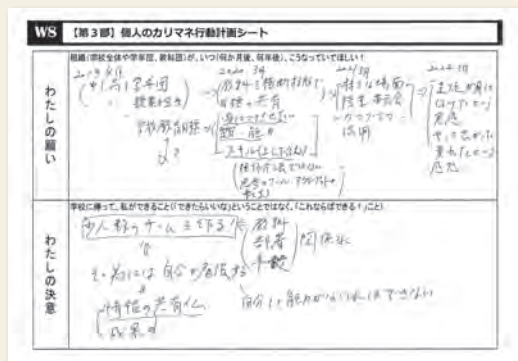
広島県・私立広島修道大学ひろしま協創中学校・高校
 新納良樹先生



ワークショップは、カリマネに関する知識の整理から実践報告まで、地方で働く私にとってはなかなか学ぶ機会がなかった内容ばかりで、参考になりました。また、他校の先生方とお互いの学校の抱える課題を共有し、それらにどう取り組んでいけばよいかアドバイスし合うことで元気をもらいました。

本校では今年度から探究科が発足し、生徒1人に1台のタブレットの導入が始まりました。それに伴い、探究の授業に関する会議が毎週行われ、ICT教育のあるべき姿の検討や研修を担う委員会も発足しました。今後は、探究学習やICT教育を一部の教師だけでなく、全教師がかかわるものにしていくことが重要です。

今回のワークショップで私は、教科や分掌を超えたチームをつくと決意を宣言しました。まだ数回ですが、先生方に呼びかけ、自由参加のICT研修会を開催しました。これからも、校内の先生方と勉強を続けていきたいと思っています。



しっかりとした幹を持った
 よりよい学校をつくりたい

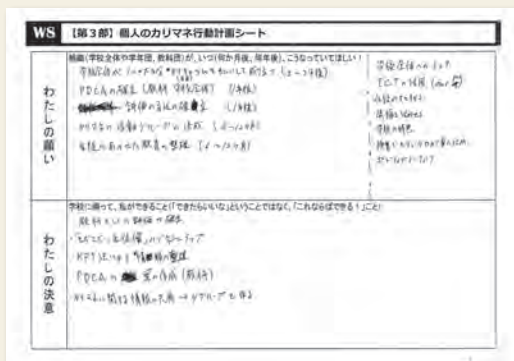
千葉県・私立文理開成高校
 舞木康博先生



これまで、カリマネをどのように計画、実行するかについて学ぶ機会がなかったため、今回のワークショップは私にとって大変ありがたい場でした。特に、他校の実践事例や取り組んでみての苦労などについて、先生方からお話を伺うことができたのは大きな学びとなりました。

ワークショップ後、新年度開始直後に校内で、事前課題のワークシートを使って、育てたい生徒像と育成を目指す資質・能力の明確化に取り組み、先生方から様々な意見をいただくことができました。1学期中に再度、今年度の生徒を実際に指導した手応えも踏まえて、改めてワークシートに取り組む予定です。

カリマネは、その学校の教育の根幹をしっかりとつくる作業だと考えています。根幹となる教育目標がなければ、一貫性を持った特徴ある教育は行えないでしょう。カリマネを通じて、本校の根幹をつくり、それに合わせたカリキュラムを策定することで、本校をよりよくできればと考えています。



それぞれの高校に合った
 カリマネを実現するために

「カリマネと言ったら、難しいもの」「管理職が行うもの」「推進しなければいけない」と言われているが、どんなものか分からない」といったイメージをお持ちの先生も多いのではないだろうか。そこで、今回のワークショップは、カリマネの意義や必要性だけでなく、何をすることなのか、どうやって推進していくのかといったWhatやHowの点についても考える内容にしました。

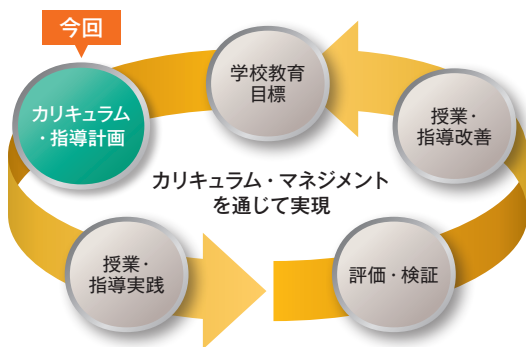
参加された先生方からいただいた「本校に帰って、ワークショップで体験したワークを行ってみたら」「他の先生方と内容を共有し、委員会が立ち上がった」といった言葉にも表れているように、これからの学校づくりにつながる機会になったのではないかと思います。

学校が目指すところ（＝学校教育目標）や学校内外の現状、そしてそのギャップから生じる課題は各校によって異なりますから、カリマネ推進上の具体的な施策や手順も各校で異なります。「答え」が1つではないからこそ、多様な他者から多様な考えを引き出し、それを自校のカリマネの実現に生かしていくことが重要ではないでしょうか。生徒だけでなく、教師にも、「越境する学び」が今、求められています。

改 革 事 例

**「総合的な学習の時間」での探究学習の実践を
 起点に、カリキュラム・マネジメントを推進**

佐賀県立佐賀西高校



◎佐賀藩の藩校・弘道館の流れを受け継ぐ伝統校。「質実剛健・鍛身養志」を校是に掲げ、次世代の日本・世界をリードする人材の育成を目指す。生徒の希望進路を実現するために、課外補習や個別指導の充実に力を注いでいる。

◎設立 1876 (明治9) 年
 ◎形態 全日制/普通科/共学
 ◎生徒数 1学年約280人

◎2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京大、京大、九州大、佐賀大、熊本大などに計210人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、西南学院大、福岡大などに延べ288人が合格。

◎URL <http://cms.saga-ed.jp/hp/saganishikoukou/>



**各世代の教師による
 プロジェクトチームを結成**

国公立大学の現役合格者数が例年150人以上に上る佐賀県立佐賀西高校では、2017年10月、高大接続改革や次期学習指導要領の実施を見据えて、自校として育成を目指す資質・能力と、それを育成する方策を定めるために、学校ブランドデザインの構築に着手した。松尾敏実校長は、そのねらいを次のように語る。

「新しい大学入試では、学力の3要素が評価されます。それを受け、本校として学力の3要素を具体的にどのように育成していくのか、教育課程や指導のあり方を明確化する必要がありました。また、今後大学入

試で活用が重視される調査書の作成のためには、私たち教師が生徒の活動を適切に評価する必要があります。そもそも、どのような資質・能力を持った生徒を育てたいのかを、学校教育目標において明確化しなければならぬと考えました」

構築の中心を担ったのは、教科・科目、分掌、年代の異なる5人のメンバーから成る「高大接続改革プロジェクトチーム」(以下、PT)だ。

「多様な意見が出るよう、ベテランから若手まで、各世代の教師をメンバーに入れました。さらに、『自分たちが学校を変えるんだ』という意識を若手教師にも持ってほしいと考え、リーダーには若手教師を抜擢しました」(松尾校長)

松尾校長がPTに検討課題として示したのは、①これからの時代を生きたる生徒に学校として身につけさせたい資質・能力の明確化、②「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)の見直し、③調査書作成に向けたポートフォリオの活用だ。

同校では、学校教育目標に「知育・徳育・体育の充実により、人格を磨き、グローバル社会の中で、高い知性と広い視野を持った、将来の日本や世界をリードする人材の育成を目指す」ことを掲げている。育成を目指す資質・能力は、その学校教育目標を具体化するものとして検討した。

総合学習については、それまで、3年間を通じて進路学習中心だったものを、1・2学年では探究学習中心に転換させることを検討した。それにより、思考力・判断力・表現力や主体性・多様性・協働性を育成したいと、松尾校長は考えた。

*「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。

総合学習を中心に、 各教育活動の関係性を整理

P Tがまず取り組んだのは、「西高生が身につける資質・能力」(図1)の設定だ。さらに伸ばしたい生徒の強みや補強したい弱点などについて話し合いながら、育成を目指す資質・能力を絞り込んでいった。P Tメンバーの山口司先生は、その話し合いの内容についてこう振り返る。



校長
松尾敏実
まつお・としみ

教職歴37年。同校に赴任して3年目。

進路指導主事、高大接続改革プロジェクトチーム

北川宏武 きたがわ・ひろたけ
教職歴27年。同校に赴任して13年目。

1学年主任、高大接続改革プロジェクトチーム

鶴田有紀 つるた・ゆき
教職歴25年。同校に赴任して5年目。進路指導部。

進路指導部、高大接続改革プロジェクトチーム

山口司 やまぐち・つかさ
教職歴21年。同校に赴任して3年目。3学年担任。

教務部、高大接続改革プロジェクトチーム

野崎宏一 のさき・ひろかず
教職歴14年。同校に赴任して7年目。2学年担任。

図1 「総合的な学習の時間」、教科指導、進路指導、生徒指導の関係

校是

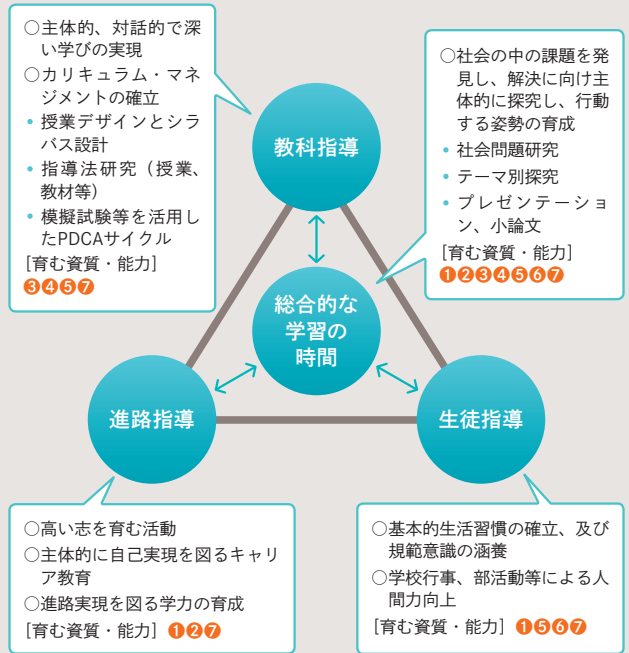
質実剛健(まじめで、たくましく、しっかりしていること)
鍛身養志(心身を鍛え、高き志を養う)

学校教育目標

知育・徳育・体育の充実により、人格を磨き、グローバル社会の中で、高い知性と広い視野を持った、将来の日本や世界をリードする人材の育成を目指す。

西高生が身につける資質・能力

- 1 主体的判断力 ものごとを多角的・多面的に吟味し、主体的に判断する力及び主体的に行動する力
- 2 自己認識力 自己の思考を客観的に捉える力
- 3 課題発見力・解決力 問いを立て、解決に向かう力
- 4 説明力 他者に自らの思考を過不足なく説明する力
- 5 協働力 他者を尊重し、協働して行動する力。他者を思いやる力
- 6 自律力 基本的な生活習慣を確立し、自律的に行動する力。規範意識を持って行動する力
- 7 実践力 自ら考えて行動し実践する力。自己実現を図ろうとする力



* 学校資料を基に編集部で作成。

「例えば、本校の生徒は、プレゼンテーションの機会を与えると、とても上手に発表します。ただ、そこでの説明が深い課題意識や思考に基づいたものかという点、十分ではないという意見が出ました。今後も、生徒の長所である『説明力』は伸ばしつつ、課題意識をしっかりと持って物事に取り組み姿勢も育みたいという点になり、育成を目指す資質・能力に『課題発見力・解決力』や『自己認識力』が上がりました」

P Tがまとめた資質・能力の案は、「主体的判断力」「自己認識力」「課題発見力・解決力」「説明力」「協働力」の5つだった。松尾校長は、それらの資質・能力を身につけるための土台となるものとして、「自律力」と「実践力」を加えて、「西高生が身につける資質・能力」を7つとした。

目標を定めることと並行して、総合学習と教科指導、進路指導、生徒指導の関係性を議論した。そのねらいは、それぞれの教育活動が7つの資質・能力のどれを育むのかを示すとともに、教育活動同士がどのような関係性で育むのかを示すことと並行して、総合学習を中心とした生徒の諸活動をより細かく記録・蓄積・活用できるツールとして「Classi」(※1)の導入を決定した。

* プロフィールは2019年3月時点のものです。

* 1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

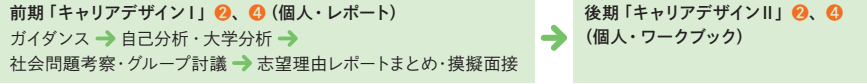
図2 「新・理想の星プロジェクト」(総合的な学習の時間)の目標と3年間の流れ

目標

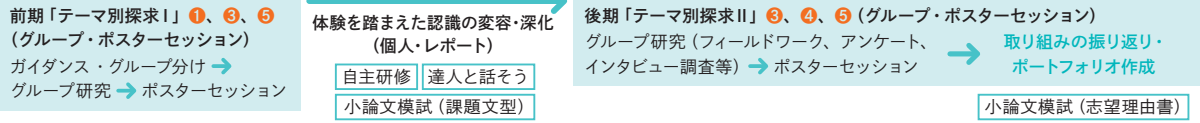
探究の見方・考え方を働かせ、自己のあり方・生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 探究の過程において、探究の意義や価値を理解できるようにする。
- (2) 自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。
- (4) 学習活動を通して西高生が育むべき7つの資質・能力を育成することを目指す。

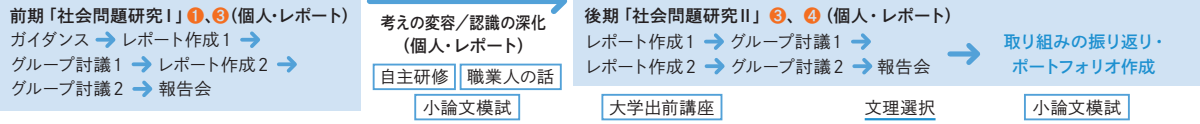
3学年 ● キャリアデザイン：キーワード「見通す」 視点①1・2年次の研究・探究テーマ ②自分の進路希望(大学・学問)



2学年 ● テーマ別探求：キーワード「深める」 視点①自分の研究テーマ ②自分の進路希望(職業・学問)



1学年 ● 社会問題研究：キーワード「拡げる」 視点①SDGs ②世界・日本・佐賀



*学校資料を基に編集部で作成。

SDGsを軸に、探究学習の3年間の指導計画を設計

PTで最も議論したのは、探究学習に転換する総合学習で行う「新・理想の星プロジェクト」についてだった。まず、3年間を通すテーマについて検討した。PTメンバーの野崎宏一先生は、次のように語る。

「PT内で一致したのは、社会問題に対する生徒の視野をさらに広げたいということでした。ちょうどその議論をしていた頃、担当していた1学年の総合学習でSDGs(*2)に関する書籍を読ませたところ、生徒たちから社会問題に対する様々な意見が出てきました。その様子をPTのメンバーに伝えると、SDGsは総合学習のテーマとして最適ではないかと意見がまとまりました」

18年度には、「大学入学共通テスト」の実施初学年である1学年団だけに負担をかけるのではなく、ともに探究学習を改善していくために、1・2学年団でその計画を実践した。1学年では、SDGsで掲げられている17の目標から、前期と後期で異なるテーマを生徒一人ひとりに割り振り、個人で探究学習を行わせた。

そして、問題解決案をレポートにまとめさせ、それを基にグループディスカッションと報告会を行った。18年度からPTのメンバーに加わり、1学年主任として「新・理想の星プロジェクト」を進めた鶴田有紀先生は、その進め方にした理由を次のように説明する。

「生徒に関心のあるテーマを選ばせるのではなく、教師がテーマを割りあて、普段は関心のないこと目を向けさせようと思いました。また、グループでの議論の前に個人で探究学習を行わせたのは、まず自分のものの見方や考え方、問題意識を認識させようとしたからです」

2学年では、グループ単位でSDGsに掲げられた目標の中から1つを選ばせ、探究学習に取り組みました。例えば、環境問題でも、水問題や地球温暖化問題、森林伐採など、生徒によって関心のあるテーマは異なる。そうした生徒が1つのグループとなつて様々な視点から議論し、課題や問題解決策の共通点・相違点を見出すことで、他者と協働する力を育みつつ、自分の思考を深めさせることをねらいとした。そして、最終的には活動内容を1枚のポスター

*2 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットから成る。



生徒を信じて力を伸ばすことの大切さを学んだ

鶴田有紀先生

進学校には、大学入試に対応できる学力を確実に身につけさせ、生徒が希望する進路を実現するという役割があります。ですから、「生徒の主体性を伸ばすために、もっとこういうことができたらいいな」と思っているけれども、これまでの取り組みを大きく変えるのは勇気があることです。

そうした中で、高大接続改革によって「大学入学共通テスト」を受験する初学年の生徒が入学してきたことは、新しいことにチャレンジするチャンスでした。「自主研修」に代表されるように、生徒自身に任せて行動させてみると、私たちの予想以上に主体的に取り組み、自ら自律力や実践力を伸ばしていました。もしかしたら、教師が生徒を枠にはめていたのではないかと反省しました。生徒の力を信じて支援することの大切さを学びました。

にまとめて、1年生や佐賀大学教育学部附属中学校の2年生、保護者を招いたポスターセッションを行った。また、評価の高かった2チームが、学校代表として、19年3月に行われた「京都大学ポスターセッション2018」に参加した（写真）。

そして、1・2学年で行った取り組みをよりよいものとするために、3年間の計画を見直した。最終的には、1年次では、SDGsが掲げる目標を考えさせて視野を広げ、2年次では、1年次に醸成された問題意識を更に深める活動を行い、3年次には、社会に対する問題意識を希望進路やその実現に結びつけていくという流れにした（図2）。

生徒自身が主体的に考え、経験を積む場面を多く設定

7つの資質・能力を育むために、生徒が主体的に考え、経験を積む場面を数多く設けた。例えば、18年度の夏季休業では、1学年を対象に「自主研修」を実施した。それは、生徒が経験したいボランティア活動やセミナーなどに、自分で申し込みや交渉を行って参加し、その成果をポートフォリオにまとめるという取り組みだ。

当初、教師からは「生徒にすべて任せて大丈夫か」と心配する声も上がったが、始めてみると、生徒たちは自分で体験先を見つけ出し、交

渉することができていた。中には、保護者の知り合いをたどり、東京のJAXAの研究者に話を聞きに行つた生徒もいたという。進路指導主事の北川宏武先生は、自ら行動する大切さを生徒に常日頃から伝えていると語る。

「生徒たちには、『大学進学がゴールではなく、大学を卒業した後にリーダーとして社会に貢献し、活躍できる人物になることが大切だ』と常に伝えていきます。生徒も主体性や自律性を身につけることの大切さを分かっているからこそ、そうした活動にも前向きに取り組んでいるのだと思います」

17年度を準備年として、18年度に始めた同校の学校ブランドデザインの構築とその実践は、まだ一步を踏み出したばかりだ。総合学習だけでなく、教科学習でも7つの資質・能力の育成を図ろうと、18年度の教科・科目の年間授業計画には、単元ごとに7つのうちのどの資質・能力を身につけさせるかを明記しているが、その実践も19年度に本格化させる。

松尾校長は、一連の取り組みの完成度を高めていきたいと語る。

「校長の役割は、学校全体の方向性を示すことで、具体的な教育デザインを描いていくのは現場の先生方です。これからも学校全体で議論しながら、取り組みの質の向上を図っていきたく考えています」

写真 2年生は、4～5人が1チームとなり、4月から1つのテーマで探究学習を行い、その内容を1枚のポスターにまとめた。学校で発表会を行った後、学年代表の2チームが、「京都大学ポスターセッション2018」に参加。全国の国公立高校30校、約200人の高校生が集まる中、代表チームは、自分たちの研究成果を堂々と発表した。

導かれた道標

「総合的な学習の時間」は、各教育活動を結びつける鍵となる

授業概要

- 石川県・富山県の有志の教師6人が集まり、仮想の高校「平和町高校」の教師として授業を行った。
- 参加した生徒は、石川県・国立金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校、石川県立金沢泉丘高校、私立金沢学院高校、私立金沢高校の各5人の計20人(1・2年生)。各校の生徒が1人ずつ入った4人1組の班で授業を行った。
- 授業のテーマは、「コンビニを科学する～平和町に理想のコンビニを創ろう～」。コンビニエンスストア(以下、コンビニ)の売り上げに影響する要素について、社会・数学・理科・英語・国語のアプローチでそれぞれ考える授業を20分間ずつ実施後、「店の経営が持続可能で、かつ利益が最大化し、客も存続し続けてほしいと思うコンビニ」について、班ごとに話し合い、それぞれの案を発表した。
- コンビニの立地は、会場校の金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校が位置する平和町とした。各班で、ターゲットとなる客層を設定し、その客層に向けた一押しの商品とそれを陳列する位置を決め、商品を宣伝するためのポップを作成することを目標とした。(P.33に本時の指導案を掲載)

仮想の学校「平和町高校」の教師陣

理科担当

石川県立
金沢泉丘高校
井川健太
いかわ・けんた

教職歴10年。同校に赴任して1年目。SSH推進室。



責任者・公民科担当

石川県・国立金沢大学
人間社会学域
学校教育学類附属高校
前田健志
まえだ・たけし

教職歴12年。同校に赴任して9年目。地理歴史・公民科主任。2019年4月から楽しい学校・教員コンサルタント second 事業主。



英語科担当

石川県立
金沢商業高校
前田昌寛
まえだ・まさひろ

教職歴19年。同校に赴任して3年目。進路指導課。1学年担任。2019年4月から金沢星稜大学。



国語科担当

富山県・
朝日町立朝日中学校
伊井昌彦
いゐ・まさひこ

教職歴27年。同校に赴任して1年目。2019年4月から富山国際大学付属高校。グローバルセンターに配属。



オブザーバー

石川県立
金沢二水高校
大島 崇
おおしま・たかし

教職歴13年。同校に赴任して2年目。NSH企画室。



数学科担当

石川県・
私立金沢高校
寺西 望
てらにし・のぞむ

教職歴5年。同校に赴任して2年目。高大接続改革推進室。



*プロフィールは2019年3月時点のものです。

5教科横断型授業で、
1テーマを多角的に捉えさせ、
授業と社会のつながりを考えさせる

9:20 数学的アプローチ

寺西先生は、利益と規格が異なる2種類のカップラーメンを示し、棚に置ける個数と過去の1日あたりの売り上げ個数から、利益率が高い陳列方法を班で考えさせた。次に、雑誌ごとに購入者の平均年齢と販売予定数を示し、平均年齢から予想した売れる雑誌が実際には売れなかった理由を班で考えさせた。データを基に考える重要性や分析方法の多様性に気づかせた。

9:00 社会的アプローチ

「商品価値は、需要と供給の関係以外に何で決まるか」と前田健志先生が問いかけると、生徒から「味やおいしさ」という回答があった。そこで、緑茶の味のブラインドテストを行ったところ、生徒が商品名を1つも当てられなかったことも踏まえて、商品を選ぶ理由を考えさせた。パッケージ、宣伝、ブランドなど、売り上げにかかわる要素を確認した上で、本時のテーマを伝えた。

5教科横断型授業のねらい

**教科の学びは社会とつながっていると
生徒に実感させたい**

2019年3月、石川県・国立金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校を会場として、金沢市内の高校4校の生徒20人が集まり、5教科横断型授業が実施された。授業の責任者を務めた同校の前田健志先生は、そのねらいを次のように語る。

「普段の授業は教科ごとに行われていますが、社会の事象は教科で分けられてはいません。そこで、1つのテーマの下、各教科の授業を行うことで、学びはつながっていると実感できれば、授業に取り組む姿勢が変わり、学びの質が高まるのではないかと考えました」

そうした趣旨に賛同した6人の教師が話し合い、指導案を作成した（P.33参照）。

授業を受ける生徒は、6人の教師の勤務校を中心に4校合同とした。石川県立金沢泉丘高校いずみかの井川健太先生は、念願だった他校との合同授業が実現でき、感慨深かったと話す。

「自校よりも進学校の生徒にはかなわないと思っている生徒は、少なくありません。しかし、学力観は変わるうとしており、生徒一人ひとりがそれぞれの個性を發揮することが重視される時代になりつつあります。他校生とのグループワークによって、社会の多様性に気づき、自分に自信を持つてほしいという思いがありました」

思考を活性化させる工夫・場づくりへの配慮

**生徒が気づき、考えたことを
活用できる展開に**

授業のテーマは、「理想のコンビニエンスストア（以下、コンビニ）を創ろう」とし、教科の特性を生かしつつ、「コンビニ」という共通の題材で5教科の授業を行い、教科間の関連性を深く感じられるようにした。

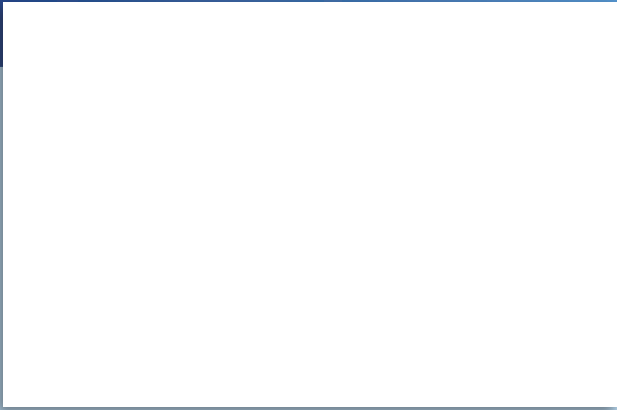
「意欲的に活動できるように、生徒により身近な題材としました。意欲があれば、どんなことでも題材にして、様々なアプローチで学べるというメッセージも込めています」（前田健志先生）

授業内容は、各担当者の案をメンバーで議論し、よりよいものにしていった。その際、大切にしたのは、知識を教えるのではなく、教師が疑問を投げかけ、それを通じて生徒が気づき、考えを表現する場を中心に展開することだった。

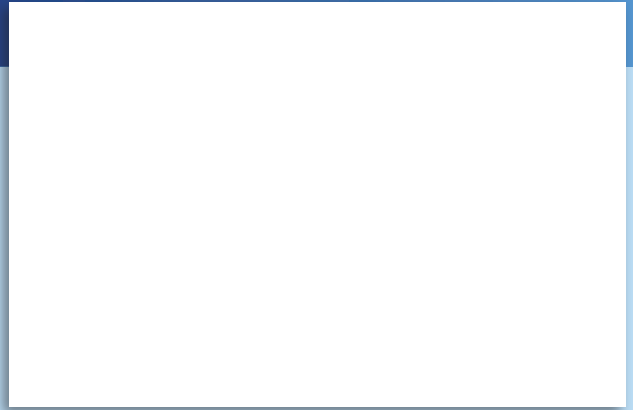
◎社会（公民）

社会は、導入として、これからの授業への期待感を高めることを意識し、「今日、コンビニで買った物は何か」と身近で親しみやすい話題から始めて生徒を惹きつけた後、コンビニの商品の価値が何で決まるのかと疑問を投げかけた。

「中身だけで商品を選んでいるのではなく、パッケージや宣伝に大きな影響を受けていることに気づかせようと、緑茶のブラインドテストを行いました。挑戦した生徒が1つも正解できなかったことで、生徒の関心がぐっと高まった



前田昌寛先生は、海外のコンビニの店構えや店内の写真を示し、日本のコンビニとの違いとその理由を問い、生徒は班で話し合っ



井川先生の授業では、文字を判読できる視野と、色を弁別できる視野を測定する実験を班ごとに行った。実験手法を説明した後、1人1回ずつ実験し、三角関数表を用いて角度を算出。自身の眼で見える角度を実感させた。井川先生は、眼の焦点はそれほど広くないため、売りたい商品に気づいてもらうには、周囲に注意を引くものを置くことが有効だと説明した。

のを感じました」(前田健志先生)

◎数学

数学科担当の石川県・私立金沢高校の寺西望先生は、ターゲットの客層や一押し商品の選定にデータ分析を活用していた発表内容に、授業の手応えを感じたと語る。

「数学は生徒から『社会でどう役立つのかわからない』とよく言われますが、データ分析の重要性を実感し、社会で数学がどう活用されているのか、理解できたのではないのでしょうか」

◎理科

理科は、唯一実験ができる教科として、実験を行うことにこだわったと、井川先生は言う。

「理科の最大の武器である実験を通して、理科での学びが身近なことにつながっていると感

◎英語

英語科担当の石川県立金沢商業高校の前田昌寛先生は、Why?と常に生徒に問いかけ、異文化理解について考えさせた。

「生徒には、海外と日本のコンビニの違いや、県内の在留外国人数が増加した理由など、様々な疑問を投げかけ、考えさせました。最後の各班の発表を聞くと、そこでの気づきを生かして、ターゲットの客層を設定していることがうかがえました。学びを別の場で活用するといった生徒の成長が感じられる場面でした」

◎国語

国語科担当の富山県・朝日町立朝日中学校の

伊井昌彦先生は、メンバーの提案で俳句の特性を商品のポップにつなげる内容とした。

「当初、自分の中で俳句とコンビニがつながらず戸惑いましたが、俳句とポップには言葉を凝縮してよさを伝えるという共通点がありました。そこを生徒に気づかせるよう授業を組み立てました。専門性が異なる教師同士で話し合ったからこそできた授業だと思っています」

◎グループワーク

グループワークは、初対面の生徒同士でも話し合いが進めやすいよう、ワークシート(図)の課題に沿って行えるようにした。「国語」数学などの教科は記していないが、5教科の授業で得た知識や考え方を活用できる課題とし、タブレット端末やスマートフォンを活用も促した。ポップ作成をゴールとしたことで、まとめやすかったのではないかと、井川先生は語る。

「目標を具体的に共有できたことで、議論を収束させやすかったのではないのでしょうか。ポッ

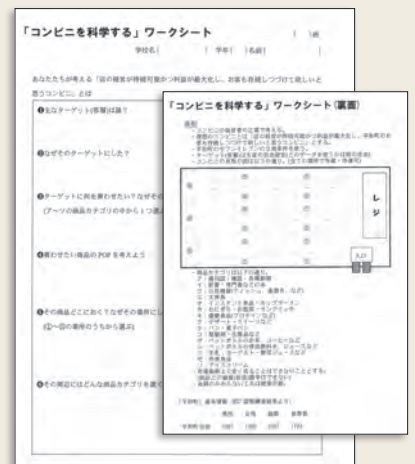
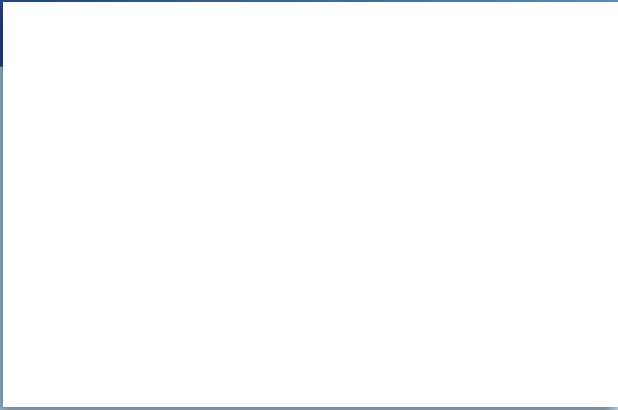


図 ワークシートの表面には課題を、裏面にはコンビニの条件を示した。* 授業者提供資料をそのまま掲載。



班ごとにワークシートの課題(図)に取り組んだ。自分がよく行くコンビニの様子や、購買行動と意識など、各自の経験や考えをどんどん出し合い、互いに触発されて、アイデアが広がっていく様子がうかがえた。学校が用意したタブレット端末や自分のスマートフォンでデータを調べて、裏づけを取りながら、ターゲットの客層や一押し商品を決めていった。



伊井先生は、俳句の切れ字やネットのニュースの見出しを例に、凝縮された言葉が読み手の想像力をかきたてると説明。次に、商品購入までの判断時間は平均3秒だと前置きした上で、ヒット商品のキャッチコピーを用いて演習を行い、お客様にこの商品を買いたいと思わせる表現の特徴について考えさせた。

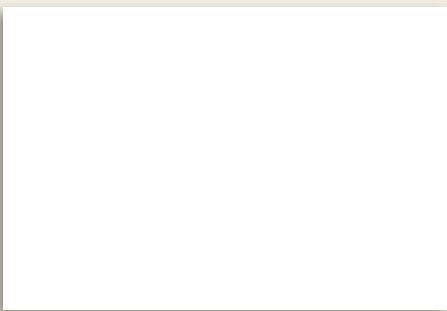


写真1 グループワークでは、「どんな人が最も来店しているのか、お店の人に聞くのが一番正確だ」と、平和町のコンビニに電話をした班もあった。「中年男性が昼食やコーヒーを買いに来ることが多い」と聞き、中年男性が昼食購入時に一緒に買ってもらえそうなデザートを一押し商品に設定した。

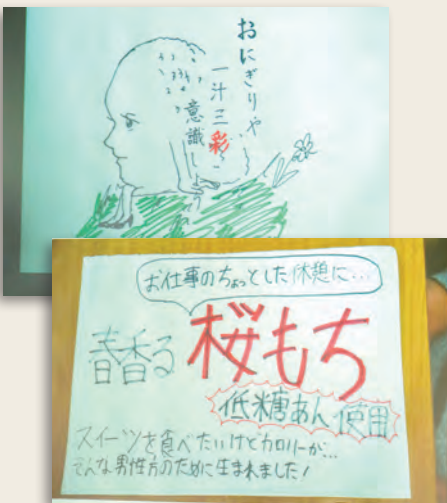


写真2 国語で学んだ俳句を活用してキャッチフレーズを考え、ポップを作成した班、メンバー4人で春夏秋冬を分担してデザートフェアのポップを作成した班など、それぞれに工夫を凝らしたポップを作成した。

授業の企画・運営に携わった石川県立金沢二水高校の大島崇先生は、生徒が見せた情報収集能力の高さに驚いたと話す。

5教科横断型の合同授業を全国の学校に広めたい

成果と今後の展開

「5班とも、班の全員に発言の場があるよう

に分担を決めていました。どの生徒もしっかり発表できて、自己肯定感を持てたのではないのでしょうか」(前田健志先生)

「5班とも、班の全員に発言の場があるよう

に分担を決めていました。どの生徒もしっかり発表できて、自己肯定感を持てたのではないのでしょうか」(前田健志先生)

「5班とも、班の全員に発言の場があるよう

に分担を決めていました。どの生徒もしっかり発表できて、自己肯定感を持てたのではないのでしょうか」(前田健志先生)

「5班とも、班の全員に発言の場があるよう

に分担を決めていました。どの生徒もしっかり発表できて、自己肯定感を持てたのではないのでしょうか」(前田健志先生)

「生徒は、タブレット端末やスマートフォンで、住民の年齢層や世帯数、コンビニでの客の滞在時間、ターゲットとした層の志向、売れ筋商品の価格帯など、実に様々な観点で情報を調べて、提案に生かしていました。生徒は、デジタルネイティブです。普段の授業も、その力を発揮できるデザインにしようと思いましたが」

現在は中学校の現場で教える伊井先生は、生徒は中学校での学びを十分生かしていたと語る。「中学校の『総合的な学習の時間』では、インタビューを行ったり、インターネットを使ったりして調べ学習を行っています。中学校での指導は生かされているのだと実感しました」

生徒の事後アンケートを見ると、「普段、教科間のつながりなんて考えていなかったけれど、そのつながりが分かることで視野が広がり、新しいことを考えられた」「班の全員が独自の意見を出していた。これからは、他者の考えを聞く

質疑応答では、「高齢者は健康志向だと言っていたが、インスタント食品をよく食べるという体験談は矛盾しないか」という疑問に対し、「高齢者には単身世帯が多く、そのような人たちにとって自炊は大変。だから、手軽なコンビニで健康を支援することが大事だと考えた」と答えるなど、考えを深め合った。最後に、授業前後の意識の変化などを振り返りシートに記入した。

各班3分間で、練り上げた理想のコンビニを提案。先生からの指示はなかったが、各班とも班の全員が発言するように担当し、発表していた。ターゲットの客層は、高齢者、労働者、学生、中年男性、女性と、班ごとに異なっていたが、それぞれ裏づけとなるデータを示していた。一押しの商品とポップの内容についても明確に説明していた。

ことを大事にしていきたい」などと答え、大きな刺激と学びを得ていたことがうかがえた。

「普段は積極的ではない生徒が、自ら発言し、答えを出すのが難しい場面では自分から助けを求めています。そういったことも含めて、生徒にはよい経験になったと感じました」(寺西先生)

今後の課題として、質疑応答の時間をもう少し確保したかったと、伊井先生は語る。

「他者の異なる意見を認識した上で自分の意見を伝えるやり取りをすれば、思考がもう少し深まっていったのではないかと思います」

今回行ったような5教科横断型授業は、工夫次第で、各校で実現できるのではないかと、大島先生は語る。

「校内や学年団で1つの共通のテーマを設定し、各自の授業でそれに関連する内容を話すようにすれば、生徒は教科間や教科と社会とのつながりを感じられるのではないのでしょうか」

現在、参勤交代をテーマに第2弾を構想中だ。

「この取り組みを全国に広めたいと考えています。進め方などの枠組みをしっかりつくって提供し、テーマやゴールは生徒の実情に沿うものとして、各校が実施しやすいようにしたいです」(前田昌寛先生)

「授業で変容する生徒の様子を見てもらい、関心のある教師を増やしていきたいと考えています。いずれは、47都道府県すべてで実施し、その指導案を集約し、コアカリキュラムの作成を目指します」(前田健志先生)

生徒の声



石川県・国立金沢大学人間社会学域
学校教育学類附属高校2年

内島駿介さん

●社会について真剣に話し合えた貴重な授業

前田健志先生がいつも言われている「社会では文系・理系は関係ない」ということが実感できた授業でした。今日の授業は5教科のリレー形式でしたが、各教科の先生が同じ時間・場所において1つのトピックについて話したら、もつとつながりを感じられるかもしれません。また、知らない相手だからこそ、個人的な経験や意見をいつもよりも関心を持って聞き、もつと知りたいたいと思って質問もどんどんできました。社会について本気で話し合った貴重な経験になりました。勉強は、受験のためだけでなく、夢につながる学びだと思って取り組んでいきたいです。

石川県立金沢泉丘高校2年
松本海太さん

●社会とのつながりを意識して学んでいきたい

今日の授業で俳句について学び、助詞を変えるだけでも語感が変わることを実感しました。これまで古文を学ぶ理由を見いだせずにいましたが、コミュニケーションに役立つのだと分かり、国語の授業への見方が変わりました。

また、物事がどのようにつながっているのかという仕組みを知ることでも、勉強になりました。コンビニ一つをとっても、学校で勉強することは社会につながっているのだから、一見関係なさそうなことでもちゃんと学ぼうと思えましたし、普段の授業や日常生活でも物事の間接性を意識して考えるようにしていきたいです。

本時の指導案

【テーマ】コンビニを科学する～平和町に理想のコンビニを創ろう～ 【授業時数】3時間 30分 (9:00～12:30)

【ねらい】①コンビニエンスストア (以下、コンビニ) を科学することを通じて、5教科の学びのつながりを実感させ、今後、各学校での学習における「つながり」を意識した自主的・協働的な学びを促進する。②多様な生徒同士のつながりを通じて、それぞれの特性 (強み) を生かすことが多面的・多角的な視野の獲得やイノベーションにつながることを実感させる。

時間	構成	ねらい	授業の流れ	教師の配慮	評価方法	
20分	導入	社会 (公民) 的アプローチ 商品の価格に着目し、必ずしも需要と供給の関係で価格が決まっていることに気づく。価格だけが消費行動の大きな指標ではないことにも気づかせ、自分の消費行動を見直す機会とする。広告・宣伝の重要性を認識した上で、次の授業につなぐ。	①生徒にコンビニで購入した商品を挙げさせる。②緑茶を飲み比べて商品名をあてるクイズを行う。③自分の消費行動を振り返らせ、商品購入の理由を挙げさせる。④価格や商品特性だけでなく、広告や陳列などの影響について考えさせる。	授業の導入として、生徒のコンビニへの関心を高めるとともに、楽しく取り組める雰囲気をつくる。	・パフォーマンス評価/授業前後で「自分の思考」がどのように変化したか。 ・成果物 (発表・ワークシート) 評価/視点の多さ、思考の深さ、提案の根拠 (合理性・現実性)、提案の斬新さ (構想力・独創性)、発表や質疑応答 (パフォーマンス) 力や言語能力	
10分	展開 深める	数学的アプローチ (前半) データを基に考える重要性や分析方法の多様性に気づかせ、その後の活動への意識づけを行う。同じテーマでも教科が異なることで考えられることに気づかせるため、理科との接続を踏まえて線形計画法を紹介する。	①商品の陳列をどうすれば最も利益が出るのかを、2つの商品を基に計算させる。②生徒から並べ方とその理由を聞く。	商品の並べ方とその理由について、生徒からできるだけ多様な意見を聞き出す。		
20分		理科 (生物) 的アプローチ 人間の構造から考えた効果的な陳列のあり方に気づかせる。視野角 (文字判別限界、記号識別限界、色彩弁別限界) について実験的に考察し、物の見え方や眼の構造についての理解を深める。	①物の見え方を実験によって観察。班ごとに、文字判別限界の測定実験を行う。②色彩弁別限界角の測定実験を行う。③眼の構造について説明し、商品の陳列やポップの配置などで、注意を引くことの重要性に気づかせる。	実験方法を手早く説明し、生徒がすぐに実験に入れるようにする。		
5分	休憩					
10分	展開 深める まとめる	数学的アプローチ (後半) ねらいは前半と同じ。データ分析に様々な切り口があることに気づく。	①女性ファッション誌と客の情報を与え、陳列する雑誌を選んだが、売れ行きがよくなかったことを伝え、その理由を、個人と班で考えさせ、発表させる。	生徒からできるだけ多様な意見を聞き出す。		
20分		英語的アプローチ 英語を通して発見したことを、仲間と協力して他者に適切に伝える。日本と海外のコンビニを比較して、外国人の目線からもよりよいコンビニを考える。	①海外のコンビニの写真を見せ、班でその特徴を考えさせ、発表させる。②石川県の外国人住民数が増加しているグラフを見せ、その理由を挙げさせる。③外国人を意識したポップや陳列などの写真を見せる。④外国人でも買いやすい陳列について話し合わせ、発表させる。	授業者は英語に進めるが、生徒の発言は英語・日本語のどちらでもよいとする。		
20分		国語的アプローチ 商品の魅力を伝えるための効果的なポップの作成を通じて、言葉を凝縮することの重要性を学ぶ。	①学習課題として「一押し商品のキャッチコピーを考える」を示す。②俳句やネットニュースのトピックを例示し、言葉の凝縮の効果について気づかせる。③俳句の空所補充の問題を出し、解答させる。その俳句ができた背景などを説明し、語感の重要性を感じさせる。	項目ごとに質問を投げかけ、言葉の凝縮について気づきや理解を促す。		
5分	休憩					
60分	議論、まとめ	各時の学習内容を整理し、自身の意見を述べつつ他者の意見を受け入れ、よりよい発表方法を提案できる。	①各班で、「店の経営が持続可能かつ利益が最大化し、客も持続し続けてほしいと思うコンビニ」について話し合う。②ターゲットを決め、一押しの商品のポップを作成し、提案をまとめる。	話し合いが停滞している班に、適宜かかわる。		
30分	発表 質疑応答	自班の提案を根拠立てて説明できる。他班の発表を聞き、要旨を捉えた上であいまいな点を質問できる。	①1班につき3分間で、発表する。②他班の発表内容のあいまいな点について質問する。			
10分	振り返り	本時の実践を振り返り、授業前後の自分の変化に気づいて、次の学習目標と行動につなげる。	①授業に取り組んだ姿勢を振り返るとともに、授業の前後での自分の考えや意識の変化、今後学びたいことについて、振り返りシートに各自記入させる。	授業中の意識や行動を振り返るワークシートを用意。		

*各授業者が作成した資料を基に編集部で作成。

石川県・私立金沢学院高校1年
西川夕貴さん

●学校での学びは社会で役立つと実感

データ分析をしたり、俳句をキャッチフレーズに生かしたり、学校での学びは社会で役立つものなのだと実感しました。国語は国語、理科は理科と、学びを別々に捉えていましたが、5教科はすべてつながっているのだと驚きました。グループワークでは、初対面だからこそ、自分の意見をはっきり伝え、相手の意見もしっかり聞こうと努力しました。普段は知り合いばかりなので、あいまいな言葉でも相手に伝わると甘えていたことに気づきました。メンバーは、知識が豊富で、相手が納得できるように話していて、そうした他校生と一緒に最後まで活動できたのは、自信になりました。

石川県・私立金沢高校2年
本由依さん

●異なる視点の人たちとの話し合いが楽しかった
授業でもグループワークでも、自分にはない視点に一度に多く触れて、刺激になりました。自分と全く異なる視点や考えを持つ人との交流が、こんなに楽しいものだとは思いませんでした。

また、眼の動きなどは医学系志望者にしか関係ないことだと思っていました。商品の陳列にもつながっていると感じてびっくりしました。さらに、英語は、外国人と話すだけでなく、外国人の考え方や視点を学ぶ目的もあるのだと気づきました。大学入試や就職のために勉強するのだと捉えていましたが、仕事に就いてから、どの教科の学びも生きるのだと分かり、今までの学び方を変えていきたいと思います。

大学入試改革への対応

学年団が一丸となった 指導改善で、生徒の思考力・ 判断力・表現力を育成

変革のステップ

背景と課題

- 2018年度に東京都教育委員会の「進学指導研究校」の指定校となり、1学年団を中心に大学入試改革への対応に力を入れ始めた

実践内容

- 「大学入学共通テスト」を見据えた教科指導の改善
1学年団の全教師がそれぞれの担当教科・科目について「大学入学共通テスト」の試行調査（プレテスト）の問題を分析し、その結果を反映した教科指導の改善に着手
- 模擬試験の事後指導を強化 学力向上対策として、模擬試験の復習を通じた課題の洗い出しと、それらの課題への取り組みを徹底
- 家庭への情報発信を強化 プレテストの分析結果などを学年だよりで定期的に家庭へ発信し、指導改善への理解と協力を呼びかけた

成果と展望

- 思考力などが求められる模擬試験の成績が向上
- 今後は、多面的・総合的の評価の入試に対応した取り組みの一環として、探究学習にも力を入れる予定

「大学入学共通テスト」を見据え、指導改善に向けて動き出す

東京都立こまへ狛江高校は、2018年度、東京都教育委員会の「進学指導研究校」の指定を受け、1学年団を中心に、「大学入学共通テスト」が始まる21年度入試に向けた指導改善に着手した。平野篤士校長は、次のように語る。

『大学入学共通テスト』の試行調査（以下、プレテスト）の問題を見ると、思考力・判断力・表現力が求められるなど、新傾向の設問が増えています。また、21年度入試では、英語の4技能を評価するため、大半の国立・公立大学が同テストの英語の試験と、『大学入試英語成績提供システム』に参加する民間の英語の資

PROFILE



校訓に「自主・創造・友愛」を掲げ、国際社会の平和と人類の福祉に寄与できる人材の育成を目指している。2018年度、東京都教育委員会から「進学指導研究校」「国際交流リーディング校」に指定された。

設立 1973（昭和48）年

形態 全日制／普通科／共学

生徒数 1学年約350人

2019年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、筑波大、東京外国語大、首都大学東京などに20人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ795人が合格。

住所 〒201-0013 東京都狛江市元和泉3-9-1

電話 03-3489-2241

Web site <http://www.komae-h.metro.tokyo.jp/site/zen/>

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

格・検定試験の両方を受験生に課すでしょう。そうした入試を受験する18年度の1年生を迎えるに当たり、新しい大学入試で求められる資質・能力をきちんと育成する学校になる必要があると考えました。18年度1学年団で先進的な取り組みを行い、今後の指導のロール



校長
平野篤士 ひらの・あつし
教職歴31年。同校に赴任して1年目。「地球的な視野を持つ、文武両道のたくましい人材を育成していきたい」



主任教諭・1学年担任・進路担当
佐藤亮一 さとう・りょういち
教職歴32年。同校に赴任して3年目。地理歴史・公民科。「広い視野から、教材研究や資料作成、生徒指導などに取り組んでいきたい」



主任教諭・1学年担任
小松裕子 こまつ・ひろこ
教職歴27年。同校に赴任して4年目。英語科。「生徒が自ら学び、成長できる力を持つよう、指導に全力を尽くしていきたい」



主任教諭・1学年主任
田中茂行 たなか・しげゆき
教職歴16年。同校に赴任して5年目。数学科。「生徒の目線に立ち、生徒の1歩先を行く教師でありたい」



1学年担任
沢田萌実 さわた・もえみ
教職歴6年。同校に赴任して1年目。理科。「生徒一人ひとりが成長できるよう、支援に力を入れていきたい」



1学年担任
塩山さおり しおやま・さおり
教職歴2年。同校に赴任して2年目。英語科。「教材研究にも生徒指導にも、全力で取り組む教師でありたい」

モデルをつくらうという思いもありました」
アウトプットを重視した指導で、生徒の英語表現への意欲を伸ばす

18年度1学年団では、全教師がそれぞれの担当教科・科目のプレテストを分析し、その結果を指導に反映させていった。

英語科では、英語教育を専門とする大学教員の助言を得ながら、生徒が4技能をバランスよく「使う」授業づくりを推進。例えば、「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」の両科目で、「話す」「聞く」活動として、教科書のトピックについてのディスカッションなどを増やしたと、英語科で1学年担任の小松裕子先生は話す。

「当初は、間違えないようにするためか、教科書の表現をそのまま用いる生徒が少なくありませんでした。しかし、自分で工夫しなければ、英語力は身につけません。意欲的に表現できるよう、『間違ってもよいから、自分で考えて話そう』と繰り返し伝えました。また、文法的な課題があっても、教科書の表現を自分の言葉で言い換えたり、積極的に考えを述べたりする生徒を褒めました。そうした指導を続けた結果、間違いを恐れない雰囲気¹が学年全体に浸透しました」

「書く」活動としては、両科目とも授業の最後に、毎回、教科書の内容についての感想などを英文にまとめさせた。教師はそれを回収・点検し、文法的な誤りなどがあれば、「コレクション

ンコード」という記号で指摘。例えば、語形が時制や人称と整合していなければ「v.f」、語順が不正確であれば「w.o」と、誤りがある箇所²に書いた。そして、次回の授業で生徒に返却し、書き直しをさせた。英語科で1学年担任の塩山さおり先生は述べる。

「生徒には、どう直せばよいのか、自分で気づいてほしいと思っています。そこで、教師が添削するのではなく、誤っている部分を記号で示すことにしました。そうした中、自分で辞書を引いたり、クラスメートと相談したりしながら、正確さを意識してリライトをする生徒が目立つようになりました」

「コミュニケーション英語Ⅰ」では「読む」活動にも力を入れ、毎回の授業で教科書を黙読する時間を設定。WPM（*1）を計測させ、振り返りシートに記録させた（P.36図1）。

「プレテストでは、英文を速く、正確に読む力がより重視されていました。そこで、速読を意識させるために、WPMを測らせることにしました。また、黙読後には正誤判定問題を課し、正確に読解できているかどうかを確認させました」（小松先生）

生徒に初見の長文読解問題を課し、情報を選択する力の育成を図る

両科目では、定期考査の内容も変えた。以前の学年では、基礎的な文法問題や既習の英文の読解問題などを出していたが、18年度1学年で

* 1 words per minute の略。1分間で読むことができる語数のこと。

図1 「コミュニケーション英語I」の振り返りシート

②学習の振り返り	
A. 英語学習において、自分が頑張れていることは何ですか。	
2学期中間	
2学期期末	
B. 学校・家庭での英語の学習において自分の足りないところやもっと頑張りたいこと	
2学期中間	
2学期期末	

「コミュニケーション英語I」の振り返りシートには、WPMの記録欄に加え、自分の頑張りと課題、今後の目標などを文章化する欄も設けている。定期的にそうした振り返りを行わせることで、主体的に学びに向かう力を育成しようというねらいがある。

*学校資料を編集部で一部改編。

は、それらに加えて、初見の長文を読ませたり、テーマを与えてエッセイを書かせたりした。「プレテストでは、センター試験に比べて、1つの問題の中で示される情報量が増え、情報を適切に取捨選択する力が一層求められています。そうした力を伸ばせるよう授業を改善し、その成果を測るため、定期考査で初見の長文読解を課すことにしました。また、エッセイを書かせることは、民間の英語の資格・検定試験の対策につながり、自分の考えとその根拠を整理して述べるライティングのスキルを高められると考えました」（塩山先生）

英語の4技能を客観的な指標で測る機会としては、「GTTC」を定期的に受検させた。そして、成績帳票を返却する際には、自分の課題

や、それを踏まえた今後の対策などを振り返りシートに書かせた。

図を描くことで、生徒に基礎事項の理解を深めさせる指導を推進

数学科では、「図を描く」ことに重点を置いて指導した。1学年主任で数学科の田中茂行先生は、その目的を次のように語る。

「プレテストでは、深い思考力が求められる問題が増え、表現力が必要な記述式問題も出されていきました。そうした発展的な問題に対応できるようにするためには、定理や公式といった基礎事項をしつかりと理解することが非常に大切です。そこで、『なぜ、そうなるのか』を視覚的に把握できるように、図を描く力を伸ばそうと考えました。具体的には、ノートに図を大きく描き、問題を解く中で気づいたことを図に書き入れていくよう指導しました」

思考力・判断力・表現力の総合的な育成にも力を注いだ。授業にはアクティブ・ラーニングの視点を取り入れ、グループで問題演習を行う場面を増やした。定期考査では、誤りを含む数式を示し、どこが間違っているのか、どう直せばよいかを書かせる問題などを出した。

資料問題に対応する基礎として、生徒の読解力の向上を図る

理科では、実験結果などの資料を読み解く問

題への対応を最重要課題として位置づけた。「化学基礎」では、そうした問題に取り組むための基礎を固められるよう、読解力の向上を図った。その理由を、1学年で同科目を担当した沢田萌実先生は次のように述べる。

「18年度、私は3学年の『化学』も担当し、センター試験の過去問題の演習をさせました。すると、実験の資料を考察する問題などで、問題文の意味が分かっていない生徒が多いことに気づき、同じ課題が1年生にもあるだろうと思いました。プレテストでは、センター試験よりも複雑な資料問題が多く出されていきました。そうした問題に対応するために必要な読解力は、すぐには身につけません。1年次からの育成が必要だと考えました」

沢田先生は、毎回の授業で教科書を読む時間を設け、生徒に例題の解答の根拠を教科書から探させることにした。また、授業の中心に問題演習を据え、生徒一人ひとりに取り組ませた後は、グループでの学び合いとした。

「学び合いでは、成績上位層の生徒が成績下位層の生徒に発展的な問題の解法を解説していました。そうした中で、質問に分かりやすく答えられるよう、教科書から根拠を示したり、解説を聞き、教科書を注意深く読み返したりする生徒が増えました」（沢田先生）

同校では、沢田先生の指導を職員会議などで取り上げ、全学年・全教科で参考にしてほしいと伝えている。平野校長は、こう期待を寄せる。

「沢田先生は、生徒一人ひとりに考えさせた上で、生徒同士が考えを述べ合う場面を増やすなど、思考力と表現力の両方を伸ばそうとしています。そうした実践を全教師が共有すれば、全校体制で指導を充実させていけると考えています」

模擬試験の復習を必ず行わせ、課題解決の意識づけを徹底

各教科担当の教師による指導改善に加え、学年団としては、2つの取り組みに力を注いだ。

1つめは「進研模試」の事後指導であり、1年生全員に「進研模試デジタルサービス」の復習教材を課した。活用の徹底を図るため、生徒一人ひとりの取り組み状況はクラス別に一覧化し、課題のある生徒には担任から声をかけた。1学年の進路担当の佐藤亮一先生は話す。

「模擬試験は、自分の課題を洗い出す絶好の機会です。生徒が課題を見つけられるよう、復習を必ず行わせることにしました。また、1年生を対象とする模擬試験では、『大学入学共通テスト』への対応として、思考力・判断力・表現力を測る問題などが増えています。模擬試験の振り返りを通して、自分に必要な力を意識させるねらいもありました」

2つめは、新しい大学入試に対応した指導改善の必要性を家庭に発信することだ。例えば、学年だよりでは、21年度入試の制度の概要を解説したり、各教科団によるプレテストの分析結果を紹介したりした。

果を紹介したりした。

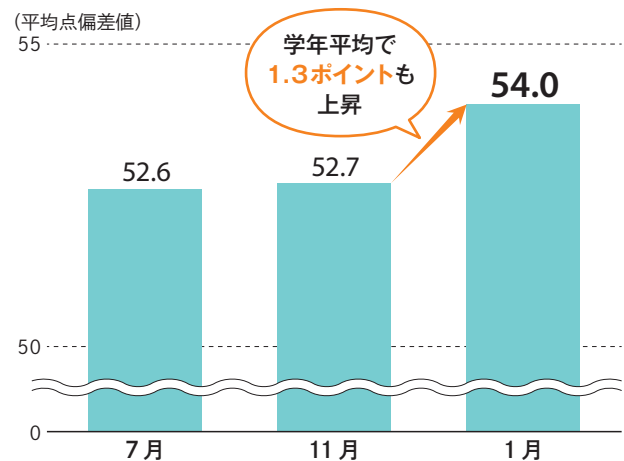
「学校と家庭が連携すれば、教育活動はより充実していきます。そこで、学年団が何を目標として指導改善に取り組んでいるのかを定期的に発信し、保護者の理解と協力を得たいと考えました」(田中先生)

探究学習を充実させ、多面的・総合的評価の入試への対応を図る

18年度の1学年における一連の指導改善の成果は、学力向上として結実した。記述式の進研模試では、国語・数学・英語の各教科の成績が上がり、19年1月の回の英語は過去最高となった(図2)。思考力・判断力・表現力が向上していることがうかがえる。

同学年団では、今後、指導のさらなる発展を目指す。その1つが、模擬試験への意識づけの強化だ。具体的には、模擬試験の1か月前から「Classi」(※2)で練習問題を配信し、必ず取り組ませるなど、事前指導にも力を入れていく。学校全体としても、19年度からの新しい取り組みの具体化に向けて動き出している。例えば、18年度の1学年での指導改善を継承できるように、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」などを柱とする学校ブランドデザインを策定し、教育活動の指針とした。ほかにも、19年度の1学年で先行実施される「総合的な探究の時間」への対応に着手。調べ学習だけではなく、生徒が仮説を立て、それを検証す

図2 「進研模試」における英語の成績の推移



*学校資料を基に編集部で作成。

る学習ができるカリキュラムの設計に向け、プロジェクトチームを発足させた。2年次の台湾への修学旅行を探究学習の一環とし、フィールドワークなどを行わせることを検討中だ。

「生徒は探究学習を通して、答えが1つではない問題に出合います。そうした問題では、教科横断的な資質・能力が求められます。そして、探究学習に取り組む生徒の姿から、教師が生徒の新たな強みに気づくこともあるでしょう。生徒の多様な資質・能力を見いだすことは、新しい大学入試で重要性が高まる多面的・総合的評価への対応にもつながります。今後も、先生方とともに、指導改善に力を入れていきたいと考えています」(平野校長)

*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

地域と連携したPBL

自己肯定感を醸成し、何事も
粘り強く行う生徒を育てる
「新川創生プロジェクト」

変革のステップ

背景と課題

- 学力面から自分に自信が持てず、思うようにいかないと、すぐに諦めてしまう生徒が少なくなかった

実践内容

- 「**新川創生プロジェクト**」の推進 生徒に様々な成功体験を積み重ねられるよう、地元の富山県魚津市や富山大学と連携協定を結び、PBL(*1)などを行う「新川創生プロジェクト」を始めた。取り組みを本格化させた2018年度の1学年では、「総合的な学習の時間」とロングホームルームを中心に同プロジェクトを推進。自分のよさや強み、自分のできることを実感させられるよう、PBLなどを行った。また、定期的に生徒に振り返りをさせ、その結果を基に同プロジェクトの成果を検証した
- **学び直しの工夫** 18年度の1学年では、放課後などに数学の学び直しに力を入れた。生徒の実態に応じた指導ができるよう、習熟度別のプリントを作成した

成果と展望

- 生徒の自己肯定感が醸成され、学習意欲が向上
- 多くの生徒が学力を向上させた

生徒に成功体験を積み重ねるべく、
地域と連携した取り組みに着手

富山県・私立新川高校は、同県北東部の「新川地区」唯一の私立高校だ。普通コースと特別進学コースから成り、4年制大学や専門学校などへの進学から就職まで、多様な希望進路を抱く生徒が集まる。生徒は素直な半面、小・中学校段階での成功体験が少ないためか、自分に自信が持てず、思うようにいかないことがあると、すぐに諦めてしまう傾向にあった。濱元克吉(はまもとかつよし)教頭は、次のように話す。

「自己実現のためには、つまずいても立ち上がり、粘り強く課題解決を図る必要があります。そうした意欲を醸成できるように、生徒

PROFILE



高岡日本大学高校魚津校舎として開校。教育目標に「心豊かで創造性に富み、主体的に行動して、社会に貢献できる生徒を育てる」を掲げ、道徳教育と能力・個性の伸長を両輪とする教育活動を行っている。

設立 1973 (昭和48)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約120人

2019年度進路実績(現役のみ) 私立大は、富山国際大、金沢学院大、愛知工業大、日本福祉大などに延べ8人が合格。短大、専門学校進学25人。就職43人。

住所 〒937-0041 富山県魚津市吉島1350

電話 0765-24-2015

Web site <https://www.niikawa.ed.jp>

* 1 Problem Based LearnigあるいはProject Based Learning の略。

* プロフィールは2019年3月時点のものです。

に様々な成功体験を積みませ、『やればできる』
という実感を抱かせたいと考えました」

そこで、2017年度、地元の魚津市や富山
大学と連携協定を締結し、グループでのPBL
やキャリア教育などを行う「新川創生プロジェ
クト」を始めた。17年度は不定期での実施だっ
たが、18年度の1学年からは、週1回ずつの「総
合的な学習の時間」とロングホームルームなど
で定期的に行うことにし、取り組みを本格化さ
せた。さらに、両コース共通の3年間の段階的
な指導計画も策定。1年次には、自分のよさや
強み、自分にできることを意識させ、2年次に
は、自分が社会で何がしたいのかを具体的に考
えさせる。そして、3年次には、生徒一人ひと
りの希望進路に応じて、面接対策や志望理由書
作成のための個別指導を行う計画だ。濱元教頭
は、同プロジェクトのねらいをこう語る。



教頭
濱元克吉 はまもと・かつよし
教職歴20年。同校に赴任して21年目。数学科
「まず自分が感動してこそ、人を感動させら
れる。『目らが動く』教師でありたい」



1学年担任
浅井嵩元 あさい・たかもと
教職歴12年。同校に赴任して6年目。数学科
『楽しさの中に、面白さあり』をモットーに、
生徒と向き合っていきたい」



1学年主任
永原 祥 ながはら・しょう
教職歴6年。同校に赴任して7年目。理科
『できる』『分かる』を目標にした指導を行い、
生き方教育を実践していきたい」

「生徒には、多くのことに挑戦しながら、
自分の可能性を探ってほしいと思っていま
す。そこで、活動の場を多様にできるよう、
地域と力を合わせて取り組むことにしまし
た。そうすれば、次期学習指導要領の理念で
もある『社会に開かれた教育課程』の実現に
つながるとい思いがありました」

前向きに取り組めるよう、生徒 同士が考えを共有する環境を整備

18年度の1学年での取り組みを見ていく。
1学期には、自己理解を深める第一歩として、
生徒が中学時代までを振り返って、自分が何に
関心があるのかを探ったり、1年次における目
標を立て、それを3学期の自分への手紙として
書いたりした。そして、関心や目標をクラスメー
トと語り合い、クラスで発表する場面も積極的
に設けた。それらの活動のねらいを、1学年主
任の永原祥先生はこう話す。

「本校には、『自分のやりたいことが分から
ない』と言う生徒が少なくありません。そこ
で、自分の考えを持ち、それを恥ずかしがら
ずに言葉にできる環境を整えることを大切に
しました。クラスメートの考えに生徒は刺激
を受け、『自分もやってみよう』という前向
きな気持ちになると考えました」

学校行事も同プロジェクトの趣旨から見直
し、1学期末には、同校の伝統行事であるボラ
ンティア活動を行った。それは、全学年に設定

写真1 清掃活動の準備として、各グループはタブレットを持って地域を歩き、清掃が必要だと思う場所を撮影。学校に帰った後、それを見ながら、役割分担や清掃に必要な道具などについて話し合った。複数の場所を清掃しようとする場合は、優先順位も決めた。

されており、以前は教師が活動内容を指定する
学年が多かったという。18年度の1学年では、
同プロジェクトの一環と位置づけ、生徒同士で
自分たちができることを話し合わせた結果、地
域の清掃活動に取り組むことになった。そして、
生徒が5〜6人のグループに分かれ、通学路や
最寄り駅周辺を歩き、清掃する場所や役割分担
などを決めていった(写真1)。事後には、グルー
プごとに活動を振り返り、工夫した点や反省点
などをクラスで発表。代表のグループは学年集
会でもプレゼンテーションを行った。1学年担
任の浅井嵩元先生は、生徒の姿をこう語る。

「広範囲を効率よくきれいに清掃できるよ
う、何度も下見をするなど、主体的に行動す
るグループが目立ちました。そうした中で、
気になることがあれば何でもクラスメートに
相談し、力を合わせようとする雰囲気がか

スに醸成されていったと感じます。また、清掃活動を通して、生徒たちは地域美化の大切さに改めて気づいたようです。『ゴミのポイ捨てはやめよう』といった啓発ポスターを作成し、校内に掲示するグループもありました」

教師は「相談に乗る」に徹し、「生徒に考えさせる」指導を推進

2・3学期には、地域の活性化を図るPBLを行った。そこには、答えが1つではない問いに向き合わせ、自分たちの力を試させるねらいがあった。

まずは、地域の実態を「知る」ことを重視。魚津市役所の職員らによる講演会を設定し、少子高齢化を始めとする様々な課題を具体的に話してもらった。各グループは、その中から関心のある課題について書籍やインターネットで調べ学習を行い、地域美化や観光客の誘致などのテーマを設定した。次に、テーマに応じた解決策を探るため、フィールドワークを実施。例えば、観光による町おこしを考えるグループは、地域の特色ある施設のPR方法を見つけるため、「魚津埋没林博物館」(*2)などを取材した。学年団では、「生徒に考えさせる」という指導方針を共有。具体的には、テーマを思うように設定できないグループには、「魚津市の気になるところは何か？」などとアドバイスをした。指導は基本的に担任が行ったが、教科担当の教師も空き時間には各教室を回り、生徒たち

に声をかけた。

「本校では初めての取り組みなので、1学期に富山大学の先生を講師として招き、PBLについての教員研修を行いました。そこで強調されていたのが、教師が『教える』のではなく、『相談に乗る』指導です。週1回、学年団の全教師が集まる学年会議などで、そうした指導方針を共有することに力を入れました」(永原先生)

生徒が失敗を恐れなくなるよう、多様な社会人の失敗経験を伝える

2学期末には、外部のキャリア教育プログラムを活用し、20〜30歳代の社会人ら二十数人を招いた特別授業を設定。まず行ったのが、PBLの中間発表だ。

「社会人との質疑応答に備えて、生徒たちは事前に質問を予想し、答えを用意していましたが、本番では想定外の質問を受けることも多く、1つのテーマにいくつもの見方があることを実感したようです。中間発表後は、より多様な観点から課題を分析し、解決策を考えるグループが目立ちました」(永原先生) 続いて、大学生と社会人に自分の失敗経験を述べてもらう講話を実施した。

「本校の生徒には、『1度つまずいたら起き上がれない』といった思い込みがあり、やりたいことが見つかったも、それに挑戦できない傾向が見られます。そこで、思い通りの人



写真2 「魚津市への提案発表会」には、学年の代表として7グループが進出。どのグループも、自分たちの提案を分かりやすく示せるよう、プレゼンテーションソフトで作成した資料を投影するなど、発表方法を工夫していた。発表会の最後には、審査員が優秀グループを選んで表彰した。

生を歩んでいるように見える大人にも、失敗や挫折は多くあり、それらは乗り越えられることを伝えたいと考えました。本校の事務長が窓口となり、転職や起業など、様々な経験を持つ人たちを招きました」(濱元教頭)

3学期には、各グループが最終的な解決策をまとめ、学年集会で発表した。そして、魚津市長や富山大学学長らを審査員として招いた「魚津市への提案発表会」では、代表のグループがプレゼンテーションを行った(写真2)。

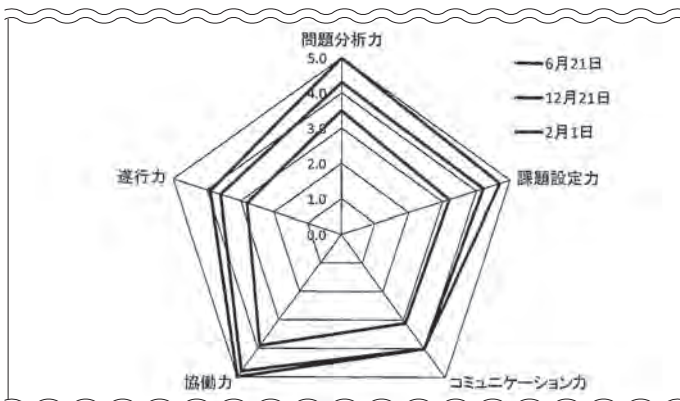
「自分たちで工夫しながら取り組んできたテーマなので、どのグループも堂々と発表をしていました。審査員による講評でも、地域の課題を的確に把握しているといったコメントが目立ち、生徒たちはうれしそうでした。『やればできる』という自信につながったと思います」(浅井先生)

* 2 国の特別天然記念物に指定されている「魚津埋没林」を保存・展示する公立博物館。埋没林とは、土石流や海面の上昇などにより、森林全体が地中・水中に埋没したものの、魚津市の漁港の海底で発見された、約2000年前の杉の埋没林を魚津埋没林という。

生徒の振り返りの結果を 指導改善に生かす

同プロジェクトの成果検証としては、各学期末に1回、2つのツールを用いて生徒に振り返りをさせた。1つめのツールは、「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」を自己評価する「新川ルーブリック」で、他校の取り組みを参照して作成した。もう1つのツールは、「問題分析力」「課題設定力」「コミュニケーション力」「協働力」「遂行力」を測るアセスメント「能力特性評価（NTH）」（図1）で、富山大学が学生の潜在的な資質・能力を把握するために開

図1 3学期の「能力特性評価（NTH）」の帳票（抜粋）



「能力特性評価（NTH）」の結果は、帳票として生徒に返却する。その際、資質・能力の変化を示すレーダーチャートを掲載し、生徒の自己理解を深めようとしている。
*学校資料を編集部が一部改編。

発したものを改編した。

「同プロジェクトの指導に携わる教師には、生徒の変化が肌感覚で分かります。そうした変化を可視化し、定点観測することで、指導改善につなげやすくなりました」（濱元教頭）

学習意欲の醸成に向け、生徒の実態に応じた学び直しを行う

18年度の1学年普通コースでは、学力向上にも力を注いだ。例えば、数学科では、定期考査期間などを除いて毎週、2つの学び直しを実施。1つは、同コースの1年生全員を対象に、月々木曜日の帰りのホームルーム後の15分間で行った数学の問題演習だ。教材に用いるプリントは、濱元教頭や浅井先生ら数学科の教師が、「基礎力診断テスト」（*3）の診断レポートの結果を基に、毎回、習熟度別に4種類を作成した。

「問題が難しすぎたり、易すぎたりすれば、生徒は学習意欲を失ってしまいます。生徒の実態に適切に応じられるよう、プリントの難易度を柔軟に変えるようにしました。また、担任が必ず立ち会い、問題演習から自己採点まで、生徒自身にきちんと行わせることにしました」（濱元教頭）

もう1つは、同テストのGTZ（*4）がD3の生徒を対象とした補習だ。月・水曜日の7時限目に浅井先生が指導。金曜日には、その週の補習で学習した内容を出題するテストを実施し、合格すれば、翌週から補習の対象外とした。

自分に自信を持ち、教科学習に意欲的に取り組む生徒が増加

18年度の1学年では、同プロジェクトを進める中、何事にも前向きに取り組む生徒が増えていった。地域の課題を自分事として捉え、PBLを行う生徒が多かったことは、前述の通りだ。そうした意欲は、教科学習にも反映された。その1つが、基礎力診断テストの成績向上であり、GTZがD3の生徒が、1年間で大きく減った。

「ボランティア活動やPBLを通じてクラスメートと協働して学ぶ中、生徒一人ひとりが成功体験を積み、自分に自信が持てるようになったのだと思います。教科学習にも、粘り強く取り組み始めました」（浅井先生）

18年度の1年生の自己肯定感が向上したことは、「新川ルーブリック」による自己評価にも表れた。例えば、「話し合いの場では、自分と反対意見を言う人がいても、自分の考えをはっきり言うことができる」「自分の強みをうまく生かすことができている」と自己評価する生徒が年間を通して増え続けた。今後は、自己肯定感と学力との相関を把握できるよう、「新川ルーブリック」による自己評価と基礎力診断テストの結果をクロス分析することを検討している。

「同プロジェクトは、緒に就いたばかりです。18年度1学年における成果を適切に検証し、さらなる発展につなげたいと考えています」（濱元教頭）

*3 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

*4 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、教師間で探究学習の指導上の課題やノウハウを共有するシートを検討する。

富山県・私立片山学園中学校・高校 森内梨絵先生提供
「探究学習指導・共有シート」

Before

3年間の探究学習の計画表／指導・共有シート

学年	テーマ	期	探究活動のプロセス	使用ツールシート名	具体的な活動内容	進捗状況	担当教員		
1 日英双軌 (Y1~Y2)	4	4	目標設定	キーワードマップ	テーマ・問いの作成と選択	目標設定	高1全員		
		5	仮説設定(行・列・行の仮定)	ロジックツリー	仮説でテーマ決定				
		6	仮説設定(行・列・行の仮定)						
		7/3	情報収集(事前調査)						
		7/5	情報収集(事後調査)						
		7/10~19	情報収集						
	2 日英双軌 (個人)	1	1	仮説設定(行・列・行の仮定)	プロセス	よくある事例		原因	声かけ・支援の仕方
			2	仮説設定(行・列・行の仮定)	ロジックツリー	大きなテーマから細分化できない		知識不足、情報不足	〇〇について調べてみよう
			3	仮説設定(行・列・行の仮定)	問いの内容	調べて終わりにしてしまう		領域の細分化の意味が分からない	具体例を基に「細分化」の意味と一緒に考える
			4	仮説設定(行・列・行の仮定)	問いの内容	解決しやすいテーマを設定してしまう		問いの立て方	考えたいキーワードを問いの形にあてはめてみよう
			5	仮説設定(行・列・行の仮定)	問いの内容	仮説と調査方法を考えてみると探究できない(進め方が分からない)と分かった		課題設定に困ると「うまくいく」形を求めたくなる	自分なりの考察ができるか、一緒に検討する
			6	仮説設定(行・列・行の仮定)	仮説設定	そもそも仮説が立てられない		調べてみて初めて分かることもある	それは「最初に漠然と抱いていた方向性」と合致しているか?/それは自分の関心事の中心か?と尋ねる
3 日英双軌 (個人)	1	1	仮説設定(行・列・行の仮定)	調査	問いが成立しないと分かる	調べてみて初めて分かることもある	もう一度、課題設定に戻ろう/別の問いを立ててみよう		
		2	仮説設定(行・列・行の仮定)	調査	すべて先行論文で言われていて、新しいことが見つからない	研究の領域に踏み込んでいる	先行論文そのものは探さない。自分の立てた問いとその仮説を証明するために必要な資料や調査、実験データを集めよう		
		3	仮説設定(行・列・行の仮定)	分析	仮説と結果が食い違う	実はよくある	仮説と違っていても、探究の結果、分かったことなのでOK		
		4	仮説設定(行・列・行の仮定)	分析	資料の焼き直しになり、自分なりの考察がない/自分の考察が他者の論の引用にとどまっている	調べて終わりの問いだった 先行研究、先行論文そのものを資料として使った	考察に至るまでに、問いの軌道修正をしよう 既に述べられている考察を基に問いを立ててみよう		
		5	仮説設定(行・列・行の仮定)						
		6	仮説設定(行・列・行の仮定)						

課題

- 1 生徒の探究学習をより深めるため、探究学習担当の教師が生徒をうまく支援できるようにしたい
- 2 探究学習担当の教師全員が、指導の見通しを持って取り組み、学校全体の活動としたい

富山県・私立片山学園中学校・高校では、全教育活動の中心に探究学習を置くこととし、その充実を図っている。2019年度からは、3年間の計画表で育成を目指す資質・能力や活動内容などを教師間で共有して指導し始めていたが、生徒の探究の深まりに違いが出ると思われた。そこで、担当の森内梨絵先生は、教師間で支援の足並みをそろえようと、各プロセスで起こりやすい生徒のつまづき事例とその支援方法を整理した「探究学習指導・共有シート」を作成した。ただ、示した以外のつまづきも想定される中、教師全員が見通しを持って指導するために、どういった準備をすればよいか課題だった。

教師の支援の手立てを
どのように共有すればよいか

検討メンバー



ツール提供者

富山県・私立片山学園
中学校・高校
森内梨絵
もりうち・りえ



新潟県立新潟高校
平野深雪
ひらの・みゆき



福岡県・
私立福岡女学院
中学校・高校
柿原寿人
かきはら・ひさと

探究学習指導・共有シート

After

このシートは先生たちが見えるところに貼る

改良ポイント

① 本時の活動の目的と、支援ポイントを明確に示す

指導・共有シートにも身につけさせたい力・スキルを明示。このシートを授業では手元に置き、活動の目的を意識して生徒を支援できるようにする。

② 教師個々の取り組みを記録し、ノウハウの共有につなげる

生徒への支援で工夫したことや今後工夫したいことなど、支援を通して得た気づきや手応えを記入し、教師間でノウハウを共有。学校全体でも蓄積する。



探究学習指導・共有シート

プロセス	身につけさせたい力・スキル	つまずきポイント	原因	声かけ、支援の仕方	支援をした時の生徒の反応	工夫した(したい)こと、気づいたこと
課題発見	目の前の現象に対して5W1Hを適用し、大きなテーマを生み出す力	テーマが細分化できない	知識不足、情報不足	〇〇について調べてみよう		
			領域の細分化の意味が分からない	具体例を基に「細分化」の意味を一緒に考える		
課題設定	既存の研究や事例に対して、課題発見、仮説設定、情報収集、情報分析のいずれかに改善点を指摘する力	調べて終わってしまうテーマとなっている	問いの立て方	考えたいキーワードを問いの形にあてはめてみよう 自分なりの考察ができるか、一緒に検討する		
			解決しやすいテーマを設定してしまう	それは「最初に漠然と抱いていた方向性」と合致しているか?/それは自分の関心事の中心か?と尋ねる		
			仮説と調査方法(向き方)	調べてみて初めて分かることもある	もう一度、課題設定に戻ろう/別の問いを立ててみよう	

探究学習責任者の教師が記入

探究学習の担当教師が記入

実際の支援や生徒の実態を踏まえて、次年度以降の改訂につなげる

事後に教師の気づきを共有し、持続的な改善を支えるツールへ

3年間の計画表で示していた「身につけさせたい力・スキル」を、指導・共有シートにも示すことで、教師が各活動での目的を明確に意識した上で生徒を支援できるようにした。

加えて、活動後に、支援した時の生徒の反応を記入する欄を設けた。教師が一方的に指導するのではなく、声かけや支援がどのような生徒の反応を引き出したのかを書き留めることにより、自身の支援を振り返り、指導改善につなげることができる。

さらに、シートを貼るなどして、その振り返りを教師間で共有すれば、指導ノウハウとして学校全体で蓄積ができ、次年度の計画の見直しや、指導・共有ツールの改訂にもつなげられる。

次ページでは、3人の先生方の検討の様子をダイジェストで紹介!



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

探究学習指導・共有シート

支援事例の蓄積が
学校の大きな財産となる

探究学習では、生徒が自身の関心のあるテーマに取り組むため、教師には専門外の分野についての指導が求められることもある。そのため、教師も生徒とともに探究する姿勢を持つことが大切になる。生徒が直面しやすいまま、ずきを事前に想定し、その対応方法を共有することは教師の安心感につながるが、指導方法を細かく設定し過ぎると、かえって指導がしにくくなり、生徒の学びが深まりづらくなるのではないかとという声が上がった。

生徒同士で学び合いながら探究を深めることが理想だが、生徒の力だけで

は前に進めない場合もある。そうした場面では、対症療法的な指導はせず、育成を目指す資質・能力に立ち返り、どのような支援ならば生徒の思考の道が開け、資質・能力の育成につながるのかを考えることが重要だ。声かけを5W1Hですると、生徒の思考を活性化させやすいといった具体的な提案もあった。そして、指導改善につなげるために、支援時の生徒の反応をよく見て、記録することにした。期待通りに生徒が前に進めたのであれば望ましい支援の1つとして共有し、つまずきが解消されなかった場合は、より効果的な支援を考える手がかりとなる。そうした支援事例の蓄積は、学校の大きな財産になるといっても意見が一致した。

活用の流れ

- 1 年度当初に探究学習の担当教師に配布。探究学習の各プロセスにおける目的や、つまずきポイント・支援方法を共有
- 2 各担当教師が支援時の生徒の反応や自身の支援の振り返りを記入
- 3 記入したシートを教師間で共有し、学校全体での指導改善につなげる

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

教師の経験を共有し、取り組みながら改善する

富山県・私立片山学園中学校・高校 森内梨絵 もりうち・りえ



本校の探究学習を充実させる上で、「どのような指導をすれば生徒が深い課題を設定し、探究を深められるのか」という課題意識があり、指導のノウハウがほしいと感じていました。しかし、今回の検討会を通して、「取り組みながら改善すればよい」という考えが芽生え、前向きな気持ちになりました。

今振り返ると、探究学習の校内推進者として不安だったため、あれこれ準備しなければといった気持ちが強くなり、指導・共有シートを作成したのだと思います。しかし先生方とお話する中で、用意し過ぎると、生徒からも教師からも学ぶ楽しみが失われてしまうことに気づきました。

改善後のシートは、最低限必要な共有事項を押さえるとともに、教師の経験や気づき、アイデアを盛り込める、未来に向かうツールになりました。探究学習は、教師にとっても答えのない取り組みのため、情報共有が大切です。記入後のシートは、先生方が目を通しやすい場所に掲示するなど、支援事例を共有したいと思います。

森内先生プロフィール 教職歴10年。同校に赴任して11年目。教頭。進路指導部長。進路探究部。「生徒の未来と可能性を、生徒とともに探す」学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約1000人/2019年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、東北大、お茶の水女子大、東京医科歯科大、東京大、横浜国立大、富山大、金沢大、京都大、大阪大などに42人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ234人が合格。

次世代の教師を育てるコミュニケーションツールに

新潟県立新津高校 平野深雪 ひらの・みゆき



探究学習は、実際に指導して初めて初めて気づいたり、困ったりすることが多い教育活動だと感じます。その点が、従来の教科指導との違いの1つでしょう。そのため、本校の探究学習でも、生徒の実態をベースに指導や支援の方法を検討することを心がけてきました。

今回の指導・共有シートは、各プロセスに沿って直面しやすい課題や支援のアイデアが盛り込まれており、探究学習の指導経験があまりない教師にも、活動や指導の全体の流れをイメージしやすく、最初のハードルが下がるとしています。さらに、支援時の生徒の反応を通して、気づいたり悩んだりしたことを整理できるため、自身の指導力向上にもつながります。

このシートを使えば、教師間の情報共有も一層容易になるでしょう。若手とベテランの教師が探究学習について語り合えるようなコミュニケーション・ツールとしての役割も持たせ、次世代の教師の育成にも役立てたいと思います。

平野先生プロフィール 教職歴36年。同校に赴任して3年目。進路指導部。「総合的な学習・探究の時間」担当。「生徒にとって高校生活は通過点である」

学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約280人/2019年度入試合格実績(現役のみ) / 国立大は、北海道大、東北大、千葉大、電気通信大、新潟大、首都大学東京などに58人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、法政大、明治大、同志社大、立命館大などに延べ383人が合格。

教師の手応えや課題を集約して、活動を改善

福岡県・私立福岡女学院中学校・高校 柿原寿人 かきはら・ひさと



本校では、2018年度に中高6年間の探究学習をデザインし、「とにかくやってみよう」の精神で始め、本年度も手探り状態でよりよい活動を模索しています。そうした改善を続ける上で、今回のシートは、指導のPDCAサイクルのうち、特に「チェック」と「アクション」に役立つと思いました。指導改善には、教師の手応えや問題意識を集めて共有する仕組みが重要であると実感してはいましたが、そうした点でも活用できそうです。

シートを最初に作成する際は、探究学習の担当責任者が少し大変かもしれませんが、日々の運用では多忙感が増すことはないでしょう。探究学習の授業では、活動の主体は生徒であり、教師は生徒を見守る時間が多くなります。その時間にこのシートを持って机間を巡り、生徒の反応を記入するとよいと思います。そして、授業後に記入したシートを決められた場所に貼れば、各学級の支援の様子や学びの深まりを共有できます。探究学習の指導に不安を感じる教師も、このツールがあれば安心感を持てるでしょう。

柿原先生プロフィール 教職歴21年。同校に赴任して3年目。中学1学年担任。凍として花「輪プロジェクトリーダー」。「昨日の自分より、今日の自分が好き」と言える「学習する教師」でありたい。

学校プロフィール 全日制/普通科・音楽科/女子校/1学年・中学校約120人、高校生約220人/2019年度入試合格実績(現浪計) / 国立大は、筑波大、大阪大、九州大などに18人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、福岡女学院大などに延べ196人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認ください

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。

自分の好きな遊びに没頭する中で 「学びに向かう力」を育む

幼稚園の自由遊び

私が訪問しました



福岡県立ありあけ新世高校
前川修一

まえかわ・しゅういち

◎教職歴 25 年。同校に赴任して1年目。定時制 4 年生担任。進路指導部。担当科目である日本史の授業でアクティブ・ラーニングをいち早く導入。学校を超えて教師が集まり、授業改善について考える研修会を継続的に開催し、全国の高校教師のネットワークづくりにも貢献する。

福岡県立ありあけ新世高校

全日制・総合学科/定時制・普通科/共学/全校生徒 494 人/2019 年度進路実績：進学 123 人、就職 41 人。校訓「自律・自彊・飛躍」の下、「新世生よ、人生のプロデューサーたれ」を校是とし、充実した高校生活を送ることによって、社会で自立できる力を育む。

私が案内しました



福岡県・私立
きらきら星幼稚園
黒田秀樹

くろだ・ひでき

◎きらきら星幼稚園理事長・園長。全日本私立幼稚園幼児教育研究機構理事。「幼児教育では、縄跳びが 100 回飛べる子と 1 回しか飛べない子に優劣の差はありません。大切なのは回数ではなく、挑戦したいという気持ちが芽生えているかどうか、その子なりの課題がクリアできたかどうかです」

福岡県・私立きらきら星幼稚園

40 年以上かけて園長自ら 1 本 1 本植えた樹木など、自然豊かな園環境で子どもの自由な遊びを促す。また、遊びの中で学びに向かう力や非認知能力、社会情動的スキルを育むため、保育者の資質と専門性の向上を図る園内研修にも力を入れている。園児数約 300 人。

砂で作った「プリン」を並べてお店屋さんごっこを楽しむ子どもたち。大きさや形、飾りつけ、並べ方にも一人ひとりの気づきや課題が見られ、保育者はそれを学びの芽として拾い上げる。

まん丸でつるつる、落としても割れない泥団子作りに何日間もかけて取り組む。保育者は、自作の泥団子をモデルとして見せるが、作り方は説明しない。子どもたちは先生の泥団子を見て、自分なりの目標を設定し、ほかの子の作り方も参考にしながら試行錯誤を続ける。

前川 泥団子作りやお店屋さんごっこ、昆虫探しなど、子どもたちはそれぞれ自分のやりたい遊びに没頭していましたね。そんな中で、泥遊びをしている子の近くで遊んでいた子が、「これ、使ったら？」といった表情でそっとスコップを置いていくなど、子ども同士が協働する瞬間がたくさんあることに驚きました。自分の好きなことをしながら、「どうすればいいのかな？」と目標や課題を見つけ、「こうしてみよう！」と学びや気づきを得ている。しかも、そこに子ども同士のつながりがある。保育者の存在を感じさせない子ども主体の遊びの中で、不規則だけれど様々な力を子どもたちが発揮していることに感動しました。

黒田 幼稚園では、遊びを含めた生活の中で、保育者やほかの子どもなど、自分の周りの環境すべてとかわりながら学びに向かう力を育みます。中でも、自分の好きな遊びを自由に楽しむ自由遊びは、主体性や思考力を育む上で最も大切な時間です。ただ、幼児期の発達状況は月齢によっても大きく異なりますし、一人ひとりの興味・関心や遊びの中で生まれる課題も様々です。子どもたちの状況を見ながら、園庭に土の山を作っ

園の環境は人為的につくられたものなのに、そこでの時間も遊びも自然であることに感動しました



目の前のその子の遊びを見守るのか、それとも介入するのか、援助のあり方を保育者はその子と一緒に模索していくのです



たり、スコップなどの道具をそろえたりして、「こうしてみたらどうなるかな？」などと、遊びの中で学びを促す環境を意図的につくる必要があります。そして、目の前の子どもにどのようなようにかわるとよいか、その子のことを理解しながら、保育者としての援助のあり方を模索します。決まった正解がないからこそ、私たちは、計画以上に保育者同士の対話を通して振り返りを大切にしています。

前川 園児は、自分の奥底にある欲求にしがたって遊ぶうちに、それが自然に学びにつながっていく……これは、だれもが生得的に持っている学びの意欲と云えるでしょう。その意欲を掘り起こしさえすれば、高校生も園児のように何かに没頭する時間を取り戻せると思います。

黒田 子どもは生まれながらにして有能な学び手です。同じ内容を一斉に学ぶことにも価値はありますが、その子が学びたいことを学べる時間が小学校以降もっと増えてほしいと思います。

前川 教科書で学んだことを活用しながら、各々が学びたいことを探究する授業は、簡単ではありませんが、だからこそ実現を目指していきたいです。生徒の主体性に任せる時間をつくり、一人ひとりの気づきを待ちたいと思います。

今日の学びを
自校の指導につなぐ

● ● ●

没頭する「童心」を
生徒が取り戻していく
授業を実現したい



土の山から水を流すと水路ができる。それを見て、水を貯める場所を作る子どももいれば、新たな水路を作る子どももいる。子どもたちはそれぞれに課題を設定し、遊ぶ中で、次々と新しい課題が生まれ、遊びが展開されていく。



領域横断的な課題解決能力を身につけ、 持続可能な社会の実現を目指す

大阪府立大学 現代システム科学域 環境システム学類



フィールドワーク中心の 演習が2年次からスタートします

「環境システム学演習」では、様々なフィールドワークを経験できます。「環境システム学演習Ⅱ」で多様な分野を体験し、それを参考にゼミを選ぶことができます。(安達さん)

景観調査を基に、 新しい広場を提案しました

街づくりの手法を学ぼうと「環境システム学演習Ⅲ」を履修。大学の学生会館前の広場の景観を調査し、新しい広場の案を発表しました。仲間の発表も聞くことができ、同じ場所でも様々な提案が可能であることが分かり、視野が広がりました。(安達さん)



カキの生育と環境との関係について 現地調査しています

大阪・阪南市で、カキの生育とカキ養殖場の環境について調査。場所と深さを変えて採水などを行い、水質や、カキの生育を妨げる貝毒（*1）の原因となるプランクトンの有無を調べています。(橋本さん)

大阪府立大学は、2012年に領域横断的な学びを展開するため、学域・学類制を導入した（*2）。ほとんどの学類で1年次は幅広く学び、2年次以降に専門領域を選択する「経過選択制」を特徴にしている。現代システム科学域環境システム学類では、持続可能な社会の実現を追究し、現代の様々な環境問題に対応するため、自然・社会・人間の3領域を学び、多面的な手法で課題解決力を育んでいる。

1年次後期は、環境システム学類の3つの課程（環境共生科学、社会共生科学、人間環境科学）の概念を、

1年次は文理を分けず広く学び 2年次以降に専門領域を選択



現代システム科学域
環境システム学類
環境共生科学課程4年
安達ひかる

あだち・ひかる
兵庫県・私立甲子園学院
高校卒業。街づくりに興味
があり同学類に入学。



現代システム科学域
環境システム学類
環境共生科学課程4年
橋本弦太

はしもと・げんた
大阪府・私立清教学園中・
高校卒業。海洋生物の研究
を志し、同学類に入学。

*1 有毒プランクトンを食べた貝が蓄える毒素。その毒を持った貝を食べると中毒症状を起こすため、市場に流通させないようにしなくてはならない。

*2 文理の枠にとらわれずに学べるよう、学部・学科の間にあった壁を取り除いて、従来の7学部を4学域に再編した。学域は、現代システム科学域・工学域・生命環境科学域・地域保健学域がある。現代システム科学域は、知識情報システム学類・環境システム学類・マネジメント学類から成る。

毎回異なる教員が担当するオムニバス形式の授業で学び、領域横断的な視点を身につける。街づくりに興味があつて入学した4年生の安達ひかるさんは、同授業を履修し、学びたい分野が見えてきたという。

「集落に接した緑豊かな森の残る里山の景観を守るためには、様々な学問を学ぶ必要性を知りました。例えば、下草を刈らなければ山が荒れ、イノシシなどの害獣による農作物の被害が多くなります。そうした里山の生態系を理解するには、農作物の知識に加え、動物の知識も必要です。また、街中の美しい景観設計のためには、デザインや環境心理も学ぶ必要があると思いました」

2年次からフィールドワーク 中心の演習科目が開始

2～3年次には、「環境システム学演習Ⅰ～Ⅳ」を履修する。研究室での学びに必要な知識・技能を、実践的に身につけられる同学類の特徴的な科目だ。2年次前期の演習Ⅰを履修後に専門課程を選択、3年次前期の演習Ⅲの終了時には研究室を決定する。そして、3年次後期の演習Ⅳを終える頃には卒業研究のテーマ

が決められるよう、カリキュラムが設計されている。

「2年次の演習科目を通して、1年次に興味を持った景観の設計について深く学びたいと思い、環境共生科学課程に進みました」（安達さん）

演習は、グループでのフィールドワークが中心で、課題解決能力を身につけさせることをねらいとしている。4年生の橋本弦太さんは、演習Ⅲで大阪・千里ニュータウンでの街の利用状況に関する調査を行った。

「駅前近くでも整備されていない公園があり、教科書を読んで予想したことと異なる点も多く、実際に行かなければ分からないことが多いと実感しました」（橋本さん）

「私が履修した演習Ⅲでは、大学内の広場を調査し、新たな広場を提案することが課題でした。調査結果を基に広場のコンセプトを決め、具体的に景観を設計しました。景観の美しさに加え、データを基に広場の使いやすさや実現可能性を考慮する重要性を学びました」（安達さん）

どの演習も複数のテーマがあり、学生が希望のものを履修できるが、演習Ⅲは社会科学と自然科学両方のテーマに取り組み。

「自然科学系の海洋生物の研究ができるこの学類に入学しましたが、社会科学系の演習にも参加し、専門科目の社会学も履修しました。そこで、社会貢献するには、地域社会への理解や地域の方のニーズを把握することも大切だと学び、視野が広がりました」（橋本さん）

3領域を広く学んだからこそ 深い卒業研究が可能に

4年次から、橋本さんは、海洋環境学研究室に所属し、貝毒の原因となる植物プランクトンの増加を、海藻のアマモで抑制できないか研究している。

「研究に没頭すると、社会における自分の研究の意義を見失いがちなので、常に社会貢献の点を意識するようにしています。それは演習で鍛えられた視点です。卒業後は、大学院に進学し、研究を続ける予定です」

安達さんは、大阪・中之島にシンボルツリーが植樹された経緯や周辺に与える効果について研究予定だ。

「将来は、大学での学びを生かして、街づくりや良好な景観づくりに総合的にかかわれる公務員を目指しています」（安達さん）

大学の思い

広い視点を持ち、専門的な課題解決ができる人材に



現代システム科学域
環境システム学類
准教授
黒田桂菜
くろだ かほ

本学類の大きな特徴は、自然・社会・人間にかかわる領域を横断的に学べることです。気候変動やエネルギー問題などの環境問題は、1つの領域の知見だけでは、解決できません。自然・社会・人間にかかわる様々な学問を融合させ、多面的なアプローチで課題解決へと導く力を身につけさせたいと考えています。

そのため、2年次から課題解決型の演習をスタートし、徹底的に課題解決能力を鍛えていきます。その中で大切に行っているのは、学外で、学生自身に課題解決の手法を模索してもらうことです。誰に協力してもらおうべきか、どのような話を聞いたらよいか、実際に動く中で、課題解決には何が必要なのかを考え、足りない知識・技能を大学で身につけてほしいと考えています。

入学時には、目標が明確に決まっていなかった学生が、4年間で自らの道を開拓していく姿を見ると、とてもたくましく思います。環境に興味のある学生はもちろん、ゆっくり進路を考えていきたいという学生にぜひ来ていただきたいです。

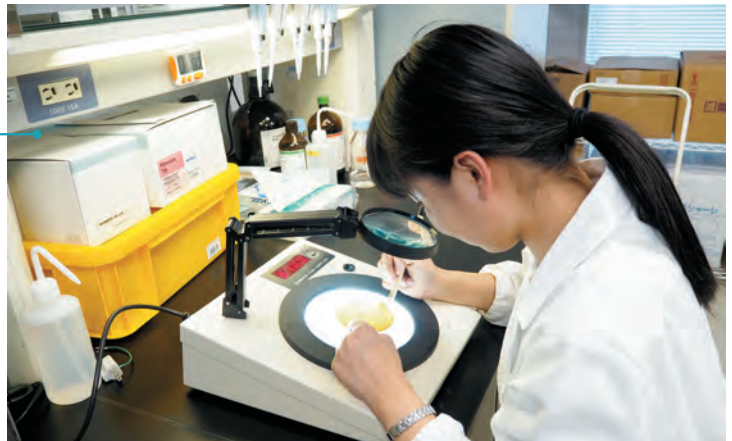
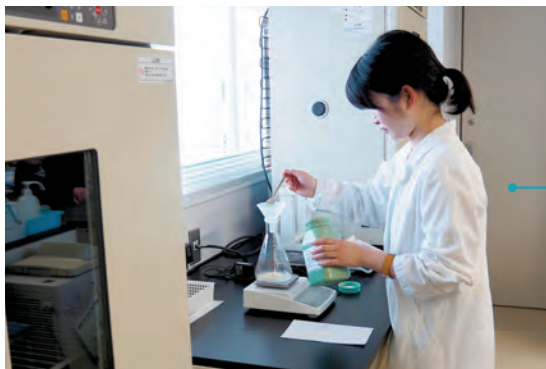


低学年次から多くの実験を経験させ、 食の安全に携わる人材を育成

東洋大学 食環境科学部 食環境科学科 フードサイエンス専攻

様々な実験を通して 研究したい分野が見えてきました

漠然と食に関する仕事に興味があり、フードサイエンスを専攻しました。「フードサイエンス実験」で、ヨーグルトや肉に潜む様々な細菌の分析手法を学び、食品の安全性に関する食品分析などの検査や品質管理に興味を持つようになりました。(坂田さん)



国内でも研究例の少ない 食中毒を引き起こす菌について、研究中です

卒業研究では、まだ実態が十分に解明されていないリステリア菌をテーマにしました。実験には専用の培地(*1)が必要なため、手早く作れるよう、手順を頭にたたきこんでいます。(大田さん)

研究に関連した論文の要約の発表を通じて、 プレゼンテーション能力も鍛えられます

研究室では、自分の研究テーマの中間報告と関連する論文の要約を発表します。深い知識が身につきますし、質疑応答では、先生や仲間からの質問を通じて、新たな気づきが得られます。(大田さん)



東洋大学食環境科学部(*2)は、食と健康にかかわる分野において活躍できる人材を育成するため、2013年に改組により設立された。その中の食環境科学科フードサイエンス専攻では、安全な食品を提供するための食品成分分析や品質管理の技術、食品の生産や加工及び流通などに関する高度な知識を身につけられるよう、カリキュラムが組まれている。同学部では、食品衛生監視員の資格も取得できる。

1年次は、基礎的な実験技術とフードサイエンス分野の基礎知識を学ぶ。「化学実験」「物理実験」は、

食の安全・安心や食品生産等に関する高度な知識・技能を習得



食環境科学部食環境科学科
フードサイエンス専攻4年

大田紫生

おおた・しお
東京都・私立共立女子中学校
高校卒業。食品衛生監視員
を目指し、同専攻に入学。



食環境科学部食環境科学科
フードサイエンス専攻4年

坂田芽衣

さかた・めい
栃木県立佐野高校・中学校
卒業。食品企業への就職
を目指し、同専攻に入学。

*1 微生物や生物組織の培養で、人工的に生育環境を提供するもの。

*2 「食環境科学」とは、「食と環境」についての正しい知識と分析力を身につける学問。食環境科学部は、食環境科学科（フードサイエンス専攻、スポーツ・食品機能専攻）と健康栄養学科の2学科から成る。

2年次以降の専門的な実験に備え、基本的な技能を身につける科目だ。

同専攻4年生の大田紫生^{しお}さんは、1・2年次を次のように振り返る。

「1年次に溶液を量り取るピペットなどの実験器具の取り扱いの技術を身につけておいたので、食品や薬剤を早く正確に計量でき、2年次の実験がよりスムーズに進みました」

また、1年次に大学近隣の食品工場を見学。食品の製造工程や品質管理・安全性の確保について学ぶ。

多様な食品の分析技術を身につける

2年次後期からは、専門的な技能を身につける実験科目「フードサイエンス実験Ⅰ」を履修する。タンパク質、炭水化物、脂質などの食品成分の分析手法を学ぶ。4年生の坂田芽衣^いさんは、こう語る。

「食品内にどんな細菌が潜んでいるのかを分析するため、ある溶液で細菌を染め分ける手法を学びました。染められた色によって細菌を大別し、顕微鏡で形状を観察すると、どんな菌かを推察でき、とても興味深かったです」

「微生物の増加を調べる検査が印

象的でした。ひき肉は固体のため、希釈液で薄めてから培地に混ぜ、細菌の有無を分析します。食品ごとに分析方法が異なるので、なぜその手法を採用するのか考えながら進めると、実験手順が理解しやすくなりました」（大田さん）

学生は、専門科目の実験や講義を履修し、学びたい分野を絞っていく。坂田さんが興味を持ったのは、佐藤順教授の「食品安全学」だという。

「衛生レベルによって工場内を区分して、細菌や異物の混入を防ぐ『ゾーニング』という方法を学びました。身近な食品が、そうした配慮の積み重ねで安全に製造されていることを知り、ほかにも企業の工夫を学びたいと思いました」（坂田さん）

インターンシップや企業との共同研究も経験

3年次の夏季休暇には、希望制のインターンシップを実施している。坂田さんは、2週間、食品メーカーの品質管理部門で、レトルトパウチ食品の細菌検査を担当した。

「驚いたのは、使用後の手袋に1つずつ水を入れ、異物対策として、破れていないか手作業で調べていた

ことです。授業でも品質管理について学びましたが、予想を超える徹底ぶりでした。食品の品質管理を研究したいと思いました」（坂田さん）

3年次後期から研究室に仮配属され、4年次に本配属が決まる。ミスマッチがないようにという配慮からだ。大田さんと坂田さんは、ともに品質管理を専門とする佐藤教授の研究室に入り、包装容器メーカーとの共同研究にも研究室の仲間と4人で取り組んだ。昨年度のテーマは、「ローストビーフに適したガス置換包装について」だ。その包装は、空気を除去して、代わりに不活性ガスを詰めるため、食品の保存性を高められる。「スライスされたローストビーフがおいしく見えるよう、色も保持できないか研究中です。適したガスの組成を見極めるため、根気よく実験を繰り返しています。小売店舗では、肉の色が悪くなり、消費期限前に廃棄されてしまう場合も多いため、実用化して食品ロスの削減につなげたいです」（大田さん）

大田さんは9月に学会で共同研究について発表する予定です。

「将来は、品質管理の研究を生かせる仕事に就きたいです」（大田さん）

大学の思い

食品業界の課題に主体的に取り組める人材に



食環境科学部
食環境科学科教授
佐藤 順
さとう・じゅん

本学では、建学の精神の1つとして「独立自活」を掲げており、自分なりの哲学や考え方をもち、主体的に行動する人材を育成しています。私は長年食品業界で働いてきましたが、そこで求められるのは、まさに「独立自活」のできる人材です。

そのために、本学科では1年次から実験科目を充実させています。授業中も実学を意識し、現場の衛生管理の手法、食品や衛生管理に関する法制度といった話題にも触れており、自ら課題を見つけて力を身につけてほしいと考えています。例えば、食品ロス問題も、食品メーカー、店舗、家庭など、立場を変えて考えることで、様々な解決策が見いだせるでしょう。卒業研究では、社会に貢献できる研究に取り組んでくれることを期待しています。

学生は、文系出身者も多いため、1年次に実験の基礎を復習させるなど、段階的に知識・技能を身につけるカリキュラム編成です。また、ラーニングサポートセンターを設置し、学習に不安がある学生を対象に、リメディアルプログラムも実施しています。

これからの会議・研修のあり方、作り方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる一助となるよう、今号も、対話の場づくりに取り組む実践者に話を聞く。

対話の積み重ねが 一人ひとりの中に変化の芽を生む

三四郎の学校 事務局長
日賀優一

ひが・ゆういち 「答えが1つではない問い」を考える中高生向け対話型ワークショップを主催する「三四郎の学校」事務局長。本誌 2016 年6月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりにも携わる。本コーナーの監修者（2017年10月号、12月号、2018年2月号、8月号、10月号、12月号、2019年2月号を担当）。また、2019年3月にVIEW21編集部が主催したワークショップ「生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント」の監修者の1人。



全国各地から高校教師が参加した「生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント」ワークショップ。対話を通してカリマネに対する理解を深めつつ、今後も同じ課題に取り組む仲間としての関係性をつくってもらえるように、プログラムを練り上げていきました。

目指したのは、
対話を楽しみながら
校外の仲間と出会う場

今号の特集で取り上げた、2019年3月に実施されたVIEW21編集部主催のワークショップ「生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント」（詳細は、とじ込みにて紹介）のプログラムは、監修者の1人である関西大学教育推進部・森朋子^{ともこ}教授に助言をいただきながら、VIEW21編集

部が練り上げていきました。目指したのは、ワークショップを「アウトプットを楽しみながら、カリマネに対する理解が深められる」「カリマネを推進する仲間を校外につくることが出来る」場とすることでした。

そこで、十分な対話の時間を設け、参加者が自分の抱える問題を整理したり、その解決の糸口をつかんだりすることができるよう、カリマネに関する知識のインプットは、「事前課題」を通してワークショップ前に済ませておいてもらうようにしました。具体的には、参加者は、カリマネの概要を説明する森教授の講義動画の視聴をした上で、「自校の現状分析（自校内と自校を取り巻く環境における、強みと弱みを洗い出す）」と、それに基づいた「育てたい生徒像」及びそのような生徒が備える「資質・能力」の言語化に取り組みました。

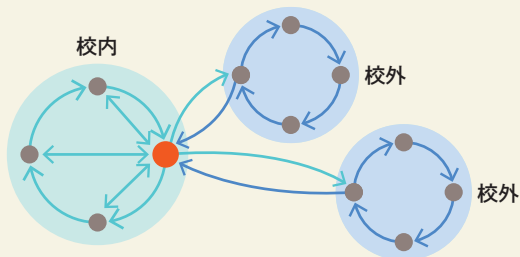
事前課題に取り組んだ先生方の多くが、「育てたい生徒像や育成を目指す資質・能力を、自校ならではの言葉で表すことは思った以上に難しい」と感じたようです。それによって、「もつと自分の学校に合ったもののできないか」「ほかの先生方はどんな考えを持っているのだろうか」と、対話への

意欲が高まることを目指しました。実

際、ワークショップ当日は、各グループで先生方が活発に意見交換する様子が見られました。

多忙な先生方が自校で「育てたい生徒像」について語り合う場合、会議に十分な時間が割けないことから、広がりや深まりのある語り合いになりにくいことがあります。限られた時間の中で、先生方が「自分の考えを語りたい」「ほかの先生の意見を聞きたい」「自分の考えを深め、更新したい」と意欲を持って対話に臨めるようにする上で、自身の考えを言語化する事前課題の設定は、校内の会議においても有効

図 今回のワークショップが目指した「越境する学び」



校内の教師間のコミュニケーションと並行して、異なる学校の教師と知見を共有することで、これからの学校をより大きな視野で考えることができる。

でしょう。

ワークショップで得られた学びや気づき、そして、学校を超えたつながりが、その場限りのものにならないように、ソーシャルネットワークサーブिस（以下、SNS）を活用し、Web上で交流が継続できるようにしたのも、今回のプログラムの特徴の一つです。森教授は、カリマネを推進する上で「越境する学び」の重要性を指摘していますが、校内の教師間での活発な意見交換と並行して、校外の様々な高校の教師とも学び合うことで、自校に新しい視点を持ち込むことができます。多様な高校から参加者が集まった今回のワークショップでは、コミュニケーションツールとしてSNSを活用することで、参加者が校内と校外を行き来する学びを継続できるようになりました。

ワークショップの講師からも、「カリマネの推進においては、ミドルリーダーが積極的に他校の教師や研究者とつながり、校外での学びを自校に持ち帰ることが重要」といった指摘がありました。ノウハウはもちろん、成功体験や失敗体験も他校と共有していくことが、今後一層各校に求められていくことでしょう。

対話することで、 その人ならではの 言葉が生まれる

今回のワークショップで対話を重視した理由は、対話を重ねる中で、その人自身の本当の思いが、飾りのない言葉で語られる瞬間があるからです。それは、当人にとっても自分を変えるきっかけになることがあります。

数年前、私立のA高校で有志の先生方と学校の問題を整理しながら、一人ひとりが学校のためにすべきことを考える場をつくりました。3時間ほどのその場では、生徒の様子に始まり、そうした生徒たちをどのように伸ばしていきたいのか、そのためにはどんな指導が求められるのか、なぜ今、その指導に着手できないのかと、一段ずつ階段を上っていくように対話を続けていきました。そして、多くの先生方が最後にたどり着いた解決すべき問題が、「教師の多忙さ」でした。「多忙さ」という言葉そのものには目新しさはありません。しかし、先生方一人ひとりが学校や生徒の様子

を自分の言葉で語り、また、同僚の言葉に耳を傾ける中でたどり着いた「多忙さ」は、とてもリアルな問題でした。そして、「多忙さを解消するために自分にできることは何か」を話し合う中で、最年少のB先生は次のように語ったのです。

「先輩の先生方にもっと教えを請うことが今の状況を変える第一歩だと思うが、私にとって先輩の先生方とはつきにくい存在で、これまでは自分から避けてきた。明日、先輩の先生方に職員室で『教えてください』と言えるかと問われたら、正直その自信はない。だからせめて、先輩の先生方に向き合う一歩として、先輩の先生方に『よかったら召し上がりませんか?』と、チョコレートを渡して話しかけてみようと思う」

すると、ベテランの先生はこう語りました。

「確かに仕事の量に比べて時間が足りないが、仮に時間が倍あってもやはり、自分は忙しくしている気がする。問題は時間ではなく、若い人に任せない自分にあると思う」

他者とともに内省を深めながら自分を変える、そんな対話の場がこれからの学校には必要なのです。

これからの学校を 語り合うことで、 変化の土壌が育まれる

ワークショップの講師の先生方から異口同音に「カリマネの営みは一朝一夕に進むものではない」と語られた通り、カリマネ推進役の先生方には、中長期の視点でカリマネに取り組むことが求められます。

現場の先生方が対話を通じて学校のあり方を考えていく過程では、変化はすぐには見えてきません。だからこそ、成果はゆつくりとではあるけれども必ず見えてくると、「対話の力」を

信じていることが必要です。

数年前に校内研修をお手伝いした公立のC高校では、3時間の研修の中で、生徒のよいところやもっと伸ばしてあげたいところについて、先生方が教科や分掌の違いを超えてじっくりと語り合う時間をくれました。その上で、これからの時代を生きる生徒に育みたい資質・能力は何か、その育成のために一人ひとりの教師ができることは何かを考えていきました。

育みたい資質・能力やそのための指導について、教師一人ひとりがそれぞれの考えを語りましたが、それらの意見の集約はすることなく終了しました。普段なかなか話す機会がない先生方がじっくりと対話をし、お互いの思考を拡散することそれ自体が十分な

成果であると考えたからです。

そして、C高校の先生方は、対話の中で得られた自分の気づきや同僚の言葉を次の行動に生かしていきます。校内研修から数か月後、新入生を迎える新1学年団の教師が、校内研修で語り合った内容を振り返り、新学年団が生徒への育成を目指す資質・能力として、「対話する力」を掲げたのです。1学年団では、「学校生活の様々な場面で生徒に対話を促す」ことを共通認識として、学校行事などでも「例年はこうだが、きみたちはどうしたいか」と生徒に丁寧問いかけていったそうです。また、学年団として生徒への育成を目指す資質・能力を保護者にも理解してもらおうと、学年全体の保護者会で保護者同士のペアトークの時間をつくり、「保護者のみなさんに今体験していただいたような活動を、校内にたくさんつくっていきます」と、これからの社会を生きる上で必要な資質・能力への理解を求めたそうです。

教育目標を明確にすることで、教育活動が前年踏襲にならず、精選されメリハリがつくことを、1学年団の動きから全教師が実感しました。その結果、次年度は「学校として育成を目指す資質・能力」を整理し、ルーブリック

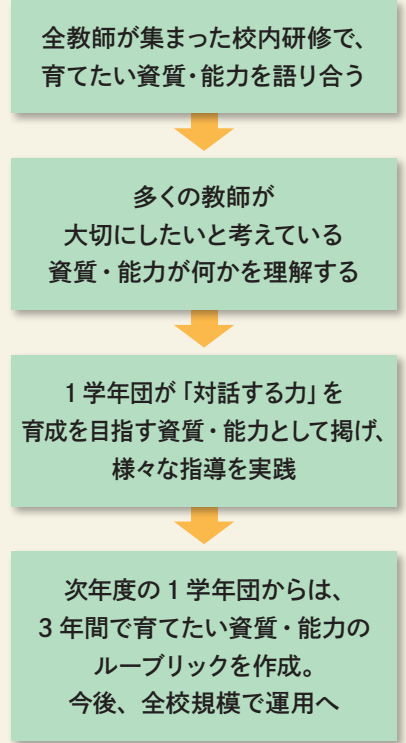


C高校では、校内研修の様子を、これからの教育のあり方を模索する教師の姿として、生徒にも紹介しました。

クを作成することに至ったのです。校内研修から2年余りの時を経て、先生方の対話の実を結び、学校を変えたのです。1学年団の先生方が「対話する力」の育成という教育目標を大切にしながら、同僚との対話の中で、納得する形で自分たちが手に入れた目標だったからでしょう。

カリマネは対話を通じて進められますが、対話を重ねても変化はすぐには生まれなくてもいいかもしれません。しかし、変化の土壌は確実に育まれている。そう信じていることが、会議・研修を企画・運営する先生方には求められているのではないのでしょうか。

校内研修がC高校にもたらした改革



全学年の教師が語り合った内容を基に、1学年団が育成を目指す資質・能力を明確化。それが学校改革への大きな一歩となりました。

2019年4月号へのご意見

評価観の変容を感じた

4月号の特集の座談会で、大分県立杵築高校の芦刈信司先生が言われていた「思考力などは(中略)他者との比較ではなく、過去の自分との比較で力が高まったと実感させることが最も大切」という言葉に、評価観の変容を感じた。私も、生徒がそうした実感を持てる指導を目指していきたい。また、定期考査は、指導と評価の一体化を考える上でも重要な学校文化の1つだが、今回の特集では、改革事例が部分的に紹介されたに過ぎない。思考力・判断力・表現力を評価する定期考査について、より分析を加えた記事を期待したい。

愛知県立日進西高校 野々山新

定期考査の作問で育成を目指す資質・能力を体感

4月号の特集のテーマ「高校1年生の指導」の重要性は従来と変わらないが、次期学習指導要領や大学入学共通テストを前に、より重要になるのは授業だろう。その意味で、兵庫県立相生高校の配点10%程度の記述式問題や、大分県立杵築高校の社会とのつながりを意識する出題など、定期考査の実践が参考になった。育成を目指す資質・能力を、教師自身が作問を通して体感することは、とても大切だ。岩手県立大船渡東高校 川村俊彦

「〇〇力」の定義の統一が重要

連載『学校教育デザイン』を描く道標しるべで取り上げられた新潟県立巻高校の記事を読んで感じたのは、各校

で使う「〇〇力」の意味は統一されているのかという点だ。教科が増えれば増えるほど、教師が考える「〇〇力」の定義は拡大するだろう。それをどのように教師間で共有化を図るかが、学校全体のカリキュラム・マネジメントにおいて重要だと思う。私も他教科の先生方と話し合い、「〇〇力」を正確に捉えるようにしたいと感じた。

静岡県立御殿場高校 松山 陸

ルーブリックを使った生徒による評価の重要性を再認識

4月号「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のルーブリックを用いた評価の方法を読み、教師による評価に加え、生徒の自己評価や他者評価が重要だと再認識した。生徒による能力開発のためには自己評価が不可欠であり、他者評価は自己評価を客観的に見るための大切な視点であると感じた。評価のあり方を考えるにあたって、記事が大変参考になった。

静岡県・私立沼津中央高校 後藤松太郎

小・中学校の指導も、高校の指導の参考になる

以前、教育委員会で指導主事をしていた時に感じていたことだが、小学校や中学校の指導は、高校の指導においてもとても参考になる。新連載の「高校教師 study-tour」は、高校教師という第三者の目を通した記事だが、個人的な感想も、識見に裏打ちされたものならば、より普遍性を持たせられると思った。

群馬県立伊勢崎興陽高校 川島一秀

OFF SHOT

今号の「実践 アクティブ・ラーニング」は、5人の先生方が「コンビニを科学する」を共通のテーマに、各教科の視点で行われた授業を取材したスペシャルバージョンでした。教室には、他校の先生方や新聞記者が大勢いらっしゃいましたが、中でも目を引いたのが、石川県立金沢泉丘高校の新聞部の生徒でした。第42回全国総合文化祭で最優秀賞を受賞するなど、実力のある部活動で、今回の授業の取材では、企画した先生や、実際に授業を受けた生徒にインタビューをし、その記事を「速報版」として自校に配布したとのこと。発刊は2か月に1回と、『VIEW21』高校版と同じ頻度ですが、速報版は何と年に20回前後発行しているそうです。「これは負けれない!」と思いながら、取材と編集を行いました。ぜひご覧ください。(荻原)

『VIEW21』高校版 公式アカウント

LINE@

友だち募集中!

『VIEW21』高校版や教育に関連する最新情報をタイムリーにお届けします。*お友だちの登録方法は、右の2次元バーコードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。



VIEW21 高校版 2019 8 月号

次号は 8月20日発行 (予定)

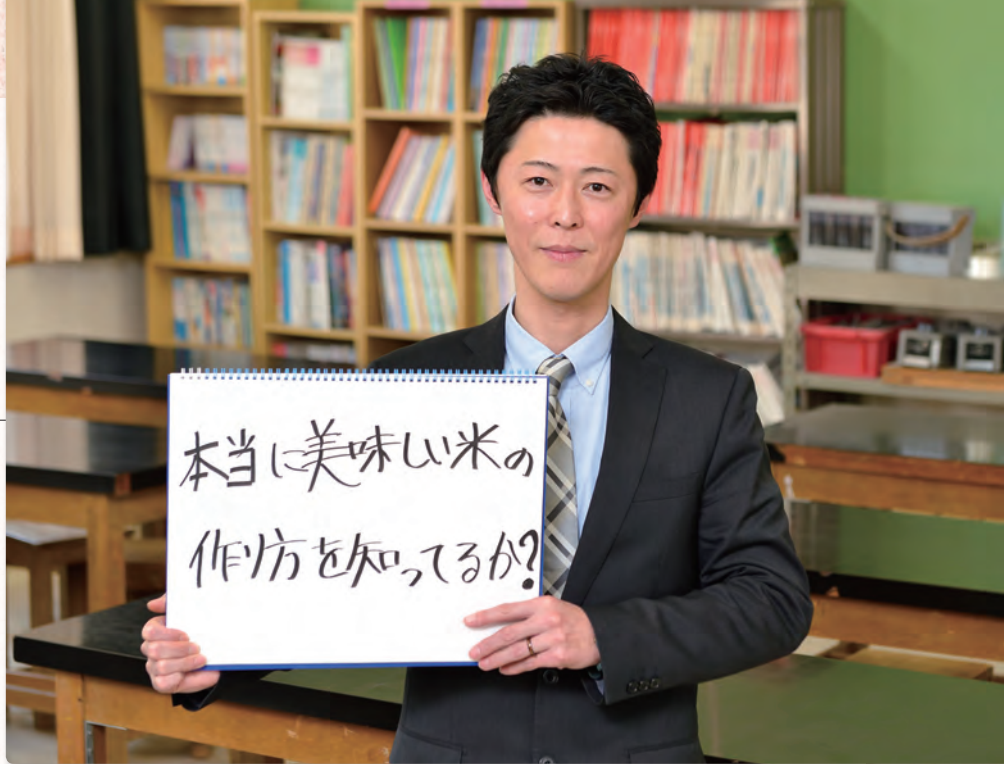
『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 014

新潟県立長岡高校
山崎健太先生
やまざき・けんた

◎教職歴15年。同校に赴任して4年目。理科担当。「学校の中で、そして学校の枠を超えて教師同士の学びをつなぐことが、これから10年間の自分の使命」という考えのもと、県内の高校に呼びかけ、進路指導の勉強会を19年度に立ち上げる。



前 任校で2年生の担任を務めた年の3月、校長から「4月からは、担任を外れて進路指導主事に」と告げられました。当時、30代半ばの私は、校内で最も生徒に厳しい教師で、課題のある生徒を率先して受け持っていました。2年生まで担任を務めたそのクラスは学級経営で思いの外苦勞し、高3進級を目前にしてもまだクラスは落ち着きのない状況でした。だから、「1日も早く、クラスみんなで受験に臨む雰囲気をつくろう」と新年度の構想を練っていた矢先の、思いもかけない告知でした。

校長室を出て、間近に迫った卒業式の予行演習のため体育館に移動すると、整然と並べられた卒業生の担任席が目飛び込んできました。来年、自分はこの席に座り、生徒の呼名をすることができないのだと思うと、胸が苦しくなりました。クラスをまとめられないまま担任を終える悔しさを抱えながら、「そんな自分が進路指導主事をしてよいのだろうか」と悩みました。

数 日後、年度末の懇親会で、私は同じ学年団で体育科のS先生とじっくりと話をする機会に恵まれました。文学を愛し、ユーモアにあふれ、生徒からも教師からも尊敬を集めるS先生に、私は自分の思いを打ち明けました。話を聞き終えたS先生はゆっくりと息を吸い、私に問いかけました。「**本当に美味しい米の作り方を知ってるか?**」。肥料、水、気候……そんなものが頭に浮かびました。少し間を置き、S先生は言いました。「^{たねもみ}種粳に、冷水をかけるんだ」。意外な答えに、私は「なぜです

か」と尋ねました。「種粳は、温かい水につけるとすぐに芽を出す。そうしてできた苗は弱く、味も劣る。かたや、冷水につけるとなかなか芽を出さないが、厳しい環境の中でできた苗は強く、本当に美味しい米に育つ」。そして、こう結んだのです。「おまえがやってきたことは決して無駄ではなく、失敗でもない。この1年があったからこそ、おまえが担任したクラスの生徒たちは必ず強く、立派に成長するはずだ」。衝撃的な、そして救われた瞬間でした。

S先生の言葉を聞き、教師には、教科の専門性にとどまらない豊かな教養が必要であり、自分をもっと学び続けなければいけないと思いました。そして、S先生が、担任としての私の指導を見守ってくださっていたことに深く感謝するとともに、これまで学校で過ごしてきた時間の中で、多くの先生方からたくさんのお話を自分は学ばせてもらっていたことに気づきました。先生方への感謝の気持ちがあふれてきて、春からは生徒のためだけではなく、先生方が生き生きと活躍できるように、自分のすべてを捧げよう……そう覚悟を決めました。

あ の日から7年が経ち、勤務校も変わりましたが、どのような困難があっても前向きでいられるのは、この言葉と出会えたからだと思っています。先生方がお互いを認め合いながら生徒の可能性を最大限に高めていく学校をつくりたい。そのために今、自分が置かれている立場で何ができるか、何をすべきか。あの日以来、私はいつもそのことを考え、日々を過ごしています。

新潟県立長岡高校 全日制/普通科、理数科/共学/1学年約320人/2019年度入試合格実績(現役のみ): 公立大は、東北大、東京大、名古屋大、大阪大などに176人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、早稲田大などに延べ455人が合格。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume2 2019年6月号
2019年6月20日発行 / 通巻第376号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
©Benesse Corporation 2019

お客様
サービスセンター

[フリーダイヤル] 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17